

豊中市埋蔵文化財発掘調査概要

平成 12 年度 (2000 年度)

平成 13 年 (2001 年) 3 月

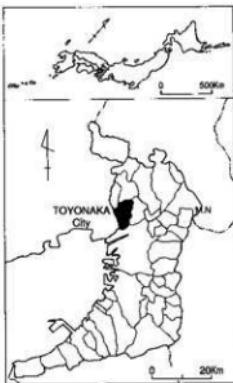
豊中市教育委員会

【豊中市埋蔵文化財発掘調査概要 平成12年度(2000年度) 正誤表】

頁	誤	正
22頁 4行目	、類	N類
25頁 参考文献	(1987)	(1997)
46頁 第38図	MT47 TK15	TK47 MT15
49頁 第40図	(1:500)	(1:250)
56頁 4行目	占る	占める
70頁 23行目	開道にからも	開道からも

豊中市埋蔵文化財発掘調査概要

平成 12 年度 (2000 年度)



平成 13 年 (2001 年) 3 月

豊中市教育委員会

序 文

豊中市は、大阪府の北部に位置し、西は兵庫県に接しています。県境を流れる猪名川から常に豊かな水がもたらされ、北方の千里丘陵にかつて広大な森林をひかえたこの地では、古くから人々の生活の場が育まれ、多くの歴史的遺産を受け継いできました。一方、大都市圏との地理的な関係から、早くから近郊都市あるいはベッドタウンとしての大規模開発が足早に進められ、すみやかに埋蔵文化財の保護に取り組む必要がありました。しかしながら、近年では都市開発が沈静化しつつあり、土地利用の形態が変化してきたことを受けて小規模な開発が増加するなど、新たな対応が求められています。

本書は郷土の文化財としての埋蔵文化財の重要性をふまえ、国ならびに大阪府の補助を受けて実施した緊急発掘調査の概要報告です。本書では、平成12年度に調査を実施した原田遺跡・穂積遺跡・本町遺跡および各遺跡における確認調査に加え、平成11年度後期に調査を実施した原田遺跡の成果も合わせて掲載しました。原田遺跡では、これまで古文書でしか知られていなかった原田城南城の堀削を確認し、穂積遺跡では弥生時代終末期～古墳時代前期の集落を検出するとともに、鋳造関連土製品が出土し、銅鏡未成品とあわせて全国でも稀少な資料を提示するなど、各遺跡で新たな知見が得されました。

永きにわたって受け継がれてきた貴重な歴史的遺産は、わたしたち現代にくらす人間にとっても大切な知識をもたらしてくれます。本書が、郷土豊中の豊かな未来づくりに役立つことを願ってやみません。

調査の実施にあたっては、土地所有者、工事関係者、近隣の住民の皆様に、深いご理解と多大なご協力を賜りました。また文化庁、大阪府教育委員会ならびに関係諸機関には、格別のご指導とご配慮をいただきました。このような各方面の方々のお力添えにより、豊中市の文化財保護行政が推進できましたことを、ここに厚く感謝いたしますとともに、今後ともより一層のご理解とご支援をお願い申し上げる次第です。

平成13年(2001年)3月30日

豊中市教育委員会
教育長 浅利敬一郎

例　　言

1. 本書は、平成12年度国庫補助事業（総額9,000,000円、国庫50%、市費50%）として計画、実施した埋蔵文化財の緊急発掘調査の概要報告書である。また、平成11年度国庫補助事業として実施した原田遺跡第3次調査の成果を併せて収録するものである。
2. 平成12年度事業として、平成12年4月17日から平成13年3月30日までの間、発掘調査ならびに整理作業を実施した。
3. 発掘調査は、本市教育委員会社会教育課文化財保護係が実施した。詳細は下表に掲げる。
4. 本書の作成は、各報告の執筆を調査担当者が実施したが、第Ⅲ章3は橋田が執筆した。また、第VI章は各調査担当者の見解をもとに、橋田が執筆した。
なお、全体の図集を橋田が行なった。
5. 各挿図に掲載した方位表記のうち、M.N.は磁北、Nは真北を、また表記のないものは、略北を示す。
6. 挿図・本文中の土色表記の基準は、「新版標準土色帖 1994年版」に基づく。
7. 插図に掲載した出土遺物の縮尺は原則的に1：4とする。
8. 各調査地の土地所有者、施工業者ならびに近隣住民の方々には、文化財の保護に対して深いご理解とご協力をいただいた。併せてここに明記し、深謝いたします。

平成11年度（平成12年2月以降）発掘調査一覧

遺跡名	次数	調査地	調査面積	担当者	調査期間
原田遺跡	第3次	原田元町2丁目204	39m ²	陣内高志	2000年3月1日 ～3月16日

平成12年度発掘調査一覧

遺跡名	次数	調査地	調査面積	担当者	調査期間
原田遺跡	第4次	曾根西町2丁目125 125-1	82m ²	陣内高志	2000年4月17日 ～5月19日
本町遺跡	第26次	本町3丁目26・38 38-1	452m ²	清水 篤	2000年4月19日 ～6月30日
植積遺跡	第27次	服部西町1丁目849-6	79m ²	橋田正徳	2000年5月8日 ～5月26日

目 次

第Ⅰ章 位置と環境	(橋田)
1. 地理的環境	1
2. 歴史的環境	1
第Ⅱ章 原田遺跡第3次調査	(陣内)
1. 調査の経緯	7
2. 調査の成果	
(1) 基本層序	7
(2) 弥生時代の遺構と出土遺物	9
(3) 中世の遺構と出土遺物	10
(4) 中世末期以降の遺構と出土遺物	12
第Ⅲ章 原田遺跡第4次調査	(陣内)
1. 調査の経緯	17
2. 調査の成果	
(1) 基本層序	17
(2) 弥生時代の遺構	18
(3) 中世の遺構と出土遺物	18
(4) 近世の遺構と出土遺物	24
3. 第3・4次調査の成果と課題	(橋田) 26
第Ⅳ章 本町遺跡第26次調査	(清水)
1. 調査の経緯	33
2. 調査の成果	
(1) 既往の調査	34
(2) 検出した遺構と出土遺物	34
3. まとめ	47
第Ⅴ章 穂積遺跡第27次調査	(橋田)
1. 調査の経緯	49
2. 調査の成果	
(1) 基本層序	50
(2) 1区の遺構と出土遺物	53
(3) 2区の遺構と出土遺物	56
(4) 3区の遺構と出土遺物	63
3. まとめ	68
第VI章 確認調査の成果	71

挿図・表目次

(第Ⅰ章)

第1図 市内遺跡分布図 (1:50,000) 3

第2図 調査地点と周辺の地形 (1:40,000) 5

(第Ⅱ章)

第3図 調査範囲図 (1:300) 7

第4図 調査位置図 (1:5,000) 7

第5図 調査区平面・断面図 (1:50) 8

第6図 弥生時代の主要な遺構 9

第7図 土坑1平面・断面図 (1:20) 10

第8図 中世の主要な遺構 10

第9図 井戸1平面・断面図 (1:30) 11

第10図 中世末期以降の主要な遺構 12

第11図 堀1および溝1~3平面・断面図 (1:50) 13

第12図 出土遺物 (1:4・1:8) 15

(第Ⅲ章)

第13図 調査範囲図 (1:500) 17

第14図 調査区平面図 (1:150) 18

第15図 A~C区平面・断面図 (1:100) 19・20

第16図 出土遺物 (1:4) 23

第17図 溝2平面・断面図 (1:40) 24

第18図 原田城復元図 (1:5,000) 26

第19図 原田城周辺の地形モデル 27

第20図 「原田村改正絵図」にみる城郭関連字名の分布 29

第21図 「攝津国豊能郡原田村絵図」文政七年 (1824年) 31

(第Ⅳ章)

第22図 調査範囲図 (1:500) 33

第23図 調査位置図 (1:5,000) 33

第24図 調査区平面・断面図 (1:100) 35・36

第25図 堪穴住居1平面・断面図 (1:40) 37

第26図 堪穴住居1 カマド付近遺物出土状況 (1:10) 38

第27図 カマド内出土刀子 (1:2) 38

第28図 土坑2出土遺物 (1:4) 39

第29図 堪穴住居1出土遺物 (1:4) 39

第30図 堪穴住居2平面・断面図 (1:40) 40

第31図	堅穴住居 2 出土遺物 (1:4)	40
第32図	堅穴住居 3 平面・断面図 (1:40)	41
第33図	堅穴住居 4 出土遺物 (1:4)	42
第34図	溝 10 出土遺物 (1:4)	42
第35図	土坑 1 遺物出土状況	43
第36図	土坑 1 出土遺物 1 (1:4)	44
第37図	土坑 1 出土遺物 2 (1:4)	45
第38図	蓋杯(杯身)の口径比較	46
第39図	遺構配置模式図 (1:500)	48
(第V章)		
第40図	調査範囲図 (1:250)	49
第41図	調査地位置図 (1:5,000)	49
第42図	調査区平面図 (1:100)	52
第43図	井戸 1 出土遺物 (1:4)	53
第44図	溝 1 出土遺物 (1:4)	53
第45図	1 区平面・断面図 1 (1:40)	54
第46図	1 区平面・断面図 2 (1:40)	55
第47図	S P - 4 出土遺物 (1:4)	56
第48図	S P - 4 断面	56
第49図	住居 1 平面・断面図 (1:40)	57
第50図	住居 1・溝 6 出土遺物 (1:4)	57
第51図	2 区平面・断面図 1 (1:40)	58
第52図	2 区平面・断面図 2 (1:40)	59
第53図	土坑 4・溝 4 平面図 (1:10)	60
第54図	土坑 4 出土遺物 (1:4)	60
第55図	溝 4 出土遺物 (1:4)	61
第56図	溝 7 出土遺物 (1:4)	61
第57図	井戸 2 出土遺物 (1:4)	61
第58図	落ち込み 1 出土遺物 (1:4)	62
第59図	落ち込み 1 下柱穴出土遺物 (1:4)	63
第60図	土坑 5 出土遺物 (1:4)	63
第61図	土坑 5 平面・断面図 (1:20)	63
第62図	土坑 9 出土遺物 (1:4)	64
第63図	土坑 9 平面・断面図 (1:10)	65
第64図	3 区平面・断面図 1 (1:40)	65
第65図	溝 9・13 出土遺物 1	66

第66図	3区平面・断面図2 (1:40)	66
第67図	3区平面・断面図3 (1:40)	67
第68図	柱穴出土遺物 (1:2・1:4)	68
第69図	穗積遺跡内集落構成模式図 (1:5,000)	69
(第VI章)		
第1表	確認調査一覧表	71
第70図	調査地点位置図 (1:50,000)	72
第71図	トレンチ掘削状況	73
第72図	トレンチ平面・断面図	73
第73図	トレンチ掘削状況	73
第74図	トレンチ断面図	73
第75図	トレンチ掘削状況	74
第76図	トレンチ断面図	74
第77図	トレンチ掘削状況	74
第78図	トレンチ断面図	74
第79図	トレンチ掘削状況	75
第80図	トレンチ断面図	75
第81図	トレンチ掘削状況	75
第82図	トレンチ断面模式図	75
第83図	トレンチ位置図	76
第84図	トレンチ1平面・断面図	76
第85図	トレンチ掘削状況	76
第86図	トレンチ断面図	76
第87図	トレンチ掘削状況	77
第88図	トレンチ断面図	77
第89図	トレンチ掘削状況	77
第90図	トレンチ断面図	77
第91図	トレンチ内堆積状況	78
第92図	トレンチ断面図	78
第93図	トレンチ掘削状況	78
第94図	トレンチ断面図	78
第95図	トレンチ掘削状況	79
第96図	トレンチ断面図	79
第97図	トレンチ掘削状況	79
第98図	トレンチ平面・断面図	79
第99図	トレンチ掘削状況	80

第100図	トレンチ断面図	80
第101図	トレンチ掘削状況	80
第102図	トレンチ断面図	80
第103図	トレンチ掘削状況	81
第104図	トレンチ断面図	81
第105図	トレンチ内堆積状況	81
第106図	トレンチ断面図	81
第107図	トレンチ掘削状況	82
第108図	トレンチ断面図	82
第109図	トレンチ掘削状況	82
第110図	トレンチ平面・断面図	82
第111図	トレンチ掘削状況	83
第112図	トレンチ平面・断面図	83
第113図	トレンチ掘削状況	83
第114図	トレンチ平面・断面図	83
第115図	トレンチ掘削状況	84
第116図	トレンチ平面・断面図	84
第117図	トレンチ掘削状況	84
第118図	トレンチ断面図	84
第119図	トレンチ掘削状況	85
第120図	トレンチ平面・断面図	85
第121図	トレンチ内堆積状況	85
第122図	トレンチ断面図	85
第123図	トレンチ内堆積状況	86
第124図	トレンチ断面図	86
第125図	トレンチ掘削状況	86
第126図	トレンチ平面・断面図	86
第127図	トレンチ掘削状況	87
第128図	トレンチ断面図	87
第129図	トレンチ掘削状況	87
第130図	トレンチ平面・断面図	87
第131図	トレンチ掘削状況	88
第132図	トレンチ平面・断面図	88
第133図	トレンチ掘削状況	88
第134図	トレンチ断面図	88

図 版 目 次

図版1 原田遺跡第3次調査

- (1) 調査区東部全景（東から）
- (2) 堀1完掘状況（北西から）

図版2 原田遺跡第3次調査

- (1) 調査区西部全景（北から）
- (2) 井戸1断面（北西から）

図版3 原田遺跡第3次調査

- (1) 堀1断面（調査区東壁）
- (2) 堀1断面（調査区南壁）
- (3) 土坑1断面（北から）
- (4) 土坑1断面（拡大）
- (5) ピット1断面（北から）

図版4 原田遺跡第4次調査

- (1) 調査区全景（南西から）
- (2) B区全景（南から）

図版5 原田遺跡第4次調査

- (1) A区全景（南から）
- (2) C区全景（西から）
- (3) A区堀1断面（西壁）
- (4) C区堀1断面（南壁）

図版6 原田遺跡第4次調査

- (1) 井戸1断面（北西から）
- (2) 溝2升状施設検出状況
- (3) 溝2土管検出状況

図版7 原田遺跡第3・4次調査 出土遺物

- (1) 第12図8（第3次調査 堀1）
- (2) 第12図12（第3次調査 堀1）
- (3) 第12図13（第3次調査 堀1）
- (4) 第12図14（第3次調査 堀1）
- (5) 第12図11（第3次調査 堀1）
- (6) 第16図3（第4次調査 堀1）
- (7) 第16図18（第4次調査 堀1）
- (8) 第16図18（第4次調査 堀1）

図版8 本町遺跡第26次調査

- (1) 調査区全景（北から）

図版9 本町遺跡第26次調査

- (1) 土坑1遺物出土状況（北西から）
- (2) 壊穴住居1完掘状況（北から）

図版10 本町遺跡第26次調査

- (1) 壊穴住居1カマド完掘状況
- (2) 壊穴住居1カマド付近遺物
出土状況（北から）

図版11 本町遺跡第26次調査

- (1) 壊穴住居1カマド内
刀子出土状況
- (2) 壊穴住居2・3完掘状況
(西から)

図版12 本町遺跡第26次調査

- (1) 壊穴住居3完掘状況（西から）
- (2) 柱穴3断面
- (3) 柱穴4断面
- (4) 柱穴5断面
- (5) 柱穴6断面

図版13 本町遺跡第26次調査

- (1) 壊穴住居4完掘状況（北東から）
- (2) 壊穴住居4カマド検出状況

図版14 本町遺跡第26次調査 出土遺物

- (1) 壊穴住居1床面（カマド東側）
把手付壺
- (2) 壊穴住居1床面 壺
- (3) 壊穴住居1カマド内 刀子
- (4) 土坑2 杯蓋
- (5) 土坑2 杯身

図版15 本町遺跡第26次調査 出土遺物

- (1) 壊穴住居2埋土上層 杯蓋
- (2) 壊穴住居2埋土上層 杯身
- (3) 壊穴住居4カマド付近 杯蓋
- (4) 壊穴住居4カマド付近 杯身
- (5) 土坑1下層 杯蓋
- (6) 土坑1下層 杯身
- (7) 土坑1上層 杯蓋
- (8) 土坑1上層 杯身

図版16 本町遺跡第26次調査 出土遺物

- (1) 土坑1下層 壺
- (2) 土坑1下層 壺
- (3) 土坑1下層 器台脚部
- (4) 土坑1上層 壺
- (5) 土坑1上層 壺
- (6) 土坑1上層 壺底面

図版17 穂積遺跡第27次調査

- (1) 1区全景(北から)
- (2) 1区全景(南から)

図版18 穂積遺跡第27次調査

- (1) 2区全景(西から)
- (2) 住居1全景

図版19 穂積遺跡第27次調査

- (1) 3区全景(北から)
- (2) 3区全景(南から)

図版20 穂積遺跡第27次調査 出土遺物

- (1) 第43図7 (1区井戸1)
- (2) 第47図1 (1区S P - 4)
- (3) 第56図2 (2区溝7)
- (4) 第57図2 (2区井戸2)
- (5) 第58図5 (2区落ち込み1)
- (6) 第58図8 (2区落ち込み1)
- (7) 第59図1 (2区落ち込み下柱穴)

図版21 穂積遺跡第27次調査 出土遺物

- (1) 第65図1 (3区溝9)
- (2) 第65図3 (3区溝9)
- (3) 第65図2 (3区溝9)
- (4) 第68図1 (3区S P - 26)
- (5) 第62図1 (3区土坑9)
- (6) 第62図2 (3区土坑9)

図版22 穂積遺跡第27次調査 出土遺物

- (1) 第62図7 (3区土坑9)
- (2) 第62図6 (3区土坑9)
- (3) 第62図8 (3区土坑9)
- (4) 第62図9 (3区土坑9)
- (5) 第62図12 (3区土坑9)
- (6) 第60図1 (3区土坑5)

第Ⅰ章 位置と環境

1. 地理的環境

豊中市は五月山山系南方一帯に広がる丘陵及び段丘によって形成される北半部と、猪名川及び神崎川(旧淀川)などの沖積作用により形成された平野部からなる南西部の異なる地形によって構成される。

このうち、北部の丘陵・段丘は箕面川と千里川を地形界に待兼山丘陵と千里丘陵から派生する通称豊中台地と呼ばれる中低位段丘に区分できる。これらの丘陵裾野に広がる段丘一帯は起伏の乏しい地形を呈し、旧石器時代以降、様々な形で人々の生活の場として好適な環境をもたらしてきた。

なお、本報告第Ⅱ・Ⅲ章で報告する原田遺跡は豊中台地南西端の低位段丘および最低位段丘に位置し、第Ⅳ章で報告する本町遺跡は千里川南岸にある台地北部に立地する。

一方、南部一帯の沖積地は、縄文海進に代表される海水位の変動、猪名川・神崎川などの沖積作用により陸化した経緯もあり、明確に安定した生活領域が形成されるようになるのは縄文時代以降のことである。その一方で、大阪湾最奥部に注ぐ猪名川・神崎川の河口に接するという地理的環境は、以後流通の発達とともに瀬戸内海沿岸部と近畿内陸部を繋ぐ中繼点としての基盤を備えることとなり、奈良・京都における宮都の成立を契機に、臨海部は必然的に陸海上交通の要衝として繁栄することになる。また、近世にいたる時代を通して進行した陸化は、弥生時代以降、開発対象地を用意することになり、一帯は耕地の拡大とともに先進農業地帯としての発展を促すこととなる。

本報告第Ⅴ章で報告する穂積遺跡は台地南端の段丘崖裾野からやや離れた天竺川西岸の微高地に立地する。

2. 歴史的環境

豊中市内には後期旧石器時代以降、近世にいたる70余りの遺跡が周知されている。これらの遺跡は各時代において特筆される特徴が見られるが、本書では原田・穂積・本町の3遺跡を中心に関連する各時代の動向について概観する。

弥生時代 市域における弥生集落の形成は沖積地上に立地する小曾根遺跡・勝部遺跡に代表されるが、このほか穂積遺跡で前期中葉の遺物が採取され、また原田遺跡・山ノ上遺跡では散発的な遺構が検出されるなど、沖積地一帯から段丘周辺の一部にかけて、散漫な小集落が展開した可能性がある。

中期になると、前期にはじまる二遺跡は拡大し拠点的な集落へと発展する一方、新免遺跡・宮の前(螢池北)遺跡など段丘上に中規模の集落が出現する。これら中期に出現する集落は、墓域

2. 歴史的環境

を個別に形成するなど、独自性をもった複数の集団が散漫に集合する形態をとることが指摘されている。このうち、新免遺跡の聚落は中期中葉に拡大し、後葉には無文土器が出土した大型の方形周溝墓が作られるなど、集落内の階層分化が進行する中で盛期を迎える。また、中期末から後期にかけて、本町遺跡や山ノ上遺跡、岡町北遺跡など新免遺跡周辺に新たな小聚落が出現する。これら小聚落は、新免遺跡が衰退の一途を辿る終末期までに消滅するなど、母聚落と消長を共にすることから、盛期を迎えた母聚落から分派した集団によって作られた可能性を考えられる。一方、台地の南西端に位置する曾根遺跡においても、中期末に聚落が出現する。曾根遺跡の聚落は後期になると急速に拡大し、その一部は台地裾野に広がる最低位段丘上の原田遺跡まで活動の領域を広げる。本書第II・III章で報告する原田遺跡第3・4次調査で検出された粘土探掘坑などは、その痕跡の一端を示すものと言えよう。

このように台地上では弥生時代中期末から後期に聚落の交代が盛んに行われ、多くの聚落は終末期の段階で衰退する傾向が見られる。

一方、沖積地では中期以降小曾根遺跡・勝部遺跡などの拠点的な聚落が継続的に展開する他は、服部遺跡などで極小規模な聚落の展開がみられるにとどまる。しかし、台地における聚落が衰退しはじめる終末期になると、猪名川下流域一帯の上津島遺跡・鳥田遺跡や、天竺川流域の穂積遺跡・服部遺跡などで本格的な聚落が展開するようになる。これらの聚落から出土する遺物の中に搬入品が含まれることはこの時期の特徴として指摘されるところであるが、丘陵上の聚落と比較した場合、沖積地における諸聚落の出土量は圧倒的であり、聚落が活発な流通を背景に拡大していく様相が窺える。その中でも、穂積遺跡は、過去の調査において4間×3間以上の縦柱建物が検出され、また銅鏡未製品が出土するなど、猪名川河口域から淀川中流域へ向かう流通上の拠点としての性格を濃厚にしていく。本書第V章で報告する穂積遺跡第27次調査区では、鋳造関連遺物が出土し、第18次調査区で出土した銅鏡未成品とあわせて、穂積遺跡において銅製品の生産が行われていたことを裏付けることとなった。

古墳時代 先述のとおり、豊中台地では古墳時代前期には多くの聚落が衰退もしくは消滅し、沖積地でも弥生時代終末期に出現した聚落の様相が二極化するなどの大きな変動が見られる。特に、沖積地では猪名川流域の諸遺跡が継続的に拡大していくのに対し、天竺川流域に位置する小曾根・服部・穂積遺跡では聚落域が移動し、衰退の兆しを見せはじめる。そして中期以降には小曾根遺跡・穂積遺跡で造構の散漫な分布が確認されるだけで、まとまりのある聚落はみられなくなる。このような二極化の背景には、猪名川河口域における流通基盤の安定化や、天竺川流域における自然環境の変化などの諸要因を想定することもできる。しかし、古墳時代後期になると穂積遺跡では直径18mほどの円墳が作られるなど、首長層の成長が見られる点は桜塚古墳群の動向とあわせて注意を要するところである。

一方、豊中台地では新免遺跡において、前期後半頃から散漫ではあるが再び聚落が展開しはじめる。そして、桜井谷窯跡群における須恵器生産の開始にあわせるかのように、後期初頭になる



1. 太政橋古墳群 12. 北万葉山遺跡 23. 奈寺山東寺跡 34. 間町西遺跡 45. 曹氏道跡 56. 宮内遺跡
2. 菊池春日山古墳群 13. 徒歩谷麻塚群 24. 研究山古墳群 35. 横笛古墳群 46. 芬惣東遺跡 57. 利賀北遺跡
3. 寺道遺跡 14. 安佐北遺跡 25. 金谷山遺跡群 36. 下原風壓群 47. 岩田中町遺跡 58. 利賀遺跡
4. 野辺井口可遺跡 15. 安佐東遺跡 26. 本町遺跡 37. 長興寺遺跡 48. 離山元町遺跡 59. 利賀南遺跡
5. 少路遺跡 16. 安佐西遺跡 27. 新免遺跡 38. 楊塚古墳 49. 瑞應寺跡 60. 利賀西遺跡
6. 板井和石琴敷寺跡 17. 安佐遺跡 28. 萩原東遺跡 39. 堀幡曾布跡 50. 豊島北遺跡 61. 猪豆の荒造跡
7. 乳屋下遺跡 18. 朝川墓地附近 29. 伊勢遺跡 40. 早田町遺跡 51. 金谷南遺跡 62. 猪沼西遺跡
8. 伴富山古墳 19. 伊方崩山遺跡 30. 山ノ上遺跡 41. 諏訪遺跡 52. 旗山遺跡 63. 鶴情遺跡
9. 伊東山遺跡 20. 伊方崩山古墳 31. 佐井遺跡 42. 諏訪東遺跡 53. 旗山西遺跡 64. 旗須村遺跡
10. 佐井遺跡 21. 上野遺跡 32. 朝野北遺跡 43. 朝田遺跡 54. 井作北遺跡 65. 小曾尺遺跡 74. 島江遺跡
11. 佐原遺跡 22. 遊佐田遺跡 33. 同可遺跡 44. 墓田遺跡 55. 石蓮寺遺跡
66. 春日大社 67. 利賀今名先河原
68. 上津高川東遺跡 69. 上津高川西遺跡
70. 上津高川南遺跡 71. 猪松ボンソ遺跡
72. 烏田遺跡 73. 宮内遺跡
74. 島江遺跡

第1図 市内遺跡分布図(1:50,000)

と新免遺跡・本町遺跡の一带の様相が大きく変わる。特に本町遺跡西半部から新免遺跡北東部にかけての一帯は、焼け歪んだり融着した須恵器不良品が投棄された土坑等が検出されるなど、須恵器生産と密接に関連する施設の存在が想定される。また、本町遺跡西部中央付近では中核的な建物群の一部と示唆される4間×3間の総柱建物をはじめとする大型建物群の展開がみられる一方で、堅穴住居を中心とする住居群も検出されており、集落が異なる集団によって複雑に構成されていたことが窺われる。本書第IV章で報告する第26次調査区の堅穴住居群は、このような複雑な様相を呈する集落構成を検討する上での一つの指標となろう。

古代 弥生～古墳時代にかけて成立した集落の多くは、その立地環境をほとんど変えずに8世紀代まで展開する。しかし、9世紀頃から猪名川下流域を除く一般の集落は徐々に解体はじめめる。その一方で、既往の集落領域とは異なる立地にも散発的な遺構の展開が見られるなど、新たな動きが起きる。また、この時期から曾根遺跡では官衙風の傑出した建物群が、やや遅れて穗積遺跡でも大型建物群が展開するとともに院宮王臣家などによる大規模開発が試みられるなど、在地における集落の変動と時を同じくして耕地再編の動きも活発になる。

このような集落・耕地の再編をめぐる変動は10世紀後半に一定の結幕を迎える。10世紀中頃におきた「シダラ神事件」は、新たな家族構成を基礎とする農業経営体、いわゆる田堵層の台頭を象徴する事件であったが、その背景には旧集落や大型建物群の廃絶に体言される弥生時代から引き継がれた伝統的な社会関係の解体があったと言えよう。

中世 10世紀後半～11世紀前半にかけて、市城では猪名川下流域を除いて明確な集落は見られず、建物などの遺構が散発的に確認されるだけにとどまる。しかし、この時期にかけて開発が進行し、摂關家領として垂水西牧・椋橋莊が文献に登場する11世紀半ばからは、小曾根・穗積遺跡をはじめとする名主層を中心とした集落の形成がはじまる。のちに垂水西牧六車郷の中核的村落となる原出村（原田遺跡）も、この時期に成立したものと考えられるが、今のところ近接する曾根遺跡において若干の遺構を確認するだけで、この時期の様相については明確ではない。

原田郷に関する記事が文献に登場するのは、1097年の伊勢神宮役夫工使に対する原田庄司季正の盜暴に関する一件であるが、その後、六車郷下司の罷免に伴う神人の發向（1265年）や住人による神木汚穢など、垂水西牧の他の郷と同じ動向が見られる。また、1344年には当郷の近辺にあったとされる火炊領六車御稻田の供御米抑留に関して、在地領主と考えられる原田兄弟の記載が見え、1451年の『勝尾寺藏末卷敷賦日記』では原田氏の記載が（『勝尾寺文書』）、また1551年には『春日神供米切出注文』が池田氏から原田右衛門尉宛に送られる（『今西家文書』）など、14世紀半ばから当郷の領主として原田氏が頭角を表す。これらの文献をみると、原田氏は一定の独立性を保つつもり、摂津守護（細川氏）や池田氏とも関係を有したようであるが、田能村との間に起きた久米井争論（1461年）のときには文献に登場せず、興福寺をはじめとする莊園領主に認識されるほどの有数の領主ではなかったといえる。

原田氏の出現後、1470年前後には原田城の初見がみられ（『夜久氏文書』）、この時期までは原



第2図 調査地点と周辺の地形 (1 : 40,000)

2. 歴史的環境

田氏の居館として原田城が存在したことが想定できる。原田城については文献により、村落北方の舌状丘陵に位置する北城と、集落内に位置する南城の二城の存在が伝えられている。これら二つの原田城は立地の相違から平時の居館と有事の城という違いが反映された結果と推測してきたが、第3・4次調査の成果により再考を促すこととなった。

原田城（北城）については、原田遺跡第1次調査で確認され、南北約60mにわって掘削された平面「ヨ」の字状を呈する外堀に、ほぼ半町規模の主郭を有することが明らかになった。北城は主郭部より15世紀から16世紀中頃の遺構を検出していることから、1547年の細川晴元・三好宗三の軍による開城までの期間、継続的に使用されたと考えられる。開城後、原田城に関わる記録はしばらく見られなくなるが、1570年の織田信長入京後の内乱に伴う池田城攻撃時に陣城として再び現れ、そして1571～72年の荒木村重の乱には池田城とともに織田側の陣城にされる。この段階で、原田城には幅15m、深さ4～5mもの大規模な内堀が掘削され、その景観を著しく変えることになるが、荒木村重の乱後は廃城したらしく近世以降は屋敷地となる。

一方、南城に関しては明治10年（1877年）の原田村改正絵図（『原田村野口家文書』）や文政七年（1824年）の摂津豊島郡原田村絵図・下絵（『原田郷中倉村文書』）などから、方半町規模の方形区画に内堀を有する主郭と、集落南端に東西方向を弧状に伸びる外堀が推定できるだけで、その実態については明確にされていなかった。本書第II・III章で報告する第3・4次調査では、内・外堀の一部を検出し堀削の一端が明らかになるなど、南城の実態を検討する上で多くの知見をもたらした。

第Ⅱ章 原田遺跡第3次調査

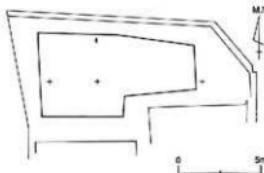
1. 調査の経緯

当調査区は原田元町二丁目204に所在する。平成12年（2000年）1月20日に提出された埋蔵文化財発掘の届出に基づいて確認調査を実施したところ、地表下約70cmで遺構が確認された。当初は慎重工事を指示していたが、その後、建物の設計変更によって基礎深度が遺構面まで及ぶこととなり、本調査を実施することとなった。調査は3月1日から3月16日の期間を要した。

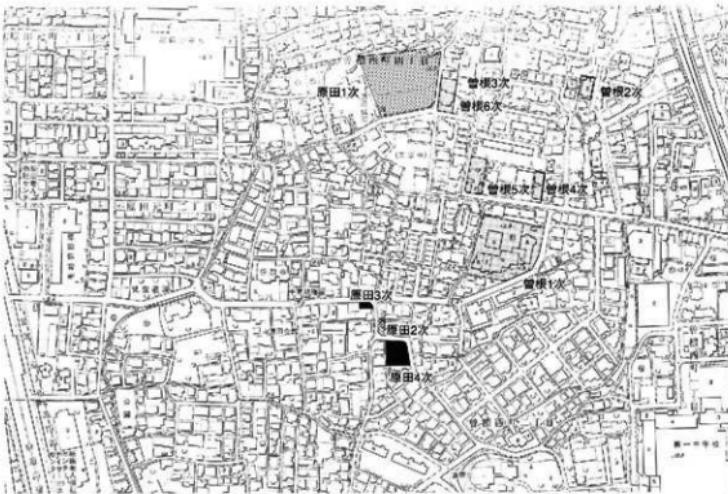
2. 調査の成果

（1）基本層序

当調査地では盛土以下、にぶい黄橙色細粒砂～粗粒砂等、黒褐色シルト～粘土、段丘堆積層である灰白色シルト等の大別3層が堆積し、盛土を除く各層上面において遺構を確認した。

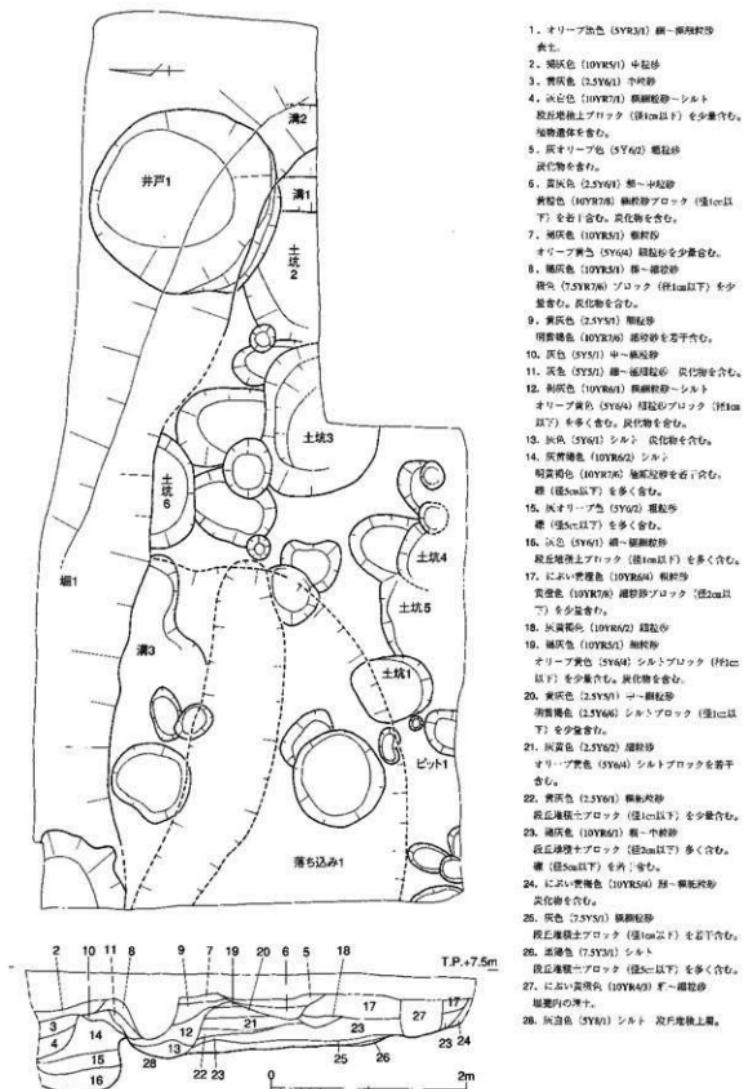


第3図 調査範囲図 (1 : 300)



第4図 調査地位置図 (1 : 5,000)

2. 調査の成果



第5図 調査区平面・断面図 (1 : 50)

調査区上面を覆う盛土は、第2次世界大戦後に行われはじめた宅地造成に伴う埋め立て土ととなり、近世以降継続的に行われた宅地開発や整地等によるものと考えられる。また、同層直下には耕作土がみられず、耕作地として利用された形跡は認められないなど、周辺の調査区とは異なる様相を呈する。

盛土直下に堆積するにぶい黄橙色細粒砂～粗粒砂等は、近世以降の遺構埋土である。断面観察で、これらの遺構はほぼ同一面からの掘削が予想されることから、盛土下に遺構面の基盤となる基本層の堆積が考えられる。しかし、調査区内のいずれの壁面でも、基本層と推定できる堆積層は確認されなかったため、その状況は明確ではない。

黒褐色シルト～粘土は弥生時代の包含層である。同層は上層から掘削された中近世の遺構によって大部分が削平され、南壁の一部で確認するにとどまった。なお、中世の遺構は同層の上面から掘削されたもので、弥生時代の一部の遺構についてもその可能性が残る。しかし、同層上面における検出は困難であり、これらの遺構は段丘堆積層上面で検出した。

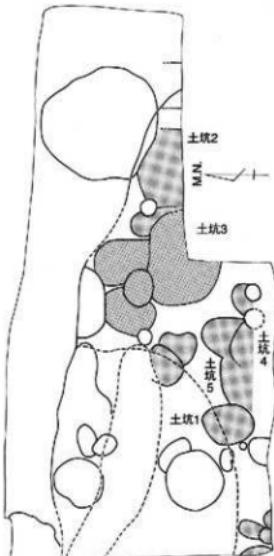
以上、遺構の時期は、弥生・中世・中世末期以降の三時期に区分できる。これら各時期の主要な遺構について報告する。

(2) 弥生時代の遺構と出土遺物

弥生時代の遺構は調査区南側を中心に、土坑が17基以上、ピット3基を検出した。このうち土坑については、同様の特徴を有することから「土坑群」として一括して扱うこととした。

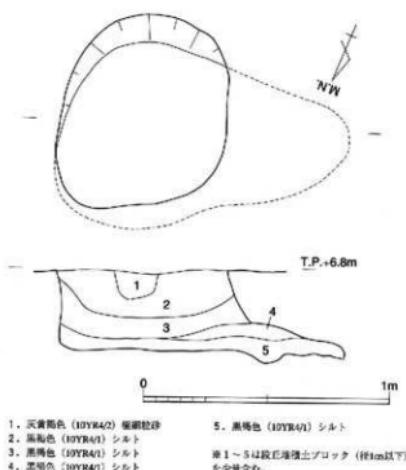
土坑群 調査区の南側において密集した状態で検出した。このうち土坑1～5をみると、長軸0.6～1.5m、深さは0.2～0.35mをはかる。平面形は橢円形、もしくは不整円形である。各々の土坑は形状や規模に多少の差異は認められるものの、埋土等の特徴についてはほぼ共通する。なかでも、土坑1は土坑群の性格を考える上で特徴的であることから、その詳細について述べることにする。

土坑1は長軸0.8m、短軸約0.6m、深さ0.35mをはかり、平面不整円形を呈する。土坑の下部は西側に向かってえぐり取るように掘削され、袋状の断面形を呈する。また、基底部の周囲には幅10～15cm、深さ2～5cmほど浅い掘り込みが巡る。埋土は黒褐色シルトに、段丘堆積土等のブロック土が含まれてい

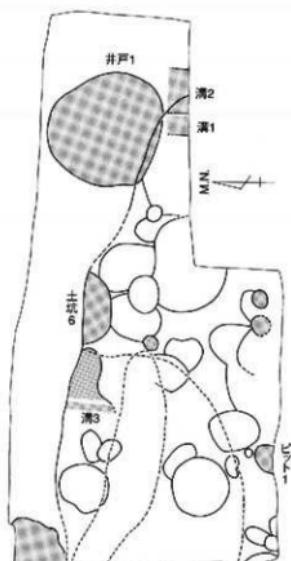


第6図 弥生時代の主要な遺構

2. 調査の成果



第7図 土坑1平面・断面図 (1 : 20)



第8図 中世の主要な遺構

ることから、人為的な埋め戻しと考えられる。なお、土坑1の基底部周間に巡る浅い掘り込みは、採掘者が基底面の中央から周囲の土を採掘したために生じた結果と考えられ、粘土採掘方法の一端を示す事例として注目される。

土坑1をはじめとするこれらの土坑は断面や堆積の状況がほぼ共通することなどから、粘土採掘坑と考えられる。

出土遺物 (第12図1~4) 土坑群内から弥生土器の細片が少量出土した。

このうち、土坑1からは第12図1~3が、土坑2から第12図4が出土した。1は短頭壺の頸部~体部である。頸部は、丸みを帯びた体部からゆるやかに立ち上がる。調整は器壁の風化によつて不明である。2・3は壺の底部と考えられる。2は底径5.3cmをはかり、扁球形の体部が推定できる。

3は底径6.0cmをはかり、体部外面は摩耗しているが、ナア・指揮が確認できる。4は底径4.6cmで、体部外面にハケ調整が認められる。1~4は弥生終末期前後の特徴を有することから、土坑群の掘削時期も当該期の可能性が考えられる。

(3) 中世の遺構と出土遺物

中世の遺構としては、溝2条・土坑1基・井戸1基・ピット4基以上が挙げられる。以下、主要な遺構について報告する。

溝1 調査区南東端で検出した、南北に伸びる溝である。井戸1と堀1の掘削により大部分が削平されているが、壁面観察から幅0.3m以上、深さ0.3m以上をはかるものと推定される。埋土は2層に大別でき、上層は段丘堆積土などのブロック土が含まれ、下層は褐灰色~灰色極細粒砂が堆積する。溝2とは

一部重複し、ほぼ並行する方向で掘削されるなど、その様相は類似する。溝1からは遺物の出土はなく、その時期については不明であるが、溝2により削平されていることから、13世紀末以前のものと考えられる。

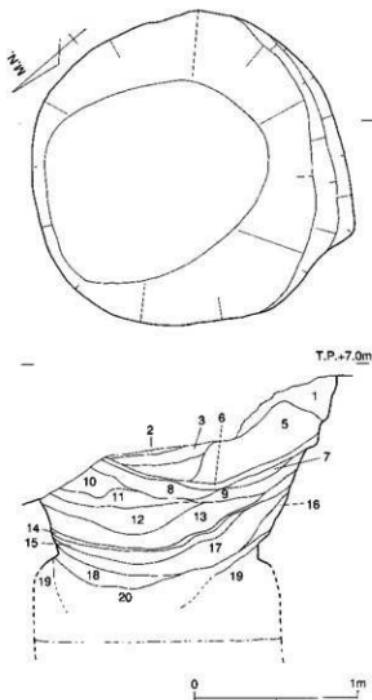
溝2 溝1の東側で検出した幅約1.0m、深さ0.3m前後をはかる溝である。埋土は2層に大別でき、上層は段丘堆積などからなるブロック土が含まれ、下層は褐灰色～灰色極細粒砂が堆積する。溝中からはⅢ～Ⅳ期以降と考えられる和泉型瓦器碗、龍泉窯系割花文碗などが出土したが、細片のため固形化できなかった。出土遺物の時期から、溝2は13世紀末～14世紀代に機能したものと考えられる。

溝3 調査区北西で確認されたが、堀1によって削平を受けていた。検出した部分では、幅1.2m以上、深さは0.25mをはかる。溝2は土坑6の西側から掘削され、調査区西方へ伸びるものと考えられる。埋土は褐灰色細粒砂～極細粒砂で、段丘堆積土等からなるブロック土が含まれる。出土遺物にⅣ期とみられる瓦器碗などが出土したが、細片のため固形化できなかった。

土坑6 調査区中央部で検出した。堀1に削平されていたが、一部残存する部分では、幅0.5m、深さ0.1mをはかる。埋土は溝3とは同じ特徴を呈する。土坑からはⅢ～Ⅳ期以降と考えられる和泉型瓦器碗などが出土しており、溝1・3とほぼ同時期と考えられる。

土坑6は溝3の延長上にあり、一連の機能を有していた可能性が考えられる。

以上、溝1～3は埋土、出土遺物などで共通することから、同時期に機能していたと考えられる。これらの溝はその配置などの特徴



1. 茶色 (7SY6/1) シート 28層ブロック (厚5cm以下) を多く含む。
2. 明褐色 (7SY6/1) 繊維砂 28層ブロック (厚3cm以下) を多く含む。
磚 (厚5cm以下) を多く含む。
3. 茶色 (7SY6/1) 繊維砂 28層ブロック (厚3cm以下) を少々含む。
4. 茶色 (7SY6/1) 繊維砂 28層ブロック (厚3cm以下) を多く含む。
5. 黒茶色 (10YR3/1) 中一層瓦片 28層 (厚5cm以上) を多く含む。
6. 黑茶色 (10YR3/1) 繊維砂配分 岩丘堆積土ブロック (厚2cm以下) を含む。
7. 黑茶色 (10YR5/1) 歪曲砂 以及岩堆積土ブロック・黑褐色 (10YR3/1) シートブロック (各厚2cm以下) を含む。
8. 茶色 (10YR6/1) 繊維砂
9. 黄褐色 (2.5SY6/1) 中一層瓦片 28層 (厚5cm以下) を多く含む。
10. 黑褐色 (2.5SY6/1) 中一層瓦片 28層 (厚5cm以下) を多く含む。
11. 黑褐色 (2.5SY6/1) 繊維砂 28層ブロック (厚5cm以下) を多く含む。
12. 長灰土 (3SY6/1) 繊維砂
13. 黑茶色 (2.5SY6/1) 繊維砂 28層ブロック (厚5cm以下) ・黒褐色 (10YR3/1) シートブロック (厚2cm以下) を若干含む。
14. 黑茶色 (2.5SY6/1) 中一層瓦片 28層ブロック (厚5cm以下) を多く含む。
15. 黑褐色 (2.5SY6/1) シート 黒褐色 (10YR3/1) シートブロック (厚2cm以下) を若干含む。
16. 黑褐色 (2.5SY6/1) シート 28層ブロック (厚5cm以下) を多く含む。
17. 黑褐色 (2.5SY6/1) シート 28層ブロック (厚5cm以下) ・黒褐色 (10YR3/1) シートブロック (厚5cm以下) を少々含む。植物遺物を含む。
18. 黑褐色 (2.5SY6/1) 繊維砂 黒褐色 (10YR3/1) シートブロック (厚5cm以下) を少々含む。
19. 黑褐色 (10YR6/1) 繊維砂 28層ブロック (厚3cm以下) を少々含む。
20. 黑褐色 (10YR6/1) シート 28層ブロック・黒褐色 (10YR3/1) シートブロック (各厚5cm以下) を少々含む。
21. 黑褐色 (1.5SY6/1) シート
22. 黑褐色 (3SY6/1) 繊維砂
23. 黑色 (2.5SY6/1) 中一層瓦片 岩丘堆積土ブロック (厚5cm以下) を多量に含む。

第9図 井戸1平面・断面図 (1:30)

2. 調査の成果

からみて、当該期の屋敷地を区画していたと推定される。また、土坑6も区画溝の一部となる可能性がある。

井戸1 調査区東端で検出したが、その上面は堀1によって削平を受けている。なお、井戸1は掘削途中で壁面の崩落が予想されたため、下半部の掘削を中止した。

井戸は漏斗状の断面形を呈するが、下半部は壁面の崩落によってえぐれている。検出部分での幅は約2.5m、深さは2.2m以上をはかる。埋土は2層に大別できる。上層は、段丘堆積土などからなるブロックおよび拳大の石などを含み、埋戻し土と考えられる。また、下層は黄灰色～灰色シルト(～極細粒砂)に植物遺体などを含む自然堆積土と崩落した段丘堆積土が交互に堆積することから、機能時における激しい水位の変動により基盤層の崩落を繰り返しながら、徐々に下層部分が埋没したものと推定できる。

出土遺物（第12図5） 上層から備前焼擂鉢の口縁部片が出土した。復元口径23cmをはかり、口縁部の外縁帯は下方に突出し、1条の四線が施される。間壁編年V期の所産と考えられる。井戸1は、出土遺物から16世紀後半以降に埋め戻されたと考えられる。

ピット1 調査区南西部部分で検出した。南側半分は調査区外にあり、検出部分では直径0.45m、深さ0.15mをはかる。平面形は梢円もしくは不整円形を呈する。埋土は2層に分けられ、ともに段丘堆積土からなるブロックが含まれるが、下層はブロックが少なく、しまりが強い。

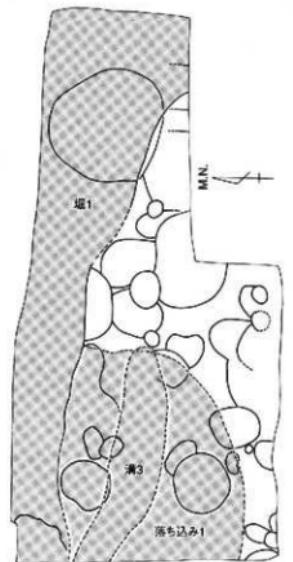
ピット1は推測の域をでないが、礎石の抜取痕となる可能性が考えられる。

出土遺物（第12図6） 埋土中から備前焼擂鉢の底部片が出土した。底径13cmをはかり、底部内面に9本前後を単位とする擂目が施される。間壁編年IV期の所産となる可能性が考えられる。

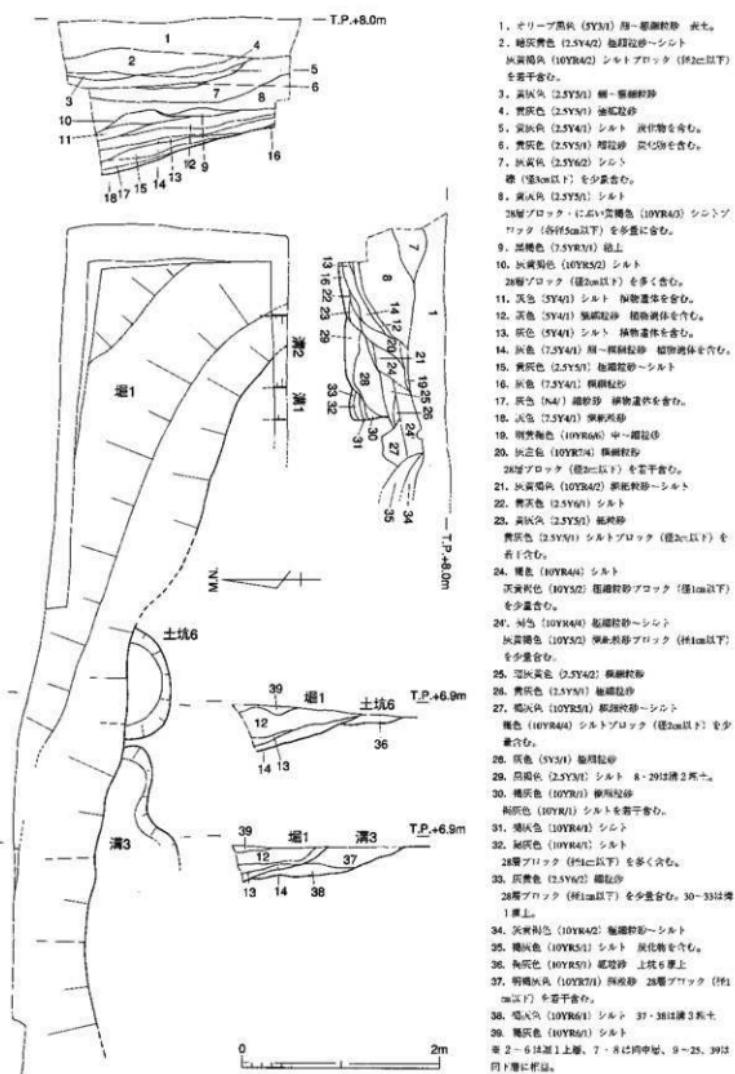
(4) 中世末期以降の遺構と出土遺物

中世末期以降の遺構としては、堀・溝1条・土坑2基・落ち込み等が挙げられる。これらの遺構は、盛り土直下から掘り込まれていることが、重機掘削後に判明した。よって、遺構の多くは掘削時に削平したため、堀1を除き検出した遺構はすべて段丘堆積層上面において基底部を確認しただけにとどまる。ここでは、堀1を中心報告する。

堀1 調査区の北側から東側にかけて検出した



第10図 中世末期以降の主要な遺構



第111図 堀1および溝1～3平面・断面図 (1:50)

2. 調査の成果

が、大部分は調査区外にあり、全容は明確ではない。検出部分での堀の規模は、幅約1.4m、深さ0.95mをはかるが、実際の規模をこれではあるかに上回る。検出部分における堀1の埋土は、少なくとも3層に大別できる。下層は灰色～褐灰色シルト（～極細粒砂）に植物遺体等を含む。堀機能時の自然堆積層であり、瓦・陶磁器片等を包含する。下層の遺物は瓦で占められ、堆積時期については明確にできなかった。中層は黄灰色シルト～極細粒砂であり、段丘堆積土のブロックや直径5cm程度の石なども含むことから埋戻し土と考えられる。上層も中層同様に黄灰色シルト（～極細粒砂）であり、壁材や炭化物・段丘堆積土のブロックを多く含むことから、埋戻し後の二次的な整地に伴うものと考えられる。中層からは、瓦や陶磁器片が多量に出土した。

出土遺物（第12図7～14） 以下、堀1から出土した遺物について報告する。掲載した遺物は、いずれも中層から出土したものである。

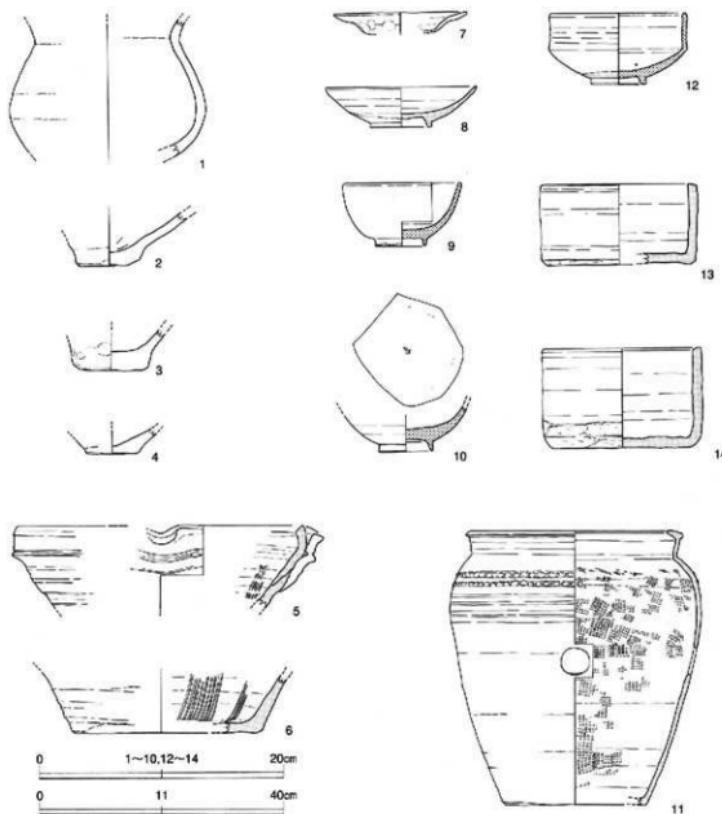
土師器 7は手づくね成形の土師器皿であり、復元口径12.4cmをはかるが、口縁は歪んでおり口径の復元には疑問を残す。口縁端部から内面にかけてナデを、体部下半部分には指頭圧痕が残る。色調は淡褐色を呈する。15世紀代の所産と考えられる。

肥前系陶磁器 8は唐津系陶器皿であり、口径12.4cm、器高3.4cmをはかる。口縁部から体部にかけてゆるやかに内反する。見込み部分に蛇の目釉剥ぎを施す。釉は黄味を帯びた緑色を呈するが、高台付近は露胎する。18世紀代に属するものと考えられる。9は、口径9.4cm、器高5.2cmをはかる磁器碗である。釉は灰白色を呈するが、白濁しており外面の菊花文は不鮮明である。高台付近は露胎する。18世紀中葉以降の所産と考えられる。10は高台径4.4cmをはかる磁器碗である。見込み部の周囲に二重の圓線を、中央には五花弁文の印判を施す。高台内側には砂目が付着する。18世紀後半以降の所産と考えられる。11は外面に黒褐色の釉を施す人壺である。口径32cm、器高45cmをはかる。口縁端部は内外に拡張され、断面「T」字形を呈する。また肩部には二条の繩条突帯を張り付ける。体部内面は粗雑なナデにより、格子目叩きが広い範囲で残る。また、体部中央付近には、焼成後に直徑7cm程度の穿孔が施されるが、機能等は不明である。11はその特徴からみて、佐賀県芦屋4号窯の製品に類似することから、17世紀前半の所産と考えられる。

京・信楽焼系陶磁器 12は口径11.2cm、器高5.9cmをはかり、口縁部が直立する磁器碗である。内外に灰白色の釉がかかるが、高台部分は露胎する。見込み部分には、重ね焼き時の胎上目の剥離痕が3か所みられる。

備前焼 13は備前焼の平底鉢である。口径13cm、器高6.7cmをはかる。内外面に鉄釉を施し、灰赤色の色調を呈する。体部は直立し、口縁部分の平坦面はわずかに外傾する。底部外面は回転ヘラケズリによる成形で、直徑8mm程度で「○」印の刻印が施される。14も平底鉢であり、口径13.2cm、器高8.2cmをはかる。内外面にぶい橙色の釉がうすくかかる。また、口縁端部の平坦面はわずかに内傾する。体部と底部の外面はともにケズリを施す。13・14のいずれも18世紀以降の所産と考えられる。

堀1は、井戸1の埋め戻し時期が16世紀後半以降となることから、16世紀後半もしくは末に掘



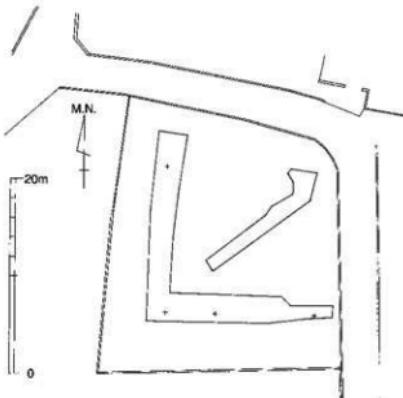
第12図 出土遺物 (1:4 ※11のみ1:8)

削された可能性が考えられる。また、堀の下層には自然堆積層がみられることから、機能時は満水状態にあったと考えられる。堀1は『原田村絵図』(1824年)で四隅が明確に描かれ、また『原田村改正絵図』(1877年)でも開口しており、この部分が埋め立てられたのは明治後半以降と推定される。一方、中層から出土した遺物の大半は18世紀以降の所産で、19世紀代の陶磁器も含み、堀1の埋戻し時期は20世紀になってからと考えられ、ほば絵図などにみられる推移と一致した変遷が窺われる。

第三章 原田遺跡第4次調査

1. 調査の経緯

当調査区は曾根西町二丁目125、125-1に所在する。平成11年（1999年）12月28日に提出された埋蔵文化財発掘の届出に基づいて、確認調査を実施したところ地表下約1mで遺構を確認した。申請地では、共同住宅の建設が予定されており、それに伴う杭の打設工事によって遺構の損壊は免れないことが判明した。これら遺構の状況を確認するため、協議の結果、本調査を行うこととなった。調査は平成12年（2000年）4月17日から5月19日までの約1か月間を要した。



第13図 調査範囲図（1：500）

2. 調査の成果

（1）基本層序

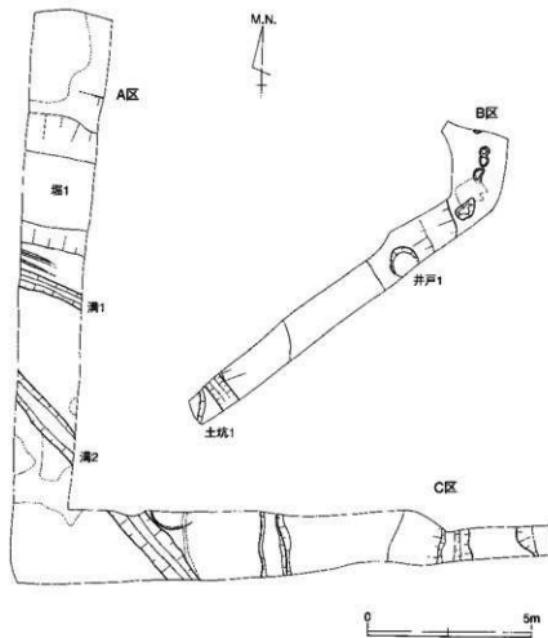
当調査地は盛土以下、旧耕作土、褐色細粒砂層、灰黄色細粒砂層、灰白色シルト層の順に堆積する。

褐色細粒砂層は、直径2cm程度の礫を含み、鉄分が斑紋状に沈着する。同層は耕作行為による巻き上げなどによって、下層との層理面は不明瞭である。また、近世以降の陶器磁を少量含むことから、当該期の耕作土と考えられる。なお、同層上面からは後述する溝1・2など近世の遺構が掘削されている。灰黄色細粒砂層も上層とほぼ同様の特徴を有することから、耕作土と考えられる。同層からは遺物は出土しなかったが、上面から後述する堀1が掘削されていることから、中世末期以前に堆積したものと考えられる。灰白色シルト層は、当調査地一帯の基盤層となる段丘堆積土である。同層上面において、弥生時代の遺構を検出した。

以上、当調査地は、盛土、旧耕作土を除く各層上面において遺構が掘削されているが、調査では各遺構面での検出が困難であったため、段丘堆積土層上面において遺構を検出した。

なお、遺構の掘削時期は、弥生時代、中世、近世以降の三時期に区分できることから、以下、主要な遺構について時期ごとに報告する。

2. 調査の成果



第14図 調査区平面図 (1 : 150)

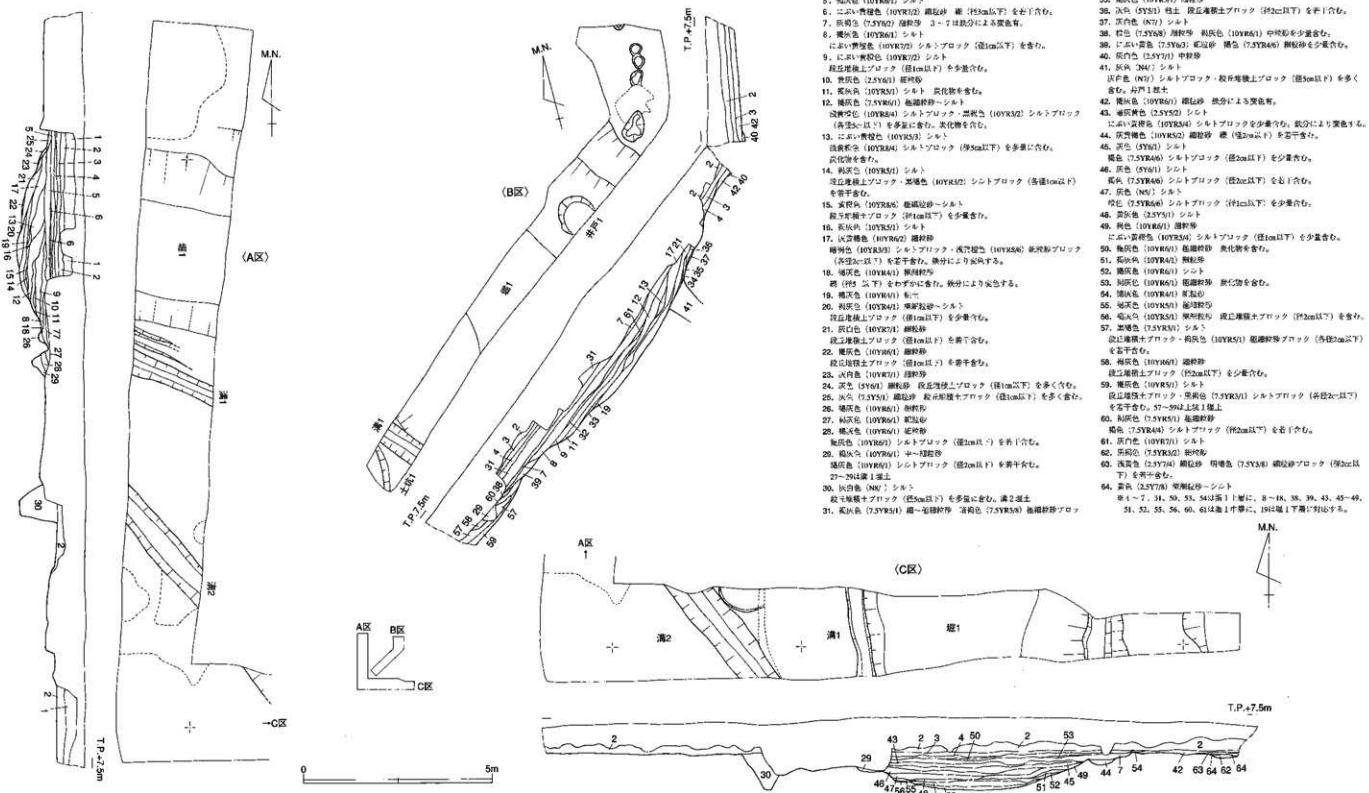
(2) 弥生時代の遺構

当調査地で、弥生時代の遺構と考えられるものは、B区で検出した土坑1基にとどまる。

土坑1 B区南端でその一部を検出した。土坑の北側は堀1、および溝1に削平されていることから形状は不明である。検出部分での幅は0.8m以上、深さは0.4mをはかる。基底面はほぼ平坦であり、断面は逆台形を呈するものと推定される。埋土は黒褐色シルトに段丘堆積土からなるブロック土を含む。埋土中からは弥生土器細片が出土したことから、当該期の遺構と考えられる。遺構の性格は明確にはできなかったが、周辺調査区の事例から粘土探掘土坑となる可能性もある。

(3) 中世の遺構と出土遺物

中世の遺構としては、堀・井戸1基・ピット等が挙げられる。以下、主要な遺構について報告する。



堀 1 調査地北部で東西方向に伸び、北東部で南へ屈曲する。堀 1 は近世以降の造構掘削や近年の開発などで削平を受けているが、検出部分における上面の幅は6.7m以上、基底面の幅は約1.3m、深さは1.1mをはかる。掘形は、検出面より0.2~0.5m下位でゆるやかな段状の平坦面を有する。埋土は、堆積状況の相違などから、少なくとも三層に大別できる。

下層には灰色~褐灰色粘土が15~20cmほど堆積し、埋土中からは瓦質土器、土師器小皿等が少量出土した。堆積状況からみて、機能時の自然堆積層と考えられる。

中層は、各区ともにみられる埋戻し土である。ただし埋土の堆積は、A・B区とC区とでわずかに様相が異なる。A・B区では褐灰色シルト層と、にぶい黄橙色等の極細粒砂~シルト層の上下二層からなる。また、上層には1cm前後の段丘堆積土からなるブロックを若干含む程度が、埋土の流入方向は明確ではない。一方、下層はブロックの単位が3cm前後で、その混入度合いも高く、またブロックの流入方向から堀 1 が北側から埋め戻されたものと想定できる。C区ではA・B区と異なり、褐灰色細粒砂等の上に灰色~黄灰色シルト(~極細粒砂)が堆積し、ブロックは含まれない。各区をとおして、中層からは弥生土器・土師器・須恵器・瓦器・輸入陶磁器等が出土したが、少量にとどまる。

上層には、各区ともに褐灰色細粒砂~シルトなどが約30cmほど堆積する。同層は近世以降の陶磁器片などを包含する。また、礫を少量含み、鉄分が斑紋状に沈着するなど、基本層序2層と類似することから、近世以降の耕作土と考えられる。

以上、堀 1 埋土の堆積状況をみると、下層に自然堆積層、中層に堀 1 が機能を停止した後の埋戻し土、上層には耕作土の堆積がみられ、その埋没過程が推定できる。このうち中層は、A・B区とC区で様相が若干異なり、埋め戻しの状況が各調査区で微妙に異なる可能性が考えられる。

出土遺物（第16図1~20） ここでは、堀 1 から出土した主要な遺物について述べる。

下層出土遺物（第16図1~3） 1は在地産の土師皿であり、復元径9.6cm、器高1.9cmをはかる。内面はナデ調整であり、体部下半に指頭圧痕を残す。色調は、にぶい黄橙色を呈する。15世紀代の所産と考えられる。2も1と同じく、在地産の土師皿であり、底部径6.2cmをはかる。底部は上げ底気味で、体部は外反する。15世紀代の所産と考えられる。3は瓦質の火鉢であり、復元径26cmをはかる。体部は直線的に立ち上がる。外面はヘラミガキ、内面はナデを施す。15~16世紀代の所産と考えられる。

中層出土遺物（第16図4~20） 4は高杯の脚部である。脚部中ほどに直径8mm程度の穿孔を施す。杯部との接合には接合法が用いられる。5は壺の底部であり、底部径4.2cmをはかる。外面は右上がりのタタキ、内面は板状工具によるナデを施す。6は壺または鉢の底部であり、底径は3.8cmをはかる。外面は右上がりのタタキ、内面は板状工具によるナデ調整を施す。5・6は弥生時代終末期前後に属するが、4は古墳時代前期の所産となる可能性が残る。

7は綠釉陶器壺の高台部分である。高台の復元径は6.2cmをはかり、削り出し高台である。施釉は高台外面まで及ぶ。また、見込み部と体部の境界に墨線を巡らす。8は桶型瓦器壺であり、

2. 調査の成果

復元径14.4cmをはかるが、細片のため口径の復元には疑問を残す。器壁は、口縁端部直下で5.5mm前後と最も厚くなる。口縁端部の内面には明瞭な沈線を巡らし、体部内外面には緻密なヘラミガキが施される。橋本編年のI-2期に相当し、11世紀後半の所産と考えられる。

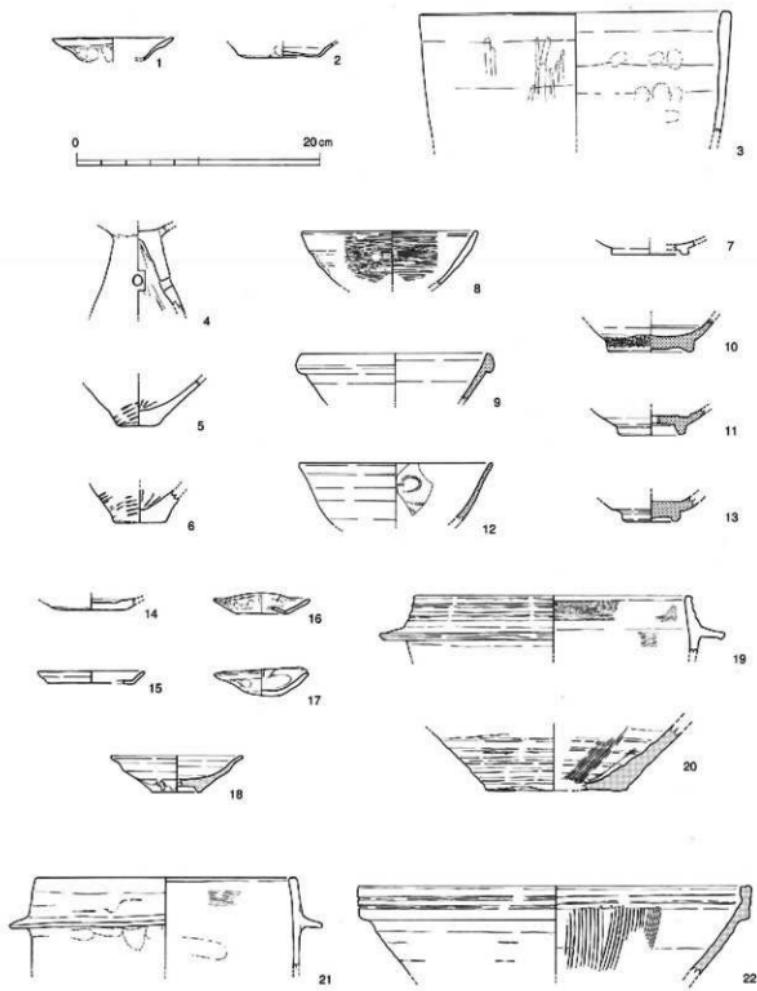
9~13は輸入陶磁器である。9・10は白磁楕のIV類に比定される。9は復元径15.4cmをはかり、釉は灰白色を呈する。10の底部は、復元径7.2cmをはかる。高台の削り出しは浅く、見込み部分には圓線を巡らす。11は白磁楕のVII類である。高台の復元径は5.6cmをはかり、高台は高く削り出す。見込みには蛇の目釉剥ぎが施される。12・13は、ともに龍泉窯系の青磁楕である。12は復元径15.6cmをはかり、体部内面には劃花文が施される。13世紀代の所産と考えられる。13は無文の青磁楃と考えられ、高台の復元径は4.6cmをはかる。高台は削り出しにより、内外面に施釉されるが粗雑である。14世紀代の所産と考えられる。

14~18は土師器である。14は、回転台土師器皿である。底部の復元径は6.0cmをはかり、橙色の色調を呈する。底部内面には回転ナデを、外面には糸切り痕を残す。15は復元径8.75cm、器高1.1cmをはかる土師皿である。口縁部外面に一段のナデを施し、体部と底部の境界は明瞭である。色調は灰黄色を呈する。16・17は、手づくね成形の土師皿である。16はいわゆるへそ皿であり、復元径7.6cmをはかる。内面は底部と体部にわけてナデを施し、体部外面下半には指頭圧痕が残る。16世紀代の所産と考えられる。17は復元径7.2cm、器高1.8cmをはかる土師皿である。器形は全体的にいびつであり、体部下半に指頭圧痕が残る。内面は、底部と体部に分けてナデを施す。16世紀代の所産と考えられる。

18は唐津焼系の皿であり、復元径10.9cm、器高3.0cmをはかる。体部外面には胎土日の一部が付着する。体部で一旦屈曲したのち、口縁端部にむかって外反する形態である。釉は、内外面ともにオリーブ灰色を呈するが、高台付近は露胎する。16世紀末~17世紀初頭の所産と考えられる。20は備前焼擂鉢である。底部の復元径は11.4cmをはかる。擂目は8本前後の櫛引きで、底部と体部の境界から口縁部にむかって施される。外面は、にぶい黄橙色を呈する。岡壁編年V期でも占相に属するものと考えられる。19は、復元口径が22.5cmをはかる瓦質の羽釜である。ほぼ直立する口縁部に、3条の凹線を巡らす。内面は横方向のナデを施す。15世紀代の所産と考えられる。

以上、堀1出土の遺物を概観した。出土遺物のうち、下層のものの中には15世紀に属する遺物も含まれているが、いずれも二次的な流入品と考えられ、堀1の掘削時期は明確にはできなかつた。ただし、堀1は中層出土遺物から17世紀初頭には埋め戻されること、また後述する井戸1が16世紀代に埋め戻されていることから、堀1は16世紀代に掘削されたものと考えられる。なお、中層出土遺物には、弥生時代後期から近世初頭前後に至る遺物が含まれ、周辺で各遺物の帰属する時期に人為的な営みがあったと推定される。

井戸1 B区の北側で検出した素掘りの井戸である。井戸の上面は堀1によって削平されていることから、上部の構造は不明である。また、調査区壁面が崩落する危険が予測されたため、掘削は井戸検出面から0.6mだけにとどめた。検出部分での直径は約1.0mをはかる。掘削部分における



第16図 出土遺物 (1 : 4)

2. 調査の成果

る埋土は、ほぼ灰色（～灰白色）粘土に段丘堆積土のブロックを含むもので、埋戻し土と考えられる。埋土中からは、土師質の羽釜片（第16図21）等が出土した。

21は、復元口径21cmをはかる。口縁部はほぼ直立し、外面に沈線や凹線はみとめられない。鉢は肩部から水平にのびる。15世紀後半以降、おそらくは16世紀代の所産と考えられる。

井戸1は、出土遺物から15世紀後半に埋め戻された可能性が高いものと考えられる。

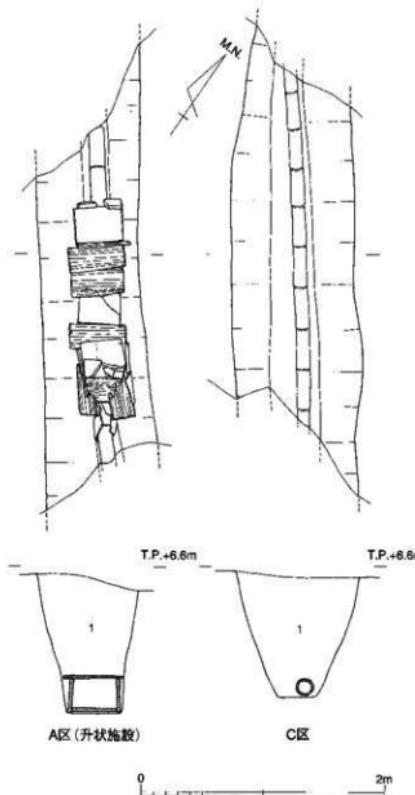
（3）近世の遺構と出土遺物

近世の遺構としては、溝2条が挙げられる。

溝1 堀1に並行する溝である。検出部分での幅は0.45～0.6m、深さは0.25～0.3mをはかり、U字状の断面を呈する。埋土は黄灰色細粒砂を主体とし、ブロック土を含む。埋土から、近世以降の陶磁器が出土したが、同化できたものは第16図22のみにとどまる。

出土遺物 22は、口径30cmをはかる堺焼擂鉢である。色調は赤褐色を呈し、外面にはススが付着する。口縁部の外縁帯は下方に張り出し、側面には二条の凹線を巡らす。擂日は隙間なく施され、口縁部付近に及んだ擂日はナデ消される。以上の特徴から、22は堺焼擂鉢II類（白神1988）に比定され、18世紀以降の所産と考えられる。

溝1は、出土遺物の時期等から、18世紀以降に埋め戻された可能性を考えられる。また、溝1は堀1に並行して掘削されており、堀1が埋め立てられたあとも周辺の土地区画に何らかの影響を与えたものと想定される。



第17図 溝2平面・断面図 (1:40)

溝 2 南東から北西へほぼ一直線にのびる溝で、A、C区で検出した。検出部分での幅は約1.0m、基底面の幅0.25～0.8m、深さ1.1mをはかり、断面は逆台形を呈する。埋土は、黄灰色シルトに段丘堆積土のブロックを含む。

A区では瓦質の土管とともに、升状の施設（第17図）を検出した。この施設は、長さ1.65m、幅0.42m、高さ0.3mをはかり、底面、側面は板状の瓦のみで並べ、上面を同様の瓦と木板で覆う構造である。施設上面では、北西側は瓦と板で整然と覆うが、南西端では板の向きを変えるなどの調整がはかられ、北西側から順次覆っていったことが推定される。土管と升状施設との接合部分は、土管や板状の瓦の小片で隙間を充填するなどの工夫がみられる。また、接合部分における土管と施設の内底面の差は3～8cmで、施設内にはごく少量の砂利が堆積するにとどまる。

C区では溝下層において、土管がほぼ一直線に接続した状態で検出された。使用された土管や接続の方法などの特徴から、A区のものと一連の造構と考えられる。

使用された板状の瓦は、長さ40cm、幅30cm、厚さ約3cmをはかり、板は長さ40～45cm、幅20cm前後、厚さ2cm程度をはかる。また、土管は直径15cm、長さ33cm、差し込み口を除くと31cmをはかる。なお、土管を使用した類例に麻田藩陣屋跡（財団法人 大阪文化財調査研究センター 1997）があり18世紀中葉以降とされていること、また埋土中から近世以降の陶磁器等が出土していることから、溝2の時期は18世紀後半以降と考えられる。

溝2の性格については、上水もしくは排水に伴う施設と考えられる。しかし、升状施設の機能について明確ではないため、その性格を決定するにはいたらなかった。

「参考文献」

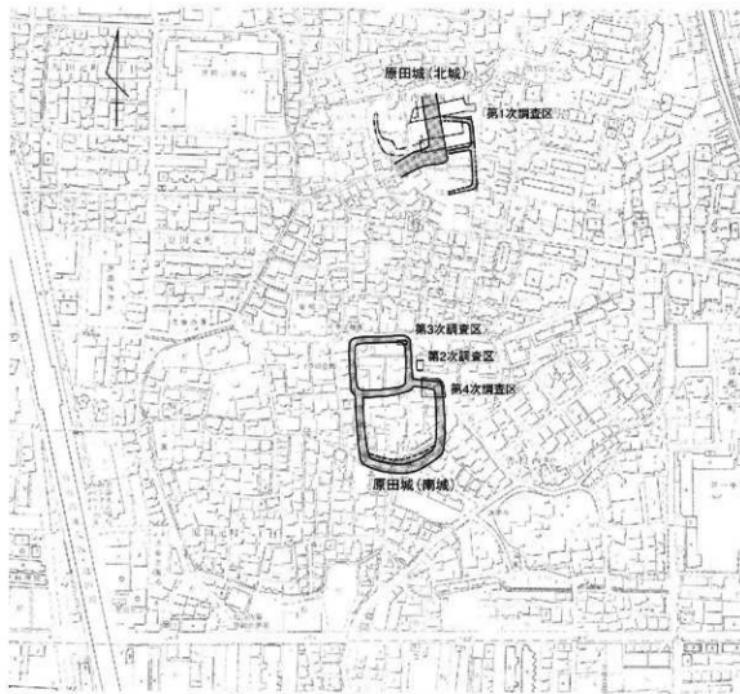
- 白神 貞之 「堺掘鉢について」「堺環濠都市遺跡（SKT79）発掘調査報告」 市教育委員会（1988）
 財団法人 大阪文化財調査研究センター 「麻田藩陣屋跡（1～3）」「宮の前遺跡・豊池東遺跡・麻田藩陣屋跡・豊池遺跡・武池南遺跡・豊池西遺跡」（1997）

3. 第3・4次調査の成果と課題

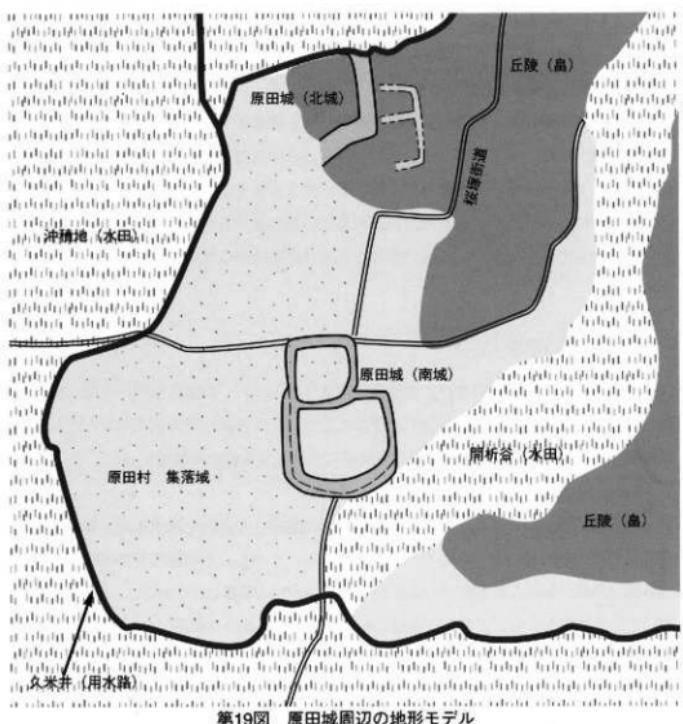
(1) 第3次調査の成果

第3次調査区は、明治10年（1877年）の『原田村改正絵図』・文政7年（1824年）の『攝津国豊島郡原田村絵図』により、原田城南城内堀推定地として周知され、当初より内堀北東部が検出されることが予想された。調査では、当時の予想どおり内堀の一部と弥生時代および中世後期～末の遺構を確認した。このうち、中世後期を中心とする遺構群は、旧原田村および原田城（南城）の展開を考える上で大きな成果となった。よって、ここでは検出した遺構の性格とその変遷から、原田村および原田城の関係について検討する。

溝1～3・ピット1 これらの遺構からは出土した遺物から、溝1～3が13世紀末から14世紀前半にかけて埋没し、ピットは15世紀代の所産となることが推定されている。また、溝1・2と溝3とは直交することから、屋敷地の区画溝となる可能性が高いものと判断された。



第18図 原田城復元図（1：5,000）



第19図 原田城周辺の地形モデル

溝1・2と溝3の間には土坑6が存在するものの、ある程度の空間が形成されていることから、屋敷地の出入り口となる可能性も少なからず考えられる。また区画内からは、時期に隔たりはあるものの15世紀代の建物（礎石建物？）に伴うピットも検出されていることから、当調査区が13世紀末～15世紀にかけて断続的に屋敷地となったものと想定できる。しかし、区画内から検出された遺構は極少数に過ぎず、また調査面積自体が限られていることから、屋敷地の状況については周辺における調査を待つ必要があろう。

井戸1 井戸1は、新免遺跡第40次調査区で検出した井戸1・2と同様の特徴を有することから、段丘平坦部で通有に見られる灌漑用の井戸とみて確実であり、当調査区一帯が一時期耕地（水田）として利用されたことを示す。その期間は、屋敷地が廃絶する15世紀以降から井戸1が埋め戻される16世紀後半までといえる。

堀1 堀1は先に述べたとおり『原田村改正絵図』などから、原田城南城の内堀に比定される。堀1の掘削時期については出土遺物が乏しく明確にはできなかったが、井戸1が埋め戻された

3. 第3・4次調査の成果と課題

あの間もない時期に掘削されたものと考えられる。

なお、堀1の規模については、調査では確定できなかったものの、『原田村改正絵図』から4m～5m程度の規模になるものと想定される。

以上、各時期の遺構から、当調査区が原田村の一角を構成する丘陵地から耕地（水田）へ、そして原田城南城（内堀）へと変遷したことがわかる。この変遷において注意されることは、溝3の延長と溝1・2が交わるところに井戸1が、また溝1～3と並行して堀1が掘削されていることである。井戸はその構造などから水田の区画外周に掘削されるものと判断できることから、13世紀末には成立していた区画が、内堀が掘削される16世紀後半まで基本的に踏襲されたものと推定できる。

（2）第4次調査の成果

第4次調査では、中世後期の井戸、近世以降の溝などと共に、調査区東西から南へ屈曲する堀を検出した。当調査区付近は「字古城」と呼ばれたが、先の絵図に堀の記載はみられないことから、検出された堀は原田城南城の構造をより明確にする上で重要な成果となった。

以下、調査区で検出した中世遺構の推移を検討する。

井戸1 当調査区においても、第3次調査区同様に素掘りの井戸を検出した。井戸1は、16世紀代に機能を停止し、埋め戻されたものと考えられる。しかし、土師器羽釜の明確な年代観が確立していないため、今のところ井戸の詳細な時期については明確ではない。

なお、井戸1の存在から、当調査区周辺は堀1掘削以前は耕地（水田）であったと言える。

堀1 幅6.7m、深さ1.1mの規模を有する堀である。その掘削時期については、下層出土遺物から15世紀以降となる以外に明確な時期の決定はできないが、井戸1の埋め戻しが16世紀代と想定できること、また堀中層から出土した遺物から埋め戻しが17世紀初頭（～前半）のうちにはじまることを踏まえると、掘削時期は16世紀代に収まるものと考えられる。また堀は、掘削深度に対して幅を広くとることから、16世紀後半以降となる可能性が考えられる。

堀1は絵図には記載されていないが、堀北辺の西方は内堀南東コーナーにあたること、また堀東辺の南方には外堀と推定される「字 堀」・「字城ノ前」・「字古城」と呼ばれる東西に伸びる不整形区画の耕地が存在し、これらの区画に連なることが十分に想定できることから、原田城南城の外堀となることは確定である。なお、溝1など耕作に伴う溝や現行の道路（『原田村改正絵図』以前から存在する。）などは堀削と並行しており、堀1は埋め立て後も区画としてその名残りをとどめたようである。

(3) 原田城南城における堀割の復元

第3・4次調査では原田城南城の内・外堀を検出し、また『原田村改正絵図』にみる同村の地割が堀の配置を踏襲し、その地籍は比較的城郭の範囲を反映した状態のまま残っていることが確認できた。ここでは、調査成果とこれらの絵図から堀割の復元を試みる。

内堀 内堀については、文政7年『摂津豊崎郡原田村絵図』およびその下絵により、主郭の四隅に巡らされていたことが確認できる。一方、改正絵図では北辺の西半分と西辺についてはすでに埋め立てられており、その状況は明確ではない。しかし、主郭推定地の区画（字ヤシキ・垣内）の西に隣接する区画は、その南辺の一部が南へ弧状にふくらむように歪んでおり、後述する外堀西辺と内堀の接点になる可能性が考えられる。この場合、主郭の規模は東西・南北ともには50mとなり、方半町を基準とする一般的な方形居館の規模と一致する。

外堀 外堀については、第4次調査により外堀北辺および東辺の屈曲部を確認した。また、南辺についても、「字塚」・「字城ノ前」・「字古城」などと呼ばれる東西に伸びる不整形区画



第20図 「原田村改正繪図」にみる城郭関連字名の分布（※原図トレース・一部改変）

の耕地の存在から、その位置についてはほぼ確定できる。西辺については、明確に堀跡を示す区画がみられないなど不安定要素を残すが、一部に「字古城」と呼ばれる南北に長い区画が不整形区画（「字 燕」）に連なるように接し、その北部には内堀との接点とも考えられる一部弧状に歪む区画が存在することから、南辺と推定される不整形区画の西端で屈曲し、内堀南西コーナーにつながることが予想される。この推定復元に従うと、外郭は主郭を囲まずに南側に取り付き、その規模は東西・南北ともに80m強の区画となる。

以上、南城の堀削について復元してみたが、この結果南城は全体で南北125m、東西80mの規模を有するものと推定できる。また外堀は、主郭を区画する内堀に取り付けるような様相を呈し、その堀削に幾つかの時期差があった可能性も考えられる。

なお、北城が集落北方の舌状丘陵全域（東西120m・南北140m）を域城とし、丘陵先端部に主郭を構え、平面「ヨ」の字状の外堀を配置するのに対し、南城は主郭の三方が内堀だけにとどまるなど防御面の意図が見出しそうなことが特徴の一つといえる。

（4）原田城北・南城の成立にかかる2、3の問題

原田城南城における堀の堀削は、各々の調査報告で述べたように内堀が16世紀後半代、外堀が16世紀代に推定される。このうち、外堀については不確定要素を多く残すが、堀の規模・形態などからみて内堀よりやや遅れて堀削された可能性が想定される。また第3次調査では、内堀周辺は堀削直前まで一時耕地となっていたことが判明していることから、南城が今回検出された内堀の堀削以前に成立していたとは考えにくい。

南城の廃絶時期については、外堀の埋め立てが17世紀初頭となることから、それ以前に廃絶した可能性が想定できるにとどまる。また、文政七年『原田村四株指出明細帳』（1824年）には「一城跡当村ニ南北両城御座候所、天正・慶長之頃引拵ニ相成候由、～」とされていることから、厳密な時期は明確にはできないものの、天正・慶長年間に廃城したことは確実であるから、調査による知見とも矛盾しない。

以上より、南城は内・外堀の堀削時期からみて16世紀後半代に成立し、文政七年の村明細帳から遅くとも慶長年間には廃絶する極めて短命な居館であることがおぼろげながら明らかとなった。

しかし、このことは北城が成立する15世紀代にはまだ南城ではなく、北城が細川晴元・三好宗三に攻められて開城する1547年以降に成立することを意味し、原田城南城と北城の並存を前提に機能分担を想定したこれまでの位置づけについては、あらためて検討する余地が生じた。

そこで問題となるのは、北城が原田氏の居館として完全に廃絶した後に、南城が成立したのか、それとも、一時期なりとも併存し一定の機能分担を担ったのか、またいずれも原田氏の居館となることを前提に作られたのか、という点にある。

前者の問題を考える上で注意されるのは、北城が先の開城後伸び1570年・1578年に織田信長側の陣城として再利用されていることである。それは、北城が開城後も継続的に維持されていたと



第21図 「摂津国豊島郡原田村絵図」文政七年（1824年）

考えるか、あるいは南城の成立時期を1547年もしくは1570年以降と考えるかによって、その評価は著しく異なることになる。

しかし、現段階では南北いずれの城について厳密な時期変遷を検討できるまでには至らず、いずれの問題も解決できないため、ここでは『摂津郡誌』(1736年)や文政七年『原田村四株指出明細帳』(1824年)に記された原田城の記述を検討し、解決の糸口を見出したい。

先に挙げた二史料のうち、『摂津郡誌』では原田城について「～南ノ城址ハ、原田氏累世、此ニ居ル。北ノ城址ハ、三好日向守、コレヲ築キ、天正年中、中川静兵衛・古田九介、コレニ拠ル。」と、また文政七年『原田村四株指出明細帳』(1824年)では「～則並河氏之摂津志ニも、北城は原田氏世々守之、南城ハ三好氏之ト御座候也」と記している。

『摂津郡誌』と『原田村四株指出明細帳』の記述では、北城と南城の城主を反対に記すなどの食い違いが見られることは注意を要する。このうち『摂津郡誌』では、北城は三好長逸が、南城は原田氏が築いたことになっているが、第Ⅰ章でも述べたとおり三好氏が台頭する以前に北城は成立しており、また南城は原田氏が代々にわたって住むほどの長期間にわたって機能していないことから、その内容を素直に読む限り記載事実の信憑性には疑問が生じる。ただし『摂津郡誌』を、後述するようにその記載事項の起点を16世紀半ばにおいて読み直すならば、これらの記載に

ある程度の整合性を認めることも可能と考えられ、そのすべてを否定することはできない。

一方『原田村四株指出明細帳』の記述は、提出にあたって下線部分を朱筆で前者のように修正されている。しかし下線を記した部分は、その後提出された天保二年の村明細帳にも修正以前の記述がそのまま載せられていることから、『揖津郡誌』と同様の事実を記載する『揖津志』に依りながらも、その記載に全く相反した記述を行うことで原田村の共通認識を強く主張したものと解釈でき、ある程度の信憑性が期待できる。しかし、南城に三好氏が拠ったとする原因などは全く記されていないため、その内容については問題を残す。

このように両史料とも問題を含むが、注目されることはいずれの史料においても原田氏とともに三好氏が南北いずれかの城に関与したことである。

当地域では馴染みの薄い三好氏が原田城を拠点として利用したとは考えにくく、また当該期の史料にもそのようなことを伝えるものもないが、唯一1549～50年にかけて行われた伊丹城包囲の時期に三好氏と原田城との関係が生じた可能性が想定できる。

この時期には三好日向守は文献にも初出しており、また伊丹城に対する軍事行動という点で原田城が一定の機能を有するであろうことは容易に想像できる。また、天正十九年五月付けで十河一存が今西家宛に禁制を発行しており、伊丹氏との和睦後もしばらく長慶方が当地域一帯で何らかの行動をとったことが考えられる。これらの状況をみると、この一時期に原田城が三好氏の拠点となった可能性は否定できない。

また、この時点を起点に『揖津郡誌』にある「～三好日向守、コレヲ築キ、～」の一文を見直すと「原田氏も長慶方を支持した都合から三好長逸方が北城を修復・駐屯する一方で、原田氏は北城を放棄し南城へ拠点を移した」とも解釈でき、記述に一定の整合性を持たせることも可能となる。よって、『原田村四株指出明細帳』のように南城に三好氏が拠ったのか、あるいは『揖津郡誌』を解釈し直し、南城を北城廃絶後の原田氏の居館とするかは判断しにくいものの、1550年前後に何らかの要因により原田城（南城）が成立した可能性を想定することもできるかもしれない。

以上、『揖津郡誌』および『原田村四株指出明細帳』の記載がある程度の事実を伝えているとするならば、天正十九～二十年における伊丹城包囲の時点で一定の両期を見出し、原田城（南城）の成立をこの時期に想定することも可能と考えた。しかし、三好氏自体は知名度が高く、何らかの理由で引用されたにすぎない可能性は十分にあり、今回の検討は三好氏との関与を肯定的に解釈した見通しの一つとして提起するだけにとどめたい。

なお、本稿を作成するにあたり多くの部分で、仁木 宏「原田城をめぐる人々—揖津の国人と織田信長」文化財講演会95『掘る・読む・揖津原田城』レジメ（豊中市教育委員会 1995）を参考にしたことを付記する。

第IV章 本町遺跡第26次調査

1. 調査の経緯

当該調査地は、豊中市本町3丁目26・38・38-1に所在する。

老人保健施設の建設に伴って確認調査を実施し、遺構面と遺物包含層を検出した。第18次調査地に隣接しており、当該調査地にも同様の遺構が広がっている可能性が高いと考えられたので、協議の結果、調査の必要があると判断された部分、452.12m²を対象として平成12年（2000年）4月19日から6月30日までの日程で調査を実施した。なお、建築延べ床面積から専用住宅部分を按分し、該当面積を国庫補助の対象とした。



第22図 調査範囲図 (1 : 500)



第23図 調査地位置図 (1 : 5,000)

2. 調査の成果

(1) 既往の調査

本町遺跡では過去に25回の調査が行なわれており、弥生後～終末期あるいは古墳後期を中心として展開する集落が検出されている。とりわけ、古墳後期の集落は千里川上流域に営まれた桜井谷窯跡群との関連で成立したと考えられ、隣接する新免遺跡とともにその集落構造は古墳時代における窯業地域の経営という観点からも非常に注目に値するものであろう。

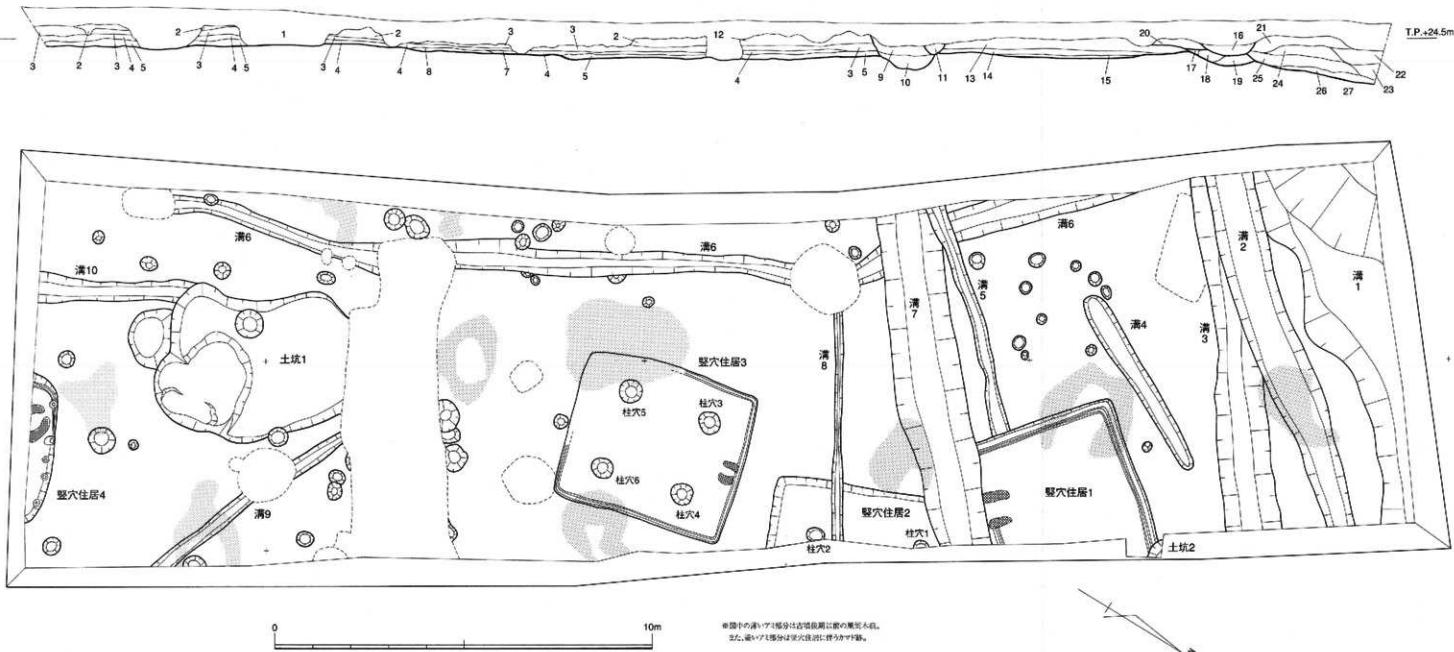
既往の調査ではカマドを備えた方形堅穴住居、掘立柱建物、廐棄土坑等の遺構群が組合わざつて検出されることが多く、その分布は今回の調査地周辺をおよその南限として半径150m程度の範囲に集中している状況が看取される。遺構の時期は、概ね6世紀前半（田辺編年MT15型式・中村編年II型式第1段階・木下編年II型式第1段階）から末頃（田辺編年TK209型式・中村編年II型式第5段階・木下編年II型式第4と5の中間段階）に集約されており、桜井谷窯跡群の盛期に呼応して集落が拡大したものと推定される。

当該調査地の北150mに位置する第21次調査地点で検出された建物群の構成は、この時期の遺構のまとまりと変遷をよく表わしているので、ここで少し触れておきたい。第21次調査の成果によれば、6世紀前半の段階では、方形堅穴住居と中・小規模の掘立柱建物が間隙をあけて併存し、6世紀の中頃から後半にいたると堅穴住居が消滅し、大型掘立柱建物が広い空間を占有するようになる。その後、最終的には主軸を合わせた掘立柱建物が密集し、7世紀に入ると集落が真っ直していくとされている。このような古墳後期の集落内での建物構造の変遷過程は、千里川上流域において須恵器生産に密接にかかわったとされる集落遺跡、たとえば内出遺跡や柴原遺跡でも、多少の時期差はあっても同様に追うことができる。換言すれば、豊中市域では、特に南部の低湿地における古墳後期の一般的な集落の構造変遷が明確にされていない現状では、あくまで推論の域を出ないが、須恵器生産へのかかわりが、日常生活の基盤となる居住形態をも短期間に変化させてしまうほどに深いものであったとも言えよう。

当該調査地に東接する第18次調査地では、6世紀前半頃の土坑や周溝状の溝とそれらに後出する掘立柱建物が検出されているが、調査範囲が限定されていたことから周辺への遺構の広がりは確認されていない。したがって上述したような集落内での建物構造の変遷を追究するためには、当該調査地での調査成果が重要な意義をもつことになるのである。

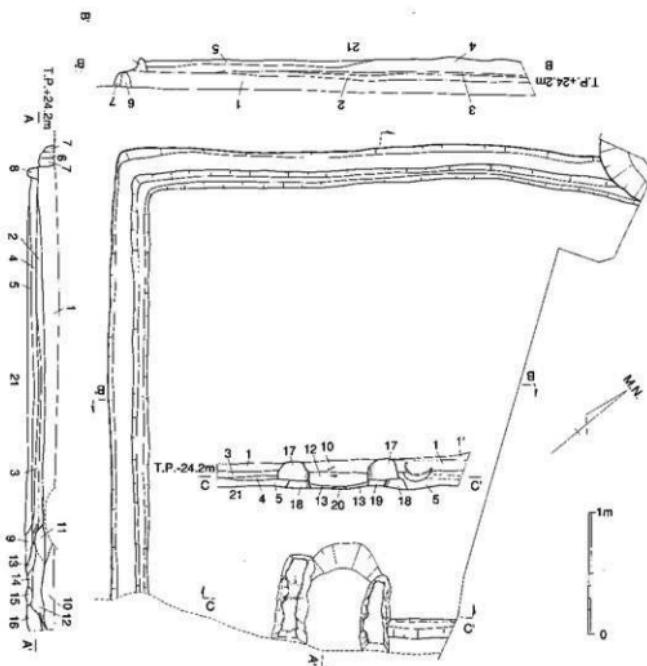
(2) 検出した遺構と出土遺物

今回の調査では、近世の耕作に関連する溝群（用水路を含む）を除けば、古墳後期に該当する遺構群のみを検出した。方形堅穴住居4棟と廐棄土坑1基が主たる遺構であるが、以下にその概要と出土遺物に関する所見を記す。



1. 異代の塗土・廻糞土。
 2. 黄褐色 (10YR5/2) シルト (～細粒砂) 灰質～近代の耕作土。
 3. にぶい黒褐色 (10YR4/3) シルト (～細粒砂) 塵泥質干草む。辺境～近代の耕作土。
 4. 黄褐色 (10YR4/2) シルト (～細粒砂) 耕作土。
 5. 黄褐色 (10YR4/2) シルト (～細粒砂) 灰土質も含む。27層 (塗糞層) の土壤化層?
 6. 黄褐色 (10YR4/2) シルト (～細粒砂) \pm 5cm程度の中層をわずかに含む。古糞堆積層等の遺伝混合層。
 7. 黄褐色 (10YR4/2) シルト (～細粒砂) 黄褐色 (10YR4/0) シルト (細粒砂) ブロック (\pm 1cm程度) を約20%含む。
 8. 暗灰色 (10YR4/1) シルト (～細粒砂) にぶい黄褐色 (10YR7/2) シルトブロック (\pm 1cm程度) を約30%含む。
 9. 黄褐色 (10YR7/3) 細粒砂 (～粗粒砂) にぶい明褐色 (7.5YR5/4) 細粒砂 (～極細粒砂) のブロックを約40%含む。中層を若干含む。
 10. 棕色 (NG) 粘土上にない褐色 (7.5YR5/6) 粗粒砂 (～シルト) の混合層。9～10層は層? 塗土?。
 11. 暗褐色 (10YR5/1) 粗粒砂 (～粗粒砂) 黄褐色 (7.5YR7/0) 粗粒砂ブロックを約30%含む。細胞を若干含む。薄石斑化。
 12. 暗褐色 (10YR4/1) シルト (～細粒砂) 細胞及び無機物を若干含む。2層に対応。
 13. 黄褐色 (2.5YR4/1) シルト (～細粒砂) 細胞及び無機物を若干含む。苔類作土。
 14. 灰褐色 (10YR6/1) シルト (～中粒砂) 細胞及び無機物を若干含む。灰土作土。
 15. 灰褐色 (10YR6/1) シルト (～中粒砂) 細胞及び無機物を若干含む。2層に対応。
 16. 暗灰色 (10YR4/1) シルト (～中粒砂) しりこみ灰、2層 (廻糞)。
 17. 从灰褐色 (10YR5/2) シルト (～中粒砂) 細胞を多く含む。
 18. 黄褐色 (10YR4/2) シルト (～中粒砂) 細胞を若干含む。
 19. 黄褐色 (10YR5/2) シルト (～中粒砂) 墓～中層を若干含む。17～19層は層? 土。
 20. 暗褐色 (2.5YR5/2) 中粒砂 (～シルト) 墓～中層を若干含む。しまり不良。
 21. 暗褐色 (7.5YR4/1) シルト (～細粒砂) しまり不良。
 22. 暗褐色 (7.5YR4/1) シルト (～細粒砂) 墓～中層を多く含む。第二堆化層の泥炭が発達。
 23. 暗褐色 (10YR4/0) シルト (～粗粒砂) 細胞を若干含む。第三堆化層の泥炭が発達。
 24. 暗褐色 (10YR4/1) シルト (～細粒砂) 墓～中層を含む。
 25. 暗褐色 (10YR5/2) シルト (～中粒砂) 墓～中層を若干含む。
 26. 黑褐色 (10YR3/1) シルト (～粗粒砂) 黒褐色及び植物質の腐食質が頗る。5層に断続。
 27. 暗褐色 (10YR5/1) シルト (～粗粒砂) 中～大層を多く含む。当該調査区の基盤層で洪積段丘堆積である。基層の下部では半漂浮状態であるが、平面部では強化が進み、黄色味を強く含む。

第24図 調査区平面・断面図 (1 : 100)

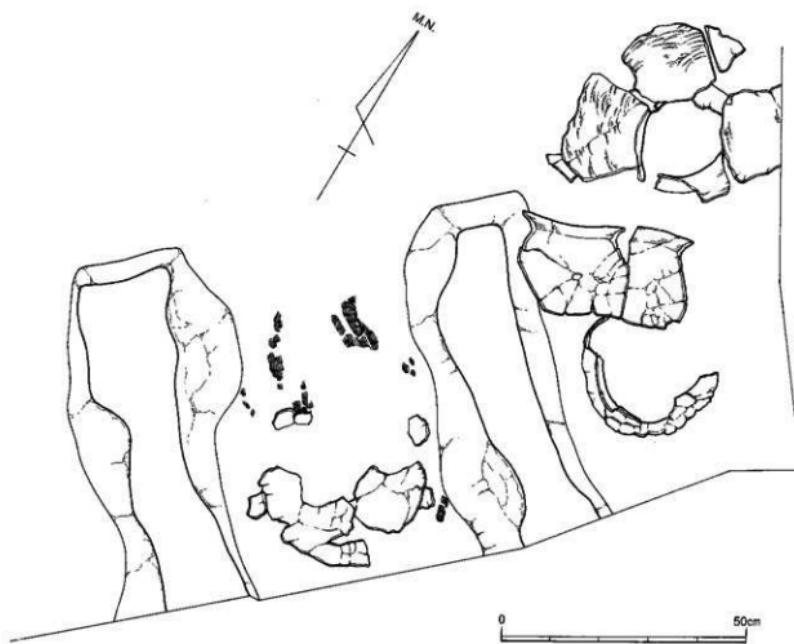


1. 深灰褐色 (10YR5/2) シルト (～基盤部) 1.2m厚。21層 (基礎壁) のブロック (よこよこ) を多く含む。このブロックは住居中央部に多くなく、周囲に多く分布する。住居部二層目。
2. 深灰褐色 (10YR5/2) シルト (～基盤部) に少い黄色 (7.5YR5/4) シルト (～初期乾燥) ブロックを約10%含む。比較的均質。第2次貼付層に相当する。
3. 深灰褐色 (10YR5/2) シルト (～基盤部) に少い黄色 (7.5YR7/4) シルト (～中期乾燥) ブロックを約10%含む。住居部東部では直壁部に既存ブリッケを約10%含む。第2次貼付層に相当する。
4. 2層目に相当するが、さきに均質。第1次貼付層に相当する。
5. 黄褐色 (10YR4.5/1) シルト (～初期乾燥) に少い黄色 (7.5YR5/4) シルト (～中期乾燥) ブロックを約15%含む。21層 (基礎壁) とび重ね部 (～基盤) ブリッケを約30%含む。第1次貼付層に相当する。
6. 黄褐色 (10YR3/1) シルト (～初期乾燥) 21層 (基礎壁) の微細ブロック約10%、炭化物を含む。
7. 黄褐色 (10YR3.5/2) シルト (～中期乾燥) 灰化物微細含む。6-7層は第2次貼付層が直壁の複数に相当する。
8. 深灰褐色 (10YR4/2.5) 袋織土 (～初期乾) 每1次貼付層の壁面に相当する。
9. 5層に相当するが、色調やや暗い。
10. 1層と17層の壁面の泥炭層。第2次貼付層に既存カマド内壁土。
11. 黄褐色 (10YR4/1) シルト 第3の微細ブロック、灰化物を含む。
12. 黄褐色 (10YR3.5/1.5) シルト 灰化物を大部分含む。全層に晶出を認める。既上部ブロック (カマド焼成灰及び人骨が灰化したもの) を約10%含む。第1次貼付層に伴うカマド内壁土。
13. 16層に相当。
14. 10層に相当。
15. 深灰褐色 (10YR3.5/2) シルト 基底ブロックを約30%含む。第3次貼付層に伴うカマド内壁土。
16. 深灰褐色 (10YR3.5/2) シルト 基底ブロックを約30%含む。第3次貼付層に伴うカマド内壁土。
17. 黄褐色 (10YR3) 鹿蹄形 (～シート) 3層 シリコーンを約10%含む。既存灰化物層に伴うカマド内壁。内側は灰化して外側はもろくする。
18. にじみ黄色 (2.5YV6/3) 灰化土 (～シート) と 黄褐色 (2.5YV6/3) 灰化土 (～基盤底部) の混合層。既存灰化物層に伴うカマド内壁。内側は灰化して外側はもろくする。
19. 深灰褐色 (10YR4/1) 灰化土 (～シート) 灰化物を約40%含むため、全体に黒色を呈する。既上部ブロックを約5%含む。第1次貼付層に伴うカマド内壁土。
20. 黄褐色 (2.5YV6/3) 灰化土 (～シート) 21層 (基礎壁) ブロックを伴う。21層 (基礎壁) とび重ね部 (～初期乾燥) ブリッケを約30%含む。
21. 黄褐色 (10YR4/1) シルト (～初期乾燥) カマド壁を多く含む。既存灰化物層の基盤。

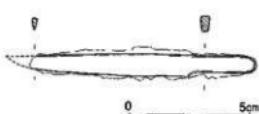
第25図 積穴住居1平面・断面図 (1:40)

積穴住居1 方形の積穴住居である。東辺が調査区外に、また南辺が近世の溝に削平されているため正確な規模は不明であるが、作り付けのカマドが南辺に遺存していたことから、一辯約4m程度の規模が考えられる。遺存した深さは約30cmを測るが、基底面でも柱穴を検出することはできなかった。掘形内部には、大別して5層の堆積層が見られた。最下層は基盤層のブロックを

2. 調査の成果



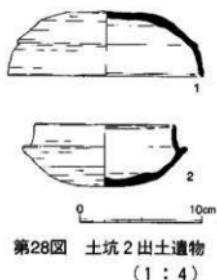
第26図 穏穴住居1 カマド付近遺物出土状況 (1 : 10)



第27図 カマド内出土刀子
(1 : 2)

層中にまんべんなく多く含み、基底面が平坦ではないことを勘案すれば、掘削後の整地層であろうと考えられる。その上層は同様にブロック土を多く含みながらも、比較的精良な土質で、貼床層(第1次)であろうと考えられる。層厚はいずれも5cm程度である。貼床層の上面から壁溝が掘削されているが、通常とは異なり、検出面での外郭線から約20cm内側に設定されている。整地及び貼床の構築は2回実施されたようであり、第1次貼床層の上層に3cm程度の層厚で整地層、貼床層(第2次)の堆積がみられる。

カマドはこの床面の整地ごとに再構築されており、断面観察によれば左右の袖部が第1次と第2次の間で微妙にずれて配置され、各々前庭部と考えられる窓みを伴っている。袖部は遺存した高さ約20cm、幅約25cm、長さ約70cmを測る。豊中市域で検出されるカマドとしては比較的大形であり、袖部が直線的に伸びる類例の少ない形状である。各カマドの火床部には燃料が炭化した状

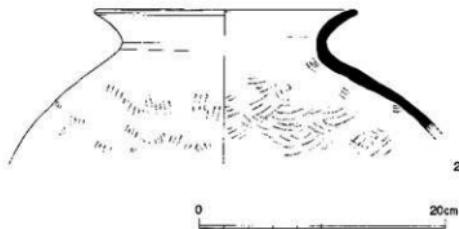
第28図 土坑2出土遺物
(1:4)

態で検出され、火床部（第1次）そのものは被火して還元・硬化・変色していた。炭化物片はカマド内の埋土及び前部周辺の住居床面にも散在している。

カマドには支脚となる高杯等は遺存していないが、上部に土師器の長胴壺が天井部の崩落とともに破碎した状態で出土した。支脚の土台がわずかに残存し、その中に鉄製刀子が埋置されていた。刀子は刀身の残存長が6.5cmあるのに対して刀身幅が1cmに満たない、細身の造りである。管見による限り、住居内ではなくカマド本体内で刀子が検出された例は希少であり、カマド（火）にまつわる祭祀行為の事例として重要であろう。また、前部付近の貼床層（第1次）から、固形化していないが滑石製の白玉1点が出土している。カマド東側に土師器の把手付壺が床面を掘り込んで据え付けられ、やや離れて須恵器の壺が倒立した状態で出土した。

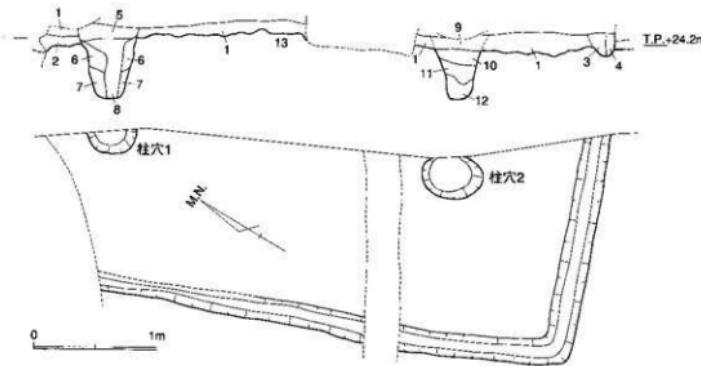
住居の掘形は第2次の貼床面と同一レベルで、約20cm外側へ平坦に拡張され、基底面とは10cm程度の段差をなす。この段差上にも壁構造の堆積層がみられるが、住居埋土の最上層との識別は非常に困難であった。また、住居埋土の最上層は層厚約10cmを測り、層中の上位に灰白色系のシリトブロックを大量に含み、その分布は外周側に偏在していた。住居埋土内の焼土や粘土ブロックの分布範囲についての研究は、近年端緒についたばかりであるが、大部分の事例に対して土壁の崩壊土である可能性が指摘されている。したがって、これらの諸相から竪穴住居1は、住居外郭の段差部分を基底とする土壁で屋根を支持する構造を有し、その内側を矢板で土留める「壁立ち」の住居であった可能性が高い。

竪穴住居1内では編年の基礎資料となるような遺物がほとんど出土せず、遺物からその構築時



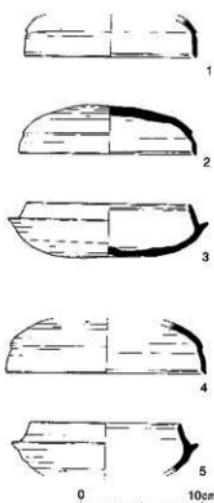
第29図 竪穴住居1出土遺物 (1:4)

2. 調査の成果



1. に赤い青褐色 (IOYR5/0) 頭粒砂 (=後頭粒砂)
13層 (高層部) ブロックを約10%含む。壁穴
部附近の砂地もあるいは赤褐色帶。
2. 1層前の鉛灰 (13層 (高層部)) ブロックが約
40%含まれ、炭化物も若干含む。
3. 鉛灰色 (7SYRA1/5) 頭粒砂 (=前頭粒砂)
壁底塗土。
4. 鉛灰色 (12SYRA3/5) 頭粒砂 (=前頭粒砂)
15層 (高層部) ブロックを約10%含む。壁底
地上あるいは失板の痕跡。
5. 鉛灰色 (10YR3/3) シルト (~粘土) 壁面片
含む。土と似るが、やや色調暗く、緻密。
5~8層は柱穴1の土壁。
6. に赤い青褐色 (23YR6/4) 頭粒砂 (=シルト)
とに赤い青褐色 (10YR5/0) シルトの混合層。
7. 鉛灰色 (2SYR5/0) 頭粒砂 (=シルト) 13
層 (高層部) ブロックを約40%含む。
8. 黄褐色 (23YR6/2) シルト 13層 (高層部) ブ
ロックを約5%含む。柱底?
9. 5層に似るが、全体に粘性が強く、炭化物を
若干含む。
10. 黄褐色 (10YR3/5) 頭粒砂 = 赤青褐色
(23YR6/0) 頭粒砂等 ブロックを約5%含む。
ややしまじ不規則。
11. 黄灰色 (23YR4/1) 頭粒砂 13層 (高層部)
ブロックを約15%含む。
12. 11層に似るが、全体に粘性が強く、炭化物を
若干含む。
13. に赤い青褐色 (10YR4/5) シルト 当該層在
区の基底層。比較的均質で堅硬。

第30図 壁穴住居2平面・断面図 (1:40)



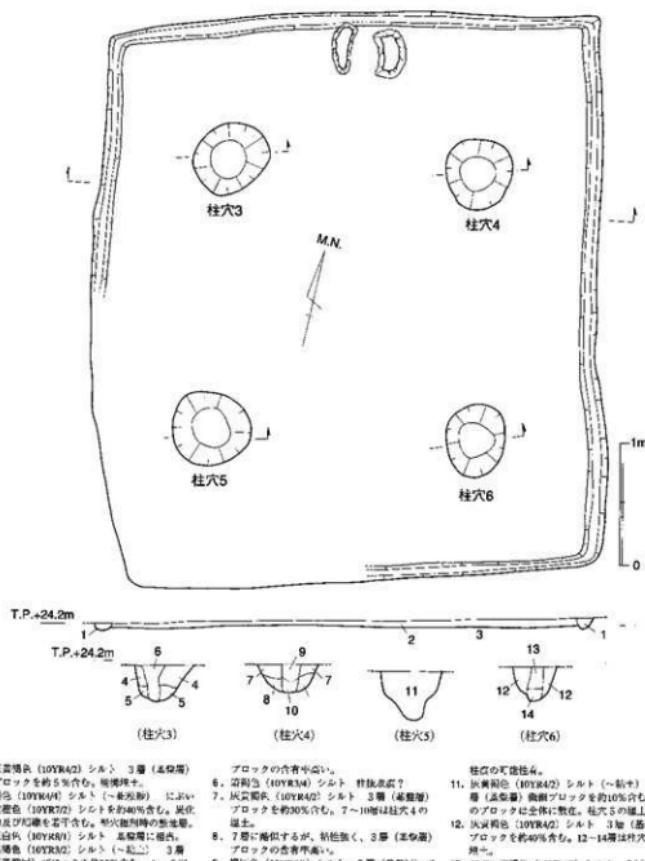
第31図 壁穴住居2

出土遺物 (1:40)

期を知ることは難しいが、住居の北東角付近で重複している土坑
2 (壁穴住居1に後出) の出土遺物の時期を参考にすれば、6世
紀前半より下る可能性は低いと言えよう。

壁穴住居2 調査区の東端で平面プランの約3分の1程度が検
出された、壁溝、柱穴を伴う方形の住居である。四本柱構造で
あることを前程に壁溝、柱穴間の距離をもとに復元すれば、一辺
約5mの規模となる。柱穴1では、柱が抜き取られた痕跡があり、
柱穴2では、柱の抜き取り後に須恵器等を破碎して埋め戻した状
況が看取された。

基底面までの深度が約10cmと残存率が悪く、床面の状態や使用
状況の詳細は不明であるが、基底面 (第31図-1)、埋土の上層
(第31図-2・3)、柱穴2 (第31図-4・5) から出土した遺物
の時期から、概ね6世紀前半に構築され、中頃すぎには廃絶した
ものと考えられる。焼土等が確認されなかったので、カマドの有
無は不明である。位置関係や遺物の時期から、壁穴住居1の廃絶
後に構築されたものと考えられる。

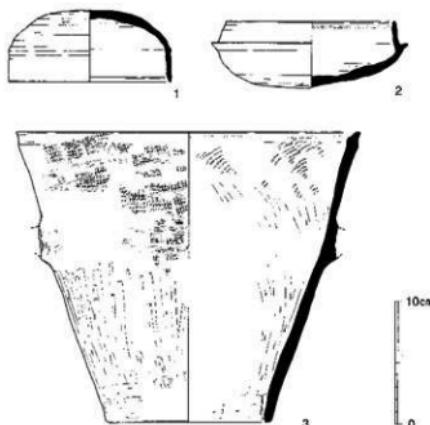


第32図 積穴住居 3 平面・断面図 (1 : 40)

堅穴住居 3 壁溝、主柱穴、カマドを伴う方形の堅穴住居である。南北方向の辺がやや長く約4.5mを測り、東西方向約4mを測る。遺存した堀土は5cm未満であり、カマドについても住居北辺の中央に位置すること、壁溝が焼道付近で途切れること以外、その構造を明らかにすることはできなかった。特に南西角付近は削平が顯著で壁溝すら検出することが不可能な状態であった。

柱穴 3 及び柱穴 5 では、確実に柱が抜き取られた状況であるため、柱穴 4 及び柱穴 6 について

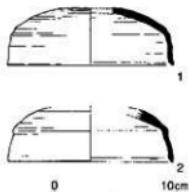
2. 調査の成果



第33図 壁穴住居4出土遺物 (1 : 4)

規模であることが推定できる。壁溝はわずかにその痕跡を検出できた部分もあったが、住居内の外郭を完全に囲繞することは確認していない。住居床面にはその外郭に沿って、小規模なピットが並んで検出された。ピットの配置はその間隔が0.5~1mと一定ではないが、土壁内の縦小舞の痕跡である可能性を考えておきたい。

住居の北辺に接して、やや北西角よりにカマドが設置されていた。遺存した袖部の高さは約15cm、長さ約70cm、幅約20cmを測る。カマドは北辺に対して直角には構築されず、焚口が南東方向に開口する形状である。住居の北西角付近の形状が歪んでいるのは、煙道がカマドの斜め後方に伸びさせていたことによるかもしれない。焚口付近では焼土、炭化物混じりの堆積土上中から、須恵器の瓶、杯身、杯蓋等が出土している。床面からの検出ではないが、これらの遺物は出土状況から勘案して、カマド（住居）使用時に伴うものであろうと考えられる。したがって壁穴住居4の廃絶時期は壁穴住居2と同様、6世紀中頃以降と推定される。



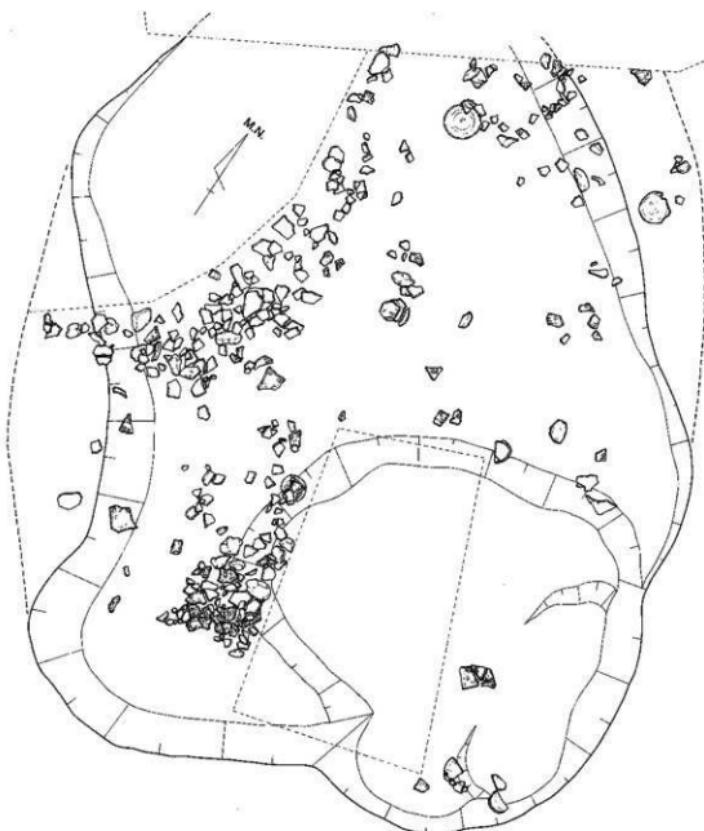
第34図 溝10出土遺物
(1 : 4)

柱根を残して切断された可能性が高いものと考えられる。

住居埋土及び柱穴埋土からは微細な遺物破片のみしか出土していないが、壁穴住居2と同様の規模、構造であることから、時期差はないものとみなすことができる。しかしながら、壁穴住居1・2の関係と同様、位置関係が近接しすぎているので、おそらく併存することはなかったと考えられる。

壁穴住居4 調査区の南端で一辺のみを検出した方形の住居である。かろうじて東西の角部分が確認されているので、一辺約4mの

溝10 調査区内で検出された溝群中、唯一の古墳後期に該当する溝である。検出した長さは南北方向約4m、幅約70cmの浅い溝である。埋土は褐灰色系のシルトで、古墳後期の遺物包含層及び遺構埋土と共に通する堆積土である。第18次調査地点でも同様の溝が検出されていて直接的には連続しないが、両者ともに壁穴住居を中心とした集落の外周で何らかの機能を果たしていたものと考えられる。溝10は後述する土坑1に削平されて北側の状況が全く不明であるが、出土



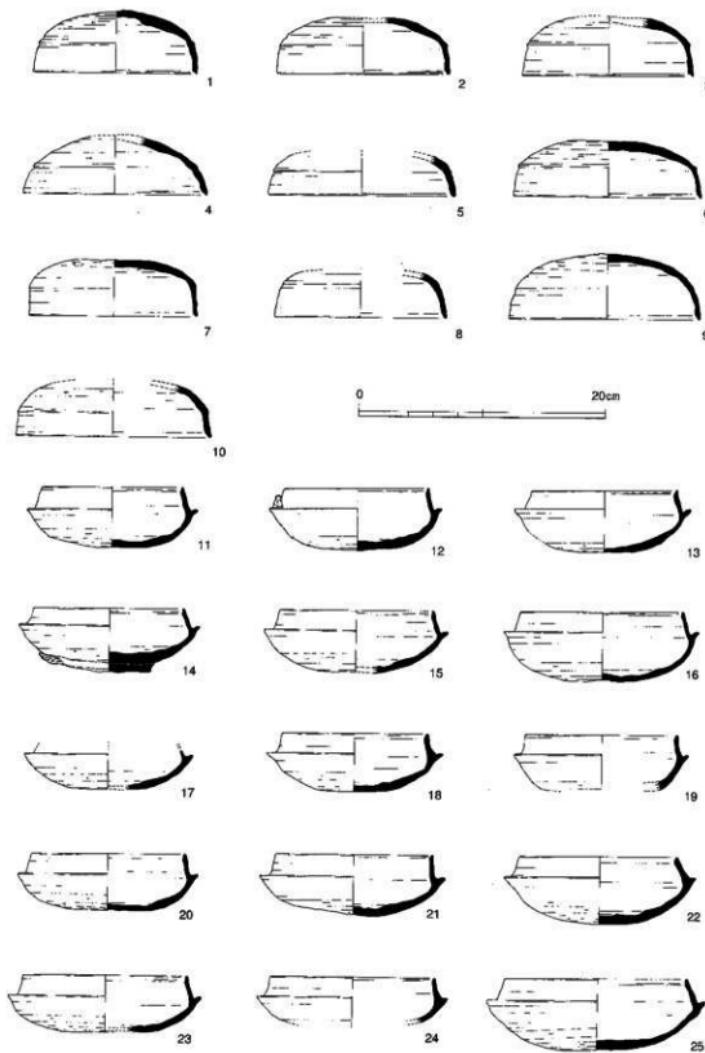
第35図 土坑1 遺物出土状況

遺物の示す時期から、少なくとも6世紀前半までは機能していた可能性が高い。

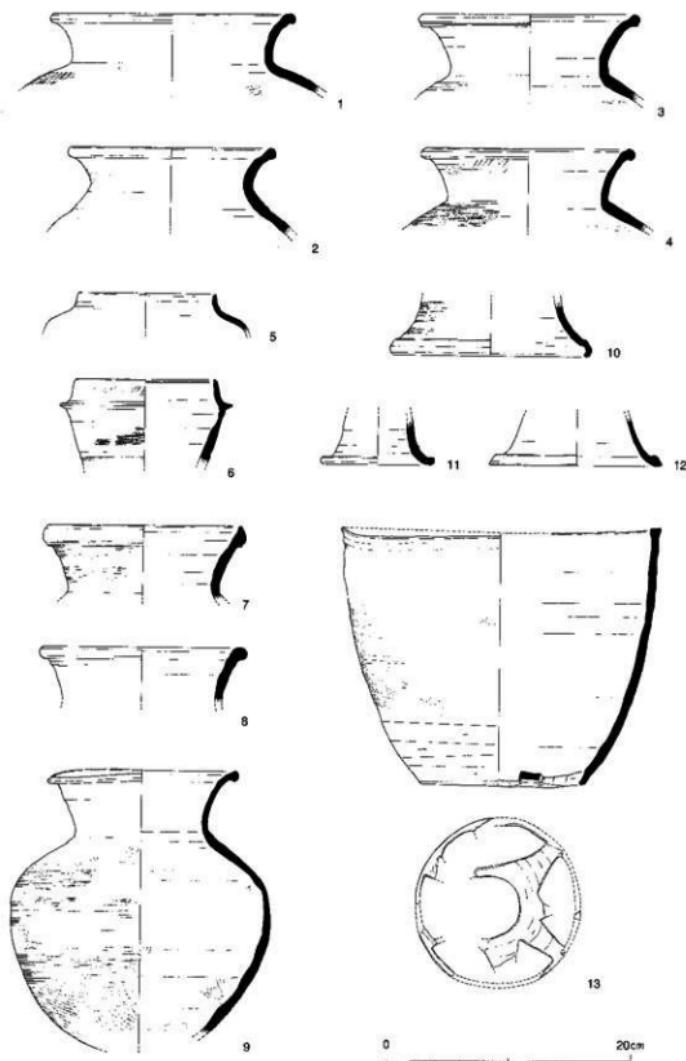
土坑1 調査区の南半部、竪穴住居3と4の間に位置する不定形の土坑である。長辺で約5m、短辺で約4mを測る。遺存した深さ約20cmを測り、埋土は褐灰色系のシルトと基盤層等のブロック土が混在したものである。炭化物や焼土の微細なブロックも含んでいた。

埋土には大量の須恵器片と若干の土師器片を含み、廃棄土坑としての性格が考えられる。遺物は土坑の北西部で最も集中してみられたので、おそらく北西方向からの投棄が日常的に行なわれたものと考えられる。須恵器の中には、一部に完形の製品もみられるが、他の個体と溶着して

2. 調査の成果



第36図 土坑1出土遺物1 (1:4)



第37図 土坑1出土遺物2 (1 : 4)

2. 調査の成果

しまったもの、焼け歪んだもの、焼成不良のために褐色や灰白色を呈し、比較的軟質のものなど、いわゆる不良品も多く含まれていた。器種構成も多岐にわたり、蓋杯類、壺類、甕、瓶、高杯や台付土器の脚部、提瓶、器台等が挙げられる。既往の調査成果や遺物の諸相から、これらの須恵器は千里川上流域に分布する桜井谷窯跡群で焼成されたものと考えて大過なかろう。

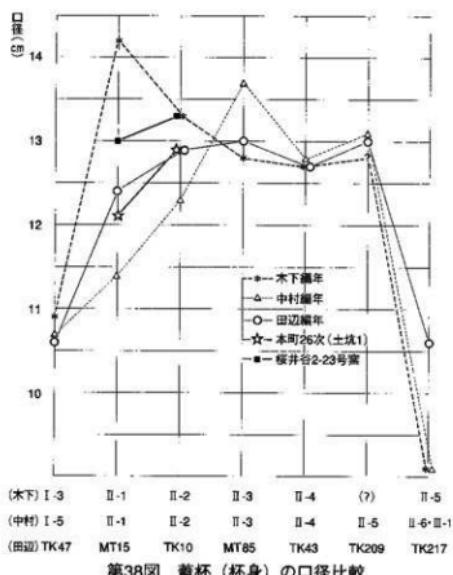
第36図に示したのは土坑1から出土した蓋杯であるが、杯蓋のうち、1~6が埋土の下層、7~10が上層にある。同様に杯身のうち、11~16が埋土の下層、17~25が上層にある。埋土中の上下層の識別が困難であったため、純粹に層位学的に分離し得たわけではないが、これらの形態的な特徴を検討した結果、若干の傾向を見いだせたので以下に記す。

まず杯蓋では、下層のものが口径平均約14.4cmを測るのに対して、上層のものが平均約14.7cmとわずかながらも大きくなっている。天井部と体部を界する稜の表現についても、下層では顕著な突出がみられるのに対して、上層では丸味を帯びるものや凹線状になるものもある。また、体部の水平面に対しての傾斜が、上層のものはほど強くなる傾向が窺える。口縁端部の形状に関しては、上層に比べて下層の方が全体に鋭角的で丁寧な仕上げで、細い沈線を廻らすもの、段をなすものなどがみられるという特徴がある。

一方、杯身では、下層のものが口径平均約12.1cmを測るのに対して、上層では平均約12.9cmと大型化の傾向が顕著である。口縁端部の形状でも下層のものは、正確に段を作り出しているが、上

層では丸味を帯びた鈍いものとなっている。また、下層では受部とたちあがり基部の接合部に明瞭な凹線が施されていて、その部分の断面が薄く仕上げられている。上層のものはその部分の断面形状が三角形で分厚い印象を受ける。

この上下層にみられる形態の差異を從米の編年観に照らせば、陶邑における中村編年・II型式第1段階～第2段階（田辺編年・MT15型式～TK10型式）への推移に合致する。ところが、桜井谷窯跡群の須恵器について体系的編年を行なった木下編年では、陶邑に先駆けて蓋杯の大型化が進行し、ここで扱う土坑1の下層資料の段階に口径が最大になり、上層の段階では逆に小型化が始まると



第38図 蓋杯(杯身)の口径比較

されているのである。

上坑1の出土遺物は、陶邑における深田遺跡での遺構の性格と同様、桜井谷窯跡群で焼成された須恵器が、選別等の作業が行なわれた後に投棄されたものと考えられる。したがって土坑1の上下層資料は窯跡で検出される遺物に準じ、検討に耐え得る資料ということができよう。そこでこの土坑1の出土遺物に加え、近年に調査された桜井谷2-23号窯跡の資料、そして従来の中村・田辺・木下編年に提示された資料をもとに6世紀代の蓋杯の編年を再確認してみたい。

以前に陶邑の窯跡（灰原）調査資料を用いて、6世紀代の蓋杯についての多変量解析を試みた際に、杯蓋は形態の変化に乏しく、編年の基準としてはむしろ杯身を用いることが望ましいと述べた。また、その際に口径の変化が最もその変遷を代表するものであることも指摘しておいた。今回もその検討結果を踏まえて、杯身の各段階における平均口径の推移を比較してグラフ（第38図）に図示した。なお、ここではいわゆる「古墳時代型」の蓋杯を扱うため、便宜的に田辺編年のTK217型式を取り上げ、その併行関係から中村編年のⅢ型式1段階を対応させている。また、木下編年ではⅡ型式4段階と5段階の間を埋める資料が提示されていないので、他の資料に合わせた推定値を代入していることを断っておく。

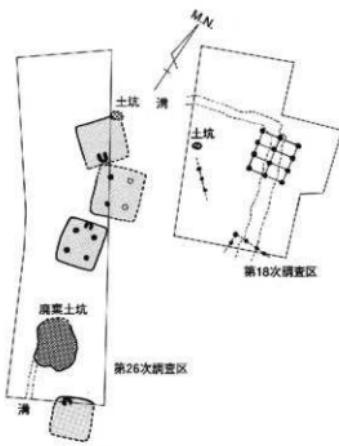
グラフに従えば、杯身の口径は陶邑ではⅡ型式第3段階（MT85型式）まで、右肩上がりの大型化を続いている状況が看取される。当該調査による土坑1の資料は☆で表され、2-23号窯の資料は■で表されるが、いずれも陶邑の動向に合致する推移をみせている。木下編年の資料のみがⅡ型式の初頭から中頃にかけて全く逆に右肩下がりとなっており、Ⅱ型式第1段階の突出した平均口径は、いずれの資料をもはるかに凌駕していることが明確になった。

桜井谷窯跡群の須恵器については、陶邑と比較して占い要素が新しい型式にまで残存するなど、その形態に独自色があることは従来から指摘されている。しかしながら、陶邑を補完する目的で半官窯的な存在として成立したと考えられる桜井谷の諸窯で、陶邑に比較的近接した地域にありながら、その形態（特に法量）を極端に変化させることができるだろうか。2-23号窯跡の報告でも指摘されているように、編年の基準として取り上げた資料が窯ごとの微妙な差異、あるいは工人差による特異な事例を反映したものと考えるのが妥当であろう。ここでは、廃棄土坑である土坑1の資料をもとに検討を進めたため、あえて結論を提示するものではないが、将来的な桜井谷窯跡群の須恵器編年に向けての予察としておきたい。

3.まとめ

今回の調査では古墳後期の堅穴住居1棟と廃棄土坑、溝を検出した。隣接する第18次調査地点での成果を勘案すると、当該調査地周辺ではまず6世紀前半、浅い溝に囲まれた居住域が形成され、その内側にカマドを作り堅穴住居が数棟構築されていったものと考えられる。これらの住居は改築や建て替えを重ね、6世紀の中頃には廃絶していく。その後、掘立柱建物がわずかに1棟残るのみとなり、周辺は居住空間ではなくなっていった。

3.まとめ



第39図 遺構配置模式図（1：500）

居住域には廃棄土坑も設置されていることから、当該調査地内に居住した集団は須恵器の生産過程の最終段階（集荷・選別作業）を担った単位集団であったと考えてよからう。しかしながら本町遺跡の中核部であろうと推定される第21次調査地点付近では、6世紀の中頃には掘立柱建物のみで構成される集落が新たに出現している。これを単に建物構造の変化という現象としてとらえるのではなく、桜井谷窯跡群の経営に成功した集団が新たに再編され、その本拠となる居住域を定めたものと理解したい。今後の調査によって周辺の詳細な資料が蓄積されることで、より具体的な集団像が明らかになることが期待される。

なお、当該調査地では多数の風倒木痕を検出している。住居等との重複関係から、少なくとも古墳後期以前の植生であることは間違いない。これらは樹幹部分の大きさを考慮するとおそらく20mを超える大木であったと推定され、10箇所以上に一定の間隔をおいて生育していたものと考えられる。古墳後期の開発によって伐採、開墾されたという確実な証左は得られなかったが、周辺ではその時期を遡る比較的大きな集落の形成がいまだ知られていない。古墳後期には須恵器の焼成に必要な燃料を調達するために多くの森林が伐採され、大洪水を引き起こしたとされる。現在の街並みが形づくられるはるか以前、古墳時代の人びとの営力によって、すでに本町遺跡周辺の開発が大規模に行われ始めていたとしても不思議ではない。

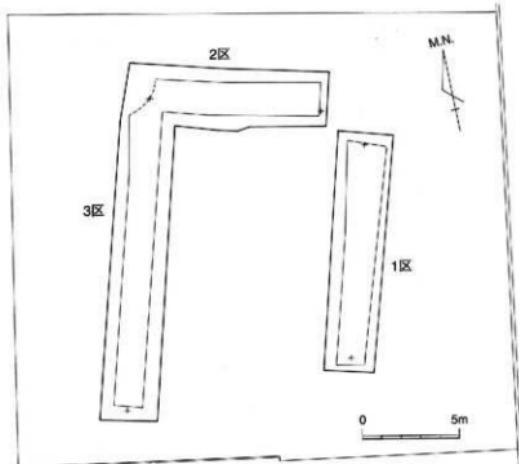
【参考文献】

- 牛村 浩他 「陶邑・深田」 大阪府文化財調査抄報第2輯 大阪府教育委員会（1973）
牛村 浩 「和泉陶邑出土遺物の時期編年」 「陶邑」Ⅲ 大阪府文化財調査報告書第30輯 大阪府教育委員会（1980）
田辺昭三 「須恵器大成」 角川書店（1981）
木下 真 「摂津桜井谷古窯跡群における須恵器編年」 「桜井谷窯跡群2-17窯跡」
—府立少路高等学校建設工事に伴う調査報告— 少路窯跡遺跡調査団（1983）
大道重信 「2-23号窯における蓋杯の変遷」 「桜井谷2-23号窯跡」 大阪大学、豊中市教育委員会（1991）
清水 鴎 「灰原の出土遺物（3）数量的検討」 「小阪遺跡」 一近畿自動車道松原海南線および府道松原泉大津線建設に伴う発掘調査報告一 大阪府教育委員会、（財）大阪文化財センター（1992）
清水 鴎 「本町遺跡第18次調査の概要」 「豊中市埋蔵文化財発掘調査概要」平成6（1994）年度
豊中市教育委員会（1995）
橋出正鶴 「本町遺跡第21次（HOM-21）」 「豊中市埋蔵文化財年報」VOL.5 1995年度版
豊中市教育委員会（1998）

第V章 穂積遺跡第27次調査

1. 調査の経緯

当調査区は豊中市服部西町1丁目849-6に所在する。今回、共同住宅建築に伴い平成11年（1999年）11月5日に埋蔵文化財発掘の届出が提出され、造成土の搬出に伴い平成12年（2000年）4月20日に確認調査を行った。この結果、敷地内に遺構の存在が推定されたことから、あらためて遺構の残存状態および分布



第40図 調査範囲図（1：250）

密度を確認するため、平成12年（2000年）5月8日から5月26日の期間で試掘調査を行うことになった。本報告は、その試掘調査の成果を報告するものである。



第41図 調査地位置図（1：5,000）

2. 調査の成果

(1) 基本層序

当調査区における基本層は現行地表を覆う造成土以下、弥生時代終末期から古墳時代前期にかけての遺構面を形成する基盤層にいたるまで、大別6層程度に区分できる水成層により構成される。以下、これら各大別層の特徴を述べるが、本文にあげる細分層の土層番号は、挿図中に記載した土層番号に対応する。

第1層 造成以前の耕作土と床土からなる。

第1層 細分層

- | | |
|----------------------------------|---------------------------------|
| 1. 耕作土 | 5. オリーブ灰色 (5Y 6/1) 極細粒砂 シルトを含む。 |
| 2. オリーブ灰色 (10Y 6/2) 極細粒砂 シルトを含む。 | 42. 灰オリーブ色 (7.5Y 6/2) 極細～細粒砂 |

第2層 灰色～灰白色極細～細粒砂からなる層厚20cm前後の水成層である。各区で共通してみられ、2～3層に細分される。細分層の特徴に大きな相違はみられないが、これら細分層の層界には攪拌や粗粒砂の層状堆積などの層離面が存在する。また、2区では同層内から幅1.5m、深さ25cm前後の水路（土層33）が掘り込まれるなど、層上部で耕作がなされた可能性が想定できる。第2層の堆積時期は、時期を同定できるほど遺物が出土しなかったため明確にはできないが、中世後期以降になることは確実である。

第2層 細分層

- | | |
|------------------------------|--------------------------------|
| 3. 灰色 (10Y 6/1) シルト～極細粒砂 | 31. 灰色 (5Y 6/1) 細粒砂 |
| 4. オリーブ灰色 (5Y 5/1) シルト～極細粒砂 | 32. 灰色 (5Y 6/1) 細粒砂 粒を少量含む。 |
| 6. 灰色 (10Y 4/1) 細粒砂 粒を含む。 | 33. 灰色 (5Y 6/1) 極細～細粒砂 |
| 9. 灰白色 (N 7/0) シルト～極細粒砂 | 43. 灰オリーブ色 (5Y 5/2) 極細粒砂 マンガン斑 |
| 8. 灰～灰白色シルト (N 6/0～7/0) 極細粒砂 | 49. 灰オリーブ色 (7.5Y 6/2) 極細～細粒砂 |

第3層 灰～灰オリーブ色シルト～極細粒砂からなる層厚20～40cmの水成層である。各区で共通してみられ、3層～6層程度に細分できる。2層とほとんど同じ特徴を呈する堆積層であるが、南部にむかって層厚が増し、堆積に偏りがみられる。第2層と同く出土遺物が乏しいため、堆積時期を確定するには至らないが、中世前期頃となる可能性が想定できる。

第3層 細分層

- | | |
|-------------------------------------|---------------------------------|
| 7. 灰色 (10Y 5/1) シルト～極細粒砂 | 36. オリーブ灰色 (10Y 5/2) 極細粒砂 |
| 10. オリーブ灰色 (10Y 5/2) 極細粒砂 粗粒砂を含む。 | 46. 黄灰色～黒褐色 (2.5Y 4～3/2) 極細～細粒砂 |
| 11. 灰オリーブ色 (5Y 5/2) 細粒砂 粗粒砂を含む。 | 47. 暗灰黄色 (2.5Y 5/2) シルト～極細粒砂 |
| 16. 灰色 (7.5Y 5/1) 細粒砂 中粒砂を含む。 | 48. 灰色 (5Y 5/1) 極細～細粒砂 |
| 34. オリーブ灰色 (10Y 5/2) 極細粒砂 | 50. 灰～灰オリーブ色 (5Y 6/1～2) 極細～細粒砂 |
| 35. オリーブ灰色 (10Y 5/2) 極細粒砂 粗粒砂を多く含む。 | マングン斑 |

第4層 オリーブ灰～褐色細～中粒砂からなり、層厚0～10cm前後をはかる。全体にしまりがなく、上面には踏み込みによる著しい攪拌が認められるなど、第2・3層とは異なる様相を呈する。また、同層の堆積は調査区北部～東部にかけて顕著に認められるが中南部では明瞭ではなく、分布に偏在性が認められる。

第4層 細分層

12. オリーブ灰色 (5Y 6/2) 細粒砂～中粒砂
 13. 楔色 (7.5Y 4/6) 極細粒砂～中粒砂
 14. 灰色 (N 5/0) シルト～中粒砂
 踏み込みにより攪拌され、中粒砂が柱状に貫入する。
15. 灰色 (N 4/0) シルト～中粒砂 土器を多く含む。
 踏み込みにより擾拌される。
 44. 黄灰色 (2.5Y 5/1) 中粒砂 しまりなし。
 45. 黒褐色 (5Y 3/2) 極細～細粒砂 糜を含む。

第5層 灰色シルトを基調とする層厚0～40cm前後の水成層である。上下面に踏み込みによる著しい攪拌が認められる。同層は2区および1区北部で明確な堆積が確認できるが、3区では層厚10cm前後の堆積にとどまるなど、北東部に偏った分布が認められる。

ところで、同層は弥生時代終末期の集落が展開する遺構面および包含層上に堆積する特徴的な土層としてこれまで注意されてきたが、その堆積時期などについては見解の一一致を見るにはいたっていない。

これは既往の調査で同層内から掘削された遺構などが確認されず、時期を決定できなかつたことによるが、今回の調査では同層堆積時に埋没した可能性が高い1区土坑2などの遺構が検出され、また1区溝1最上層が同層の堆積によることから、同層が古墳時代中期以降おそらくは後期初頭頃に堆積した可能性が想定できる。ただし、同層は洪水で一時期に堆積したのか、断続的に堆積したのか、明確にできなかつたことから堆積期間が古墳時代後期前後に限定できるか、検討の余地を残す。ただし、同層の堆積時期が7世紀前後に下る可能性は乏しいものと考えられる。

第5層 細分層

17. 黄灰色 (2.5Y 4/1) シルト 中粒砂を含む。
 18. 黄灰色 (2.5Y 4/1) シルト
 19. 灰色 (5Y 5/1) シルト～細粒砂
 20. 灰色 (5Y 5/1) シルト～細粒砂 上器・小砾を含む。
 20'. 灰色 (5Y 4/1) シルト～中粒砂柱状にマンガン斑が貫入する。
 21. 灰色 (5Y 5/1) 粘土～シルト
 22. 灰色 (5Y 5/1) 細～中粒砂がラミナ状に堆積する。
 29. 灰色 (5Y 4/1) 極細粒砂 中粒砂ブロックを含む。
 37. 灰色 (5Y 5/1) 粘土～シルト マンガン斑 中粒砂を含む。
 38. 灰色 (5Y 5/1) 粘土～シルト 細粒砂を含む。

第6層 黒褐色～黒色極細～細粒砂からなる層厚15cm前後の土層で、土器片を多く含む。同層と遺構埋土の識別は困難であり、また堆積状況も遺構の分布密度と関連するように偏ることから、住居埋土などの遺構の一部となる可能性がある。また、同層の上面から掘り込まれた遺構も多く存在することから、上面が遺構面となることは明らかである。しかし、調査段階では先に述べたように埋土の識別は困難なことから、遺物包含層として扱った。なお、同層上面には踏み込みによる攪拌が見られることから、一時期には耕作化した可能性もある。

第6層 細分層

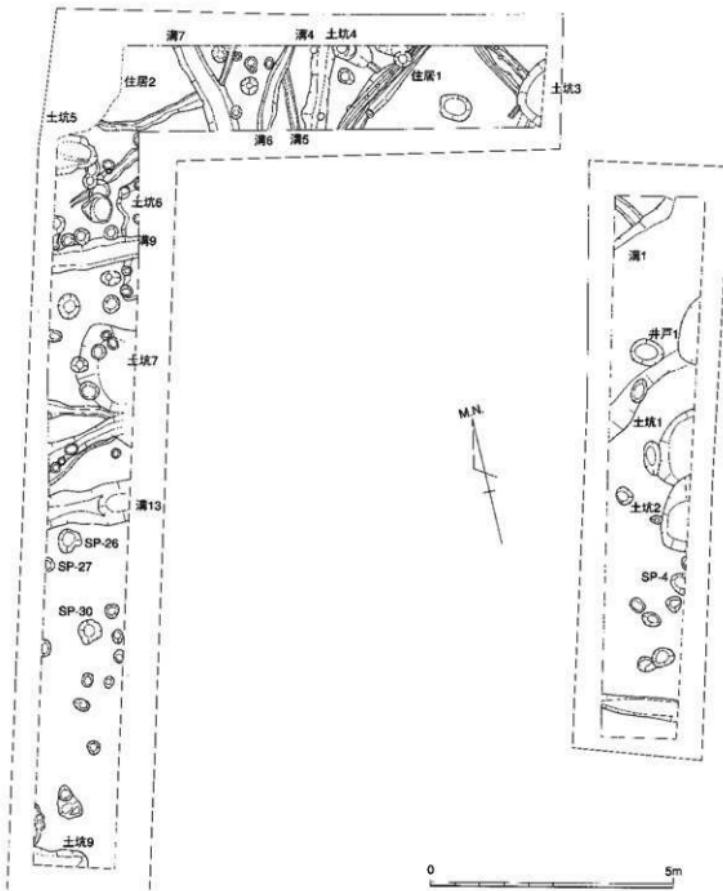
23. 黑褐色 (2.5Y 2/1) シルト～極細粒砂 上器片少量を含む。
 24. オリーブ黒 (5Y 2/5/1) 極細粒砂 中粒砂を含む。
 25. 黑色 (5Y 2/1) 極細粒砂～中粒砂
 粒径20～30μの偽礫を含む。
 39. オリーブ黒色 (5Y 3/1) 細粒砂～中粒砂
 炭・煙少量を含む。
52. オリーブ墨色 (5Y 3/1) 極細～細粒砂
 偽礫を含む。
 53. 灰色～灰オリーブ色 (5Y 4/1～2) 極細～細粒砂
 偽礫を含む。
 54. オリーブ黒色 (5Y 3/1) 極細～細粒砂
 上器片・偽礫を含む。

第7層 灰色細～中粒砂を基調とする水成層で、同層上面からは弥生時代終末期～古墳時代中期にいたる集落関連遺構を検出している。同層は先にあげた七層を基調にするが、1区と3区南

2. 調査の成果

部では青灰色極細～細粒砂に黒色極細粒砂ブロックなどを含む土層が同層上面に堆積していた。これらについては、調査段階では基盤層の一部として扱っていたが、2区住居1の貼床が同様の埋土を呈することから、基盤層の一部が住居埋土となる可能性が残されている。

なお、同層は大量の水を含み、造構を掘削する途中で著しい湧水と基盤層の崩壊が始まるなど、土層観察や井戸の掘削などに多くの支障をもたらした。



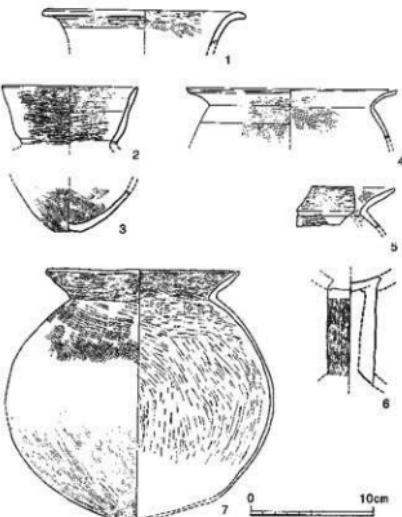
第42図 調査区平面図 (1 : 100)

(2) 1区の遺構と出土遺物

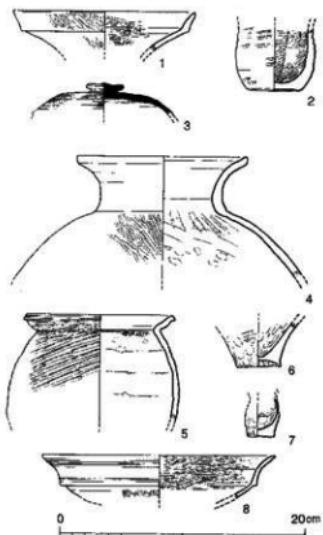
井戸1 調査区北部で検出した。遺構の東半部は調査区外にあるため、規模・形状は明確にできない。また、掘削途中に激しい湧水とともに第7層の崩壊が始まったため完掘できず、堆積状況等も確認できなかった。ただし、検出時の状況と上層部の土層観察から直径1.4m以上の平面円形を呈する素掘りの井戸となる可能性が想定できる。なお、掘削時最深部（検出面から50cm程度）で、布留古相と庄内新相を呈する甕が一括して出土したが、崩落土の中から手探りで取り上げたため、その状況は明確ではない。井戸1から出土した遺物について第43図にあげた。1～6は上層から中層にかけて、7は下層から出土したものである。

1～3は小型の甕、4・5は布留系の甕、6は高杯脚部である。2は口径11.0cmを測る直口甕の口縁部と考えられる。口縁部外面には幅1mm前後のヘラミガキが密に施される。4は復元口径17.0cmをはかる。口縁部はヨコナデを施すが、一部にハケが残る。体部内面にはハケを施すが、指ナデ状の押圧が残る。3は小型の甕の底部である。底部外面は外面のハケ調整後にヘラ等の工具で削り平坦面を形成する。7は、庄内式新層の甕である。口径15.1cm、器高21.0cmを測る。体部外面のうち、上部から中位はタタキを施すが、中位は斜格子状に2度タタキを行っている。また、体部下半は煤が付着し調整が確認にくかったが、外面は板状工具による丁寧なナデを、内面はヘラケズリを施す。

土坑1 上面は土坑2と溝1により削平され、遺構の東半部が調査区外にあることから、形状等については明確にできなかった。ただし、検出部分の長



第43図 井戸1出土遺物 (1:4)

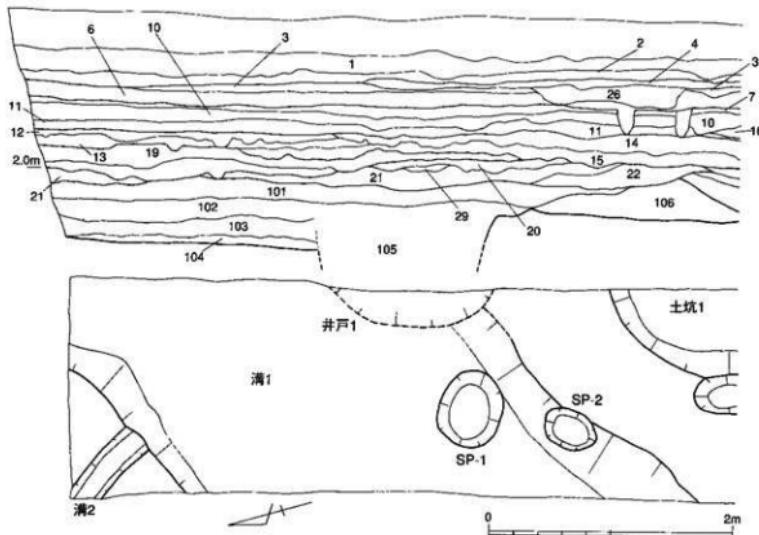


第44図 溝1出土遺物 (1:4)

2. 調査の成果

軸長は1.6mを測り、平面橢円形状の土坑になる可能性がある。土坑埋土は黒色シルト～極細粒砂の均質な堆積土からなり、土器細片を含む。弥生時代終末期の所産と考えられる。

土坑2 第5層から掘り込まれた可能性の高い遺構である。遺構の東半部は調査区外にあるため、規模・形状については明確ではないが、検出部の長軸長は1.6mを測る。埋土は、上下2層に区分され、上層は第5層に類似する灰色シルトで層内にまったくしまりのないシルト～粘土のブロックが層状に堆積するが、ブロックは偽礫と異なり埋め戻しなどの人為的な堆積土とは考えにくい。下層は灰色中粒砂でしまりではなく、土坑掘削後に流入したものと考えられる。なお、上層からはTK-23型式併行の須恵器杯蓋やほぼ同時期と考えられる土器壺などが、また下層からは石鐵が出土している。遺物はいずれも流入品であるが、ほとんど摩耗していないことから、土坑の時期は遺物の時期からそれほど隔たりはないものと考えられる。また、土坑2の時期から第5層の堆積時期の下限が古墳時代中期末以降になる可能性が示唆される。



- 溝 1**
- 101. 黒色（5Y 4/1） 塵泥～細粒砂 遺物を多く含む。
 - 102. 黒色（5Y 2/3） 細粒～細粒砂 遺物を多く含む。
 - 103. 黒色（5Y 2/1） 細粒～細粒砂 遺物を多く含む。
 - 104. 黒色（5Y 2/1） シルト～中粒砂 遺物を多く含む。
- 井戸 1**
- 105. 黒色（5Y 2/1） シルト～中粒砂 土器細片を多く含む。

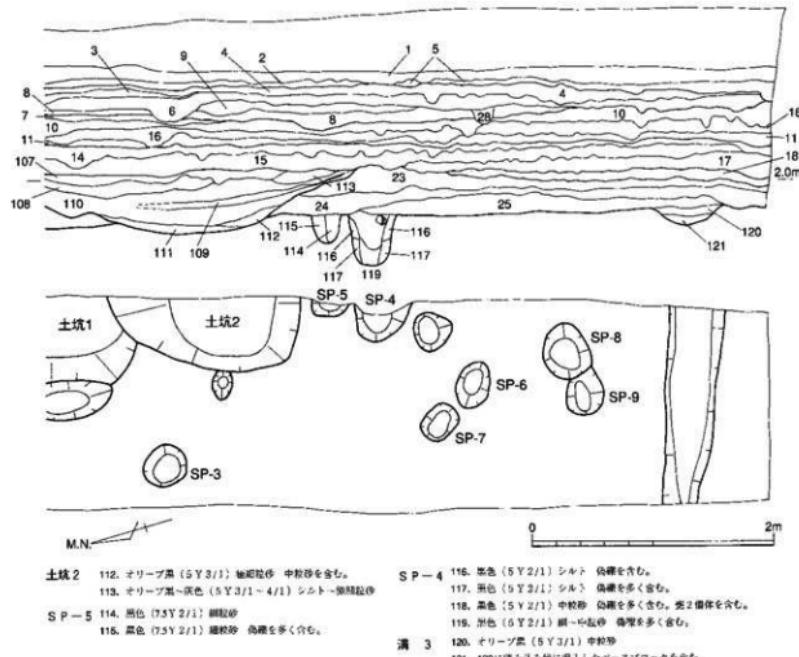
- 土坑 1**
- 106. 黒色（5Y 2/1） シルト～中粒砂 土器細片を多く含む。
 - 107. オリーブ緑（5Y 3/1） 塘泥～細粒砂
 - 108. 黒色（5Y 4/1） 堆めて均質なシルト
 - 109. 黒色（5Y 4/1） シルト～粘土のブロック
 - 110. 黒色（5Y 4/1） 均質なシルト 109を層中位に含む。
 - 111. 黒色（5Y 4/1） 中粒砂

第45図 1区平面・断面図1 (1:40)

溝 1 調査区北部で検出した北東から南西に向かって流れる幅約2.8mの溝である。溝内の埋土は上下2層に大別できる。上層は第5層の堆積により、下層はオリーブ黒～黒色板綱粒砂を基調とする。このうち、下層は土器の混入量などから3層に細分したが、埋土はほぼ同様の特徴を呈していることから、比較的安定した環境で継続的に堆積した可能性が想定できる。

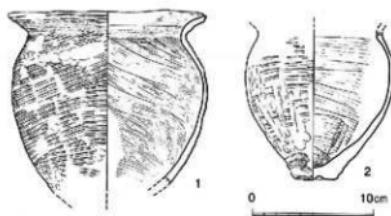
溝1は住居の周囲に巡らされた区画溝となる可能性もあるが、周囲で溝に対応する確実な住居は確認されていないことから、流路となる可能性が高い。

溝1からは第44図にあげる遺物などが出土している。1～3は上層から、4～8は中層から下層にかけて出土したものである。1は復元径14.8cmを測る壺の口縁部である。口縁側面には斜め方向にヘラミガキを施す。胎土は灰白色を呈する精良な粘土を使用し、在地産の壺とは著しく異なる特徴を有し、搬入品の可能性が考えられる。ただし、搬入元については特定しにくく、現段階では中国地方（日本海側）を想定するにとどまる。3はつまみを有する杯蓋である。天井部付近にはカキメを施す。TK-23型式前後の所産と考えられる。4は広口壺、5は在地型のタタキ



第46図 1区平面・断面図2 (1:40)

2. 調査の成果



第47図 SP-4出土遺物 (1 : 4)



第48図 SP-4断面

壺、6は底部外面をつまみ出し高台状に成形した鉢、7は壺を模倣したミニチュア土器である。8の高杯部は、復元径19.0cmを測り、口縁部外面には2条の凹線が施されている。溝1出土遺物のうち、上層出土のものは古墳時代中期の所産となるが、中下層は弥生時代終末期後半の遺物が多く占める。これらの遺物の時期には隔たりがあり、異なる遺構が重複した可能性も考えられる。しかし、井戸1上層部と溝1下層埋土に分層できるほどの差異がみられず、井戸1の堆積が溝1下層の堆積と同時期に進行した可能性が考えられることから、下層出土遺物については流入品となる可能性が残る。

柱穴 1区からは柱痕が明確なピットを10基ほど検出した。このうち、SP-1・3・4・6～9は、その掘削規模からみて竪穴住居の主柱穴になる可能性が高い。また、土坑2以南は張り床の可能性がある青灰色細粒砂層が基礎層となっていることも注意される。なお、SP-7からは2区南方で出土した器台または壺の口縁部(第59図)に類似する細片が、またSP-4からは柱抜き取り後、偽礎とともに大小2個体の壺(第47図1・2)が抜き跡に押し込まれたような状態で出土した。SP-4から出土した壺のうち、1は口径16.4cmを測る中型の壺である。外面のタタキは体部下半まで連続して施され、体部上半の一部には接合時の押圧痕が残る。2は残存高12.3cmを測る小型の壺で、体部外面はタタキ成形のちナデを施す。また底部付近は指による強い横ナデが施される。

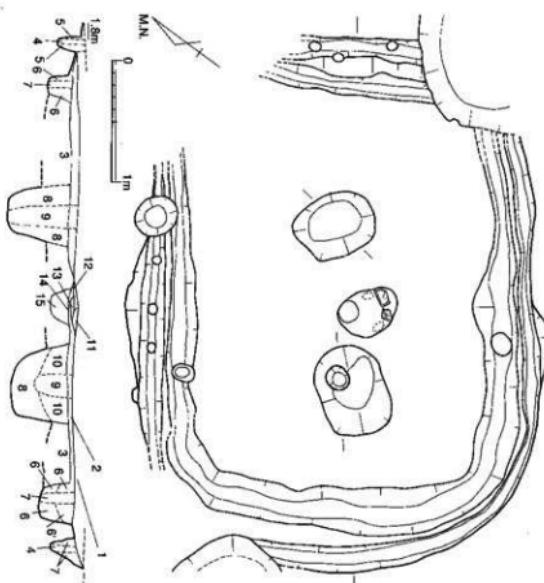
(2) 2区の遺構と出土遺物

住居1 調査区東部で検出した平面長方形の住居である。壁溝が二重に巡ることから、建て替えによる2時期の変遷が想定できる。以下、建て替え以前を1期、以後を2期として各時期の特徴を述べる。

住居の規模は、1期で長軸長3.7m、短軸長2.8mをはかり、略南北に主軸をとる。2期には四隅の櫛溝をそれぞれ約30cmほど拡張し、長軸長4.4m、短軸長3.2mの規模に拡大する。

住居内で検出した柱穴は2基にとどまるが、いずれも住居長軸の中央ライン上に配置されている。柱穴の規模は、直径70cm、検出面からの深さ50cm、柱痕などから推定される柱の直径は30cm前後である。これらの柱穴には重複関係は見られないことから、建て替えにより主柱穴が差し替

- 住居1**
- オリヅル色 (23YY11) シート、屋片を含む。
 - セリーブ風呂 (22YY11) 鋼管鉄水道を含む。
 - 褐色 (N3/3) リン・酸化鉄水道を含む。
 - 褐色 (N3/3) ガラス断片 (分量多く含む)。
 - 褐色 (N3/3) レンガ、陶器を含む。
 - 褐色 (N3/3) レンガ、陶器を含む。
 - セリーブ風呂 (22YY11) 鋼管鉄水道を含む。
 - 褐色 (N3/3) レンガ、陶器を含む。
 - 褐色 (N3/3) レンガ、陶器を含む。



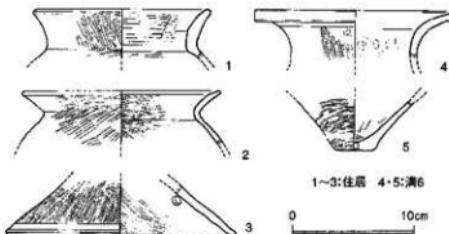
第49図 住居1平面・断面図 (1:40)

えられた可能性は乏しいものと判断される。二つの主柱穴の距離は、柱芯で約1.4mを測り、その中央に炉を設置する。

炉は、直径20~30cm、深さ1~2cmほどの浅い窪みに灰・炭・焼土が堆積する地床炉である。炉は、住居中央付近に少なくとも3基以上が重複する。こ

れらは、1期の床面から2期の床面にかけて検出されていることから、炉の周辺に関しては、建て替えに伴う整地や作業や炉の移動などは行われなかったことが予想される。

なお、第2期の床面最上面で検出した地床炉は重機掘削時にその大半を削平してしまったが、残存する部分では約5~10cm前後の石が5個ほど並んだ状態で検出された。石の下部には粘性の強い緻密な粘土が充填されており、意図的に配置された可能性が高いものと判断されることから、最終面上の炉は平面不整円形を呈する石囲いを設置していたと想定できる。



第50図 住居1・溝6出土遺物 (1:4)

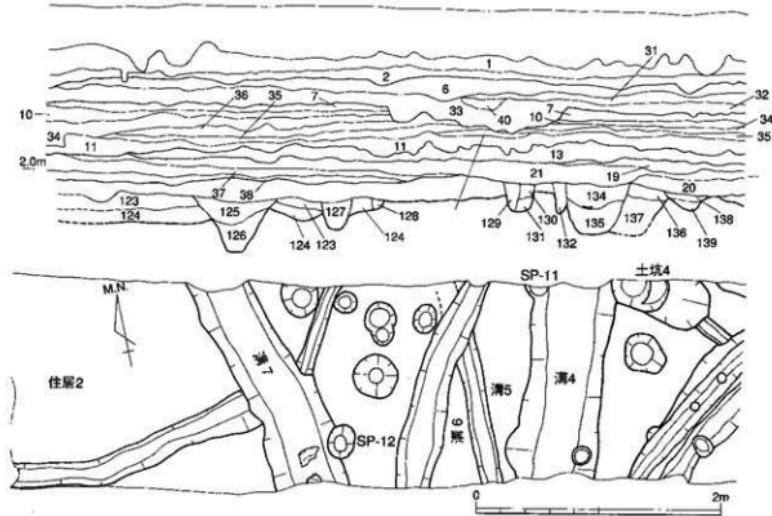
2. 調査の成果

壁溝は、1期・2期とも幅10~30cm前後、検出面からの深さ10cmを測る。いずれの溝も断面に幅7~8cm前後の土留め板らしき痕跡が認められる。また、基底部には直径5cm前後の杭の痕跡と考えられるビットを検出したことから、壁体は横矢板の土留めを杭で支持する構造であった可能性が想定できる。

貼床は基盤層と酷似する青灰色極細粒砂に偽礫を含む厚さ20cmほどの整地土からなり、その上面から炉・塗溝が掘り込まれる。しかし、2期の壁溝が1期の貼床上に堆積するオリーブ黒色極細粒砂層の上面から掘り込まれることから、建て替えに伴う確実な貼床は認められない。

住居の周囲には正円状に溝（溝6）が巡らされる。溝6は幅35cm、深さ10cm前後をはかり、黒褐色極細粒砂を埋土とするが、堆積状況に大きな特徴はみられなかった。

なお、住居1内からは第50図1~3にあげる遺物が出土している。1の角頭壺は、復元径14.6cmを測る。口頭部外面にはヘラミガキ、内面にはハケによる調整を施す。2は在地のタタキ壺で、



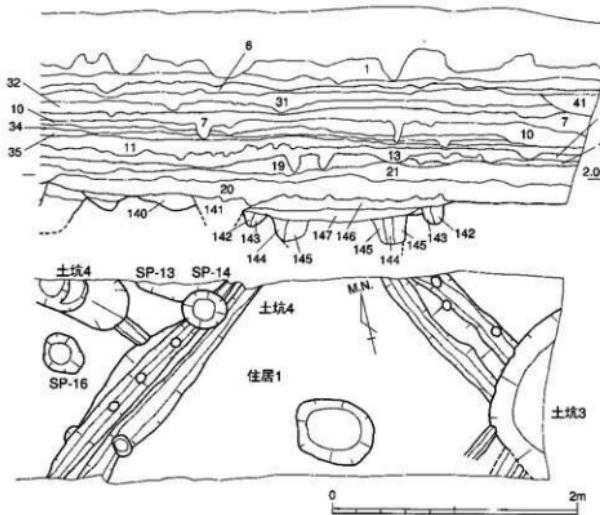
- | | | |
|------|--|--|
| 住居 2 | 127. オリーブ黒色 (5Y3/1) 横縞・縦波紋 焼痕を含む。(内透2切削) 土坑 4 | 130. オリーブ黒色 (5Y3/1) シルト |
| | 128. オリーブ黒色 (7.5Y3/1) 横縞・縦波紋 | 130. オリーブ黒色 (5Y3/1) シルト 偽礫を含む。 |
| | 129. オリーブ薄青色 (5Y3~2/1) 縦波紋・中起波・土斑・焼合
れ。基下部に偽礫を少數含む。 | 131. 黒色 (X2/0) 黒泥～粘土砂 土器片含む。 |
| | 130. オリーブ黒色 (5Y3/1) 斜面・縦波紋 焼痕を少量含む。 | 132. 黒色 (X2/0) 縦波紋・粘土砂 基・土器片多く含む。 |
| 溝 7 | 125. 黑褐色 (2.5Y3/1) 中起波 焼痕を含む。 | 134. 黒灰色 (X3/0) シルト～縦波紋砂 基下部に土透け・焼痕を含む。 |
| | 126. オリーブ薄青色 (5Y3~2/1) 縦波紋・中起波 烧を含む。 | 135. 黑灰土 (N3/0) シルト～縦波紋砂 基下部に土透け・焼痕を含む。 |
| | | 136. 黑色 (5Y4/1) 焼痕～粘土砂 焼痕を含む。(第5根土か) |
| | | 130. オリーブ黒色 (7.5Y3/1) 焼痕 中起波含む 上部1/2を少量含む。 |
| | | 131. オリーブ黒色 (7.5Y3/1) 焼痕～縦波紋 |

第51図 2区平面・断面図1 (1:40)

復元径16.2cmを測る。口縁端部内面には強いナデを施す。3の高杯裾部は3方向に透孔を、裾端部には沈線を施す。また、裾部外面には緻密なヘラミガキを、内面にはハケを施す。器6からは4の広口壺、5の有孔鉢が出土している。

これらは、いずれも弥生時代終末期の様相を呈する遺物であるが、住居覆土中に布留式もしくは庄内新相頃と考えられる甕部の細片が出土している。住居1は石囲いの炉を有し、またその周囲に浅い溝を巡らすなど、当遺跡で確認される終末期～庄内期にかけての住居に比べやや新しい特徴を呈し、またわずかではあるが出土遺物中に布留式もしくは庄内式の甕片を含むことから、布留古相前後の時期となる可能性が考えられる。

住居2 調査区西部で検出したが、擾乱により住居西部は破壊されており、また大半が調査区外にあることから、その規模等の詳細については明確ではない。ただし、検出部分から主軸が北東となる住居で、周囲に幅25cmほどの壁溝を巡らすことは確定である。住居内の堆積土はほぼ2



S P - 13

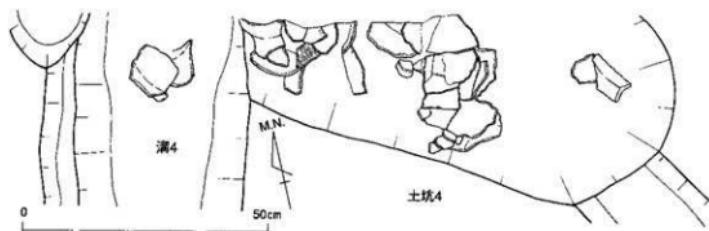
141. 黒色(7.5Y 2/1)シルト～粗粒砂 陶器を含む。
S P - 14
140. 黑色(7.5Y 2/1)シルト～粗粒砂 陶器を少量含む。

住居1

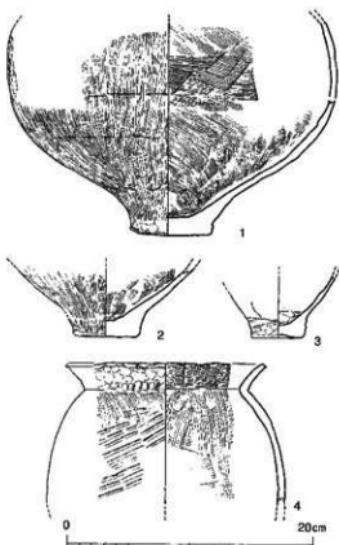
142. 海浜色(N 3/0)中～粗粒砂 陶器多く含む。
143. 黒灰色(N 3/0)中～粗粒砂 陶器を含む。
144. 塗灰色(N 3/0)シルト 陶器を少量含む。
145. 黒灰色(N 3/0)シルト 陶器を含む。
146. オリーブ緑色(2.5Y 3.5/1)シルト 陶片を含む。
147. オリーブ褐色(2.5Y 3.5/1)粗粒砂 陶器を含む。

第52図 2区平面・断面図2 (1:40)

2. 調査の成果



第53図 土坑4・溝4平面図 (1:10)



第54図 土坑4出土遺物 (1:4)

層に大別される。下層は偽縞を含む青灰色中粒砂層からなり張り床となる可能性が高いが、壁溝は上層上面で検出されていることから、建て替えなど2時期前後の変遷があった可能性も残されている。住居2からは瓶体部などが出土したが、その時期は明確にしにくい。ただし、上面より溝7が掘削されていることから、布留古相以前に廃絶したことは確實と言える。

土坑3 調査区東部で検出した土坑であるが、大半は調査区外にあるため、その規模については確定できなかった。ただし、検出部分から直径1.6m以上の円形を呈する土坑と予想される。土坑3は平面形状から井戸になる可能性も少なからず残されているが、検出部分の深さは最深でも20cm前後に留まる。なお、造構の時期についても出土遺物が少ないため明確ではないが、住居1を削平することから、布留式以降の可能性が考えられる。

土坑4 調査区中央付近で検出した。土坑の北側は調査区外にあるため、溝となる可能性も残されている。土坑は平面橢円形を呈し、検出部分での規模は長軸長0.8m以上、短軸長0.5m前後となる。土坑の上層からは第54図に掲載した壺(1~3)・甕(4)などが散乱した状態で出土した。1は扁球形の体部に突出した底部を有する。2はやや突出気味の底部に球形の体部を有する中型品となる。3は小型の壺と考えられるが、鉢となる可能性も残る。4は口縁部を押仄で仕上げたままで、その形状は著しくいびつであり、口径の復元には問題を残している。なお、4の胎土は豈中周辺ではあまり見られず、搬入品となる可能性も残る。

溝4 調査区中央付近で検出した、幅0.65m、深さ40cm前後の溝である。溝埋土は上下2層

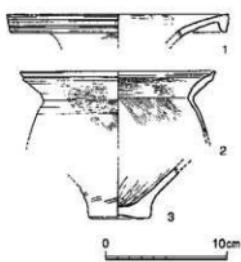
に大別できる。下層は偽縛を含み、上層は自然堆積土になることから、溝の深さを調整するために、掘削後に溝の深さを調整するため埋め戻した可能性もある。なお、上下層の境からは第55図にあげた遺物などが出土している。1の広口壺口縁部は口径18.0cmを測る。口縁下部を粘土帯により拡張し、側面に3条の凹線を施す。さらに円形浮文を張り付けるが、これらは剥離しており配置については明確ではない。2の壺は復元径16.0cmを測る。口頭部外面にはナデを、体部外面には丁寧なハケを施すが、押圧痕が一部に残る。1・3は古い様相を残すが、2から溝4は、弥生時代終末期以降となる可能性が高い。

溝7 住居2に一部重複する溝で、幅0.6m、深さ0.4m前後を測る。溝内の埋土は上下2層に区分でき、下層は溝機能時の堆積層、上層は溝の機能停止後の埋め戻し土となる。下層上面からは土器が廃棄されたような状態で出土しており、溝が機能停止した後、土器の投棄が行われたようである。

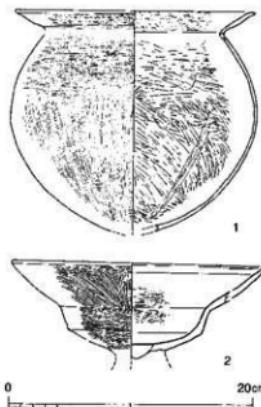
溝7からは第56図にあげる遺物が出土している。1は布留式壺である。体部および口縁部の一部が残存するだけで、口径などの復元には若干の問題を残す。口縁部から体部外面の上半はすり消し状のナデを、下半部には板状工具による丁寧なナデを施す。内面はやや粗雑なハラケズリを施す。2は有段口縁を有する高杯形部である。口径20.3cmを測る。外面上半および見込みには放射状の分割ハラミガキを、その他の部分には横方向のハラミガキを施す。脚部との接合には円盤充填法を用いる。

なお、溝7は出土遺物の時期から布留古相段階の所産となる。

(井戸2) 拡張区で検出した直径1.1m前後、深さ0.6m程度の素掘りの井戸である。調査期間の制約と著しい湧水から、堆積状況などは略測しただけにとどまる。土坑の堆積土は大別3層に区分できる。下層は、黒色シルトを主体に灰色中～粗粒砂のラミナを含む自然堆積層で層厚30cm前後を測る。中層は大型の偽縛を含む黒色極細粒砂が主体となる人為的な埋め戻し土で、層厚20cm前後を測る。上層は中層堆積土が土圧などにより陥没したあと流入した堆積土と考えられる。井戸2からは第57図にあ



第55図 溝4出土遺物
(1:4)



第56図 溝7出土遺物 (1:4)

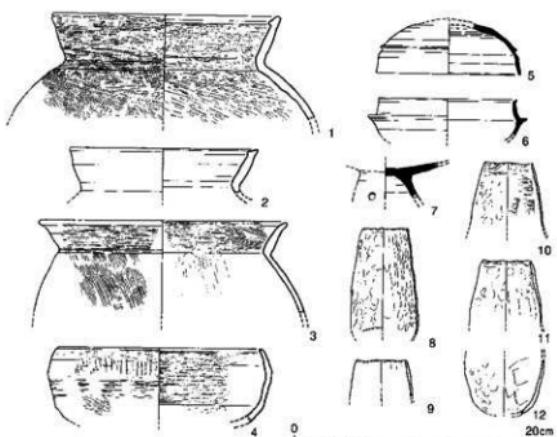


第57図 井戸2出土
遺物 (1:4)

2. 調査の成果

げる遺物などが出土している。1は上層から出土した広口壺口部である。復元径12.4cmを測る。内外面ともにナデを施し、口縁部上面には線刻が認められる。線刻の意匠については、水鳥のようにもみられるが判然としない。2は中層と下層の層境付近から出土した器台である。平均器高8.4cm、受部径11.0cmを測る。口縁・柄部端部はナデ、それ以外にはヘラミガキを施す。また、脚柱部と裾部の境界付近に4方向の透孔を施す。脚柱部外には緻密なヘラミガキが施されるが、平滑には仕上げられず、粘土の巻き上げに伴う起伏が観察できる。なお、井戸2は出土した器台から出土式古相頃の所産となる。

(落ち込み1) 拡張区で検出した南西へ伸びる遺構である。溝になる可能性が高いが、掘り形が明瞭でなく、1区でも対岸部分が検出されなかったことから落ち込みとして扱うこととした。落ち込み内の堆積土は黒色細粒砂層が主体となる。上下で堆積土に大きな変化は見られないが、上層には製塩土器が多く含む一方、下層では甌などの大型片が多数含まれるなど、出土遺物の特徴から2層に大別できる。出土した遺物の一部を第58図にあげた。1・2はともに布留式以降の甌で、いずれも器壁は厚く、口縁上端部は面取りを行い肥厚する。3は在地系の甌で、復元径20.0cmを測る。長胴形の器形が予想される。体部内面は板状工具によるナデで平滑に仕上げられるが、一部に押圧痕を残す。4の楕型の鉢は、復元径16.2cmを測るが、残存部が少なく口径の復元にはやや疑問を残す。体部外面にはナデを施すが、下半部には板状工具による調整痕が5~7mm間隔で残されている。また、下半部にはヘラケズリが認められる。5は復元径11.6cmを測る。天井部内面は平滑なナデを施すが、一部にタタキ痕らしき痕跡が見られる。6は復元径11.2cmを測る。残存部が少なく、ヘラケズリの範囲などは確認できなかった。7の高杯脚部には3方向に



第58図 落ち込み1出土遺物 (1 : 4)

円形の透孔が穿たれる。5~7はTK-23型式の所産と考えられる。なお、落ち込み1上層は、その出土遺物からみて隣接する1区溝1とはほぼ同時期の所産となり、また溝1の方向と並行していることから、何らかの関係があるようにも想定できるが、明確にはできなかった。

このほか、落ち込み1下で検出した柱穴か

ら、第59図の器台または壺の口縁部と考えられる遺物が出土した。1は復元径23.0cmを測る。口縁端部は上方へ拡張され、側面には5条の凹線が施される。口縁部内面および頸部にはヘラミガキが施される。胎土は精良で淡黄色を呈し、在地産とは異なる混和剤を含む。青木式などの中国地方（日本海側）からの搬入品もしくはそれに類似する非在地系の一例と考えられる。

（2）3区の遺構と出土遺物

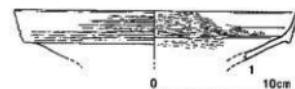
土坑5 調査区北部で検出した東西0.9m、南北0.7mを測る平面楕円形を呈する土坑である。土坑は大別2層に区分でき、上層には偽礫を含むことから機能停止後に埋め戻された可能性がある。上下層の層境から、鉢1個体が出土した。出土した鉢（第60図）は、平均口径8.9cm、器高7.4cmを測る。底部内面以外は板状工具によるナデを施すが、成形時の押圧が残るなど調整は粗雑である。

土坑6 調査区北部で検出した平面不整形を呈する土坑である。大半は調査区外にあるため、その規模などについては不明であるが、検出部分における長軸長は2.6mを測ることから、住居の一部となる可能性が残る。なお、溝9上面を一部削平していることから、布留式古相以後の所産と考えられる。

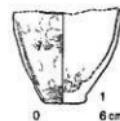
土坑7 調査区中央付近で検出した。遺構の大半は調査区外に伸びることから、その規模等については明確にはできないが、検出部分から幅1.6m以上の平面楕円形を呈する土坑となる可能性がある。土坑内の堆積土は黒色極細粒砂～中粒砂を主体とし、土器細片を多数含むことから廃棄土坑となる可能性が考えられる。

土坑8 調査区南部で検出した長軸長0.5m、短軸長0.4m、深さ10cm前後を測る平面不整形の七坑である。重機掘削時、同土坑上面付近で須恵器壺の大型片がまとまって採取されたことから、第6層（包含層）上面から掘り込まれた土坑の基底部となる可能性が残されている。なお、土坑8は重機掘削時に採取された須恵器から古墳時代中期末の遺構と考えられる。

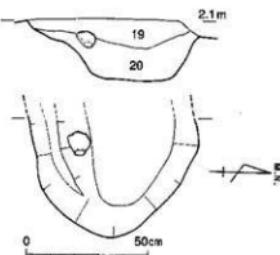
土坑9 調査区南部で検出した土坑である。土坑の大半は調査区外に伸びることから、その規模等については明確ではないが、幅0.5m以上、長さ1.1m以上の平面楕円形状を呈する土坑もしくは溝となる可能性がある。土坑上層からは土器細片が、下層からは第62図に挙げた遺物をはじめ、土器がまとまった状態で多数出土した。



第59図 落ち込み1下柱穴出土遺物
(1:4)

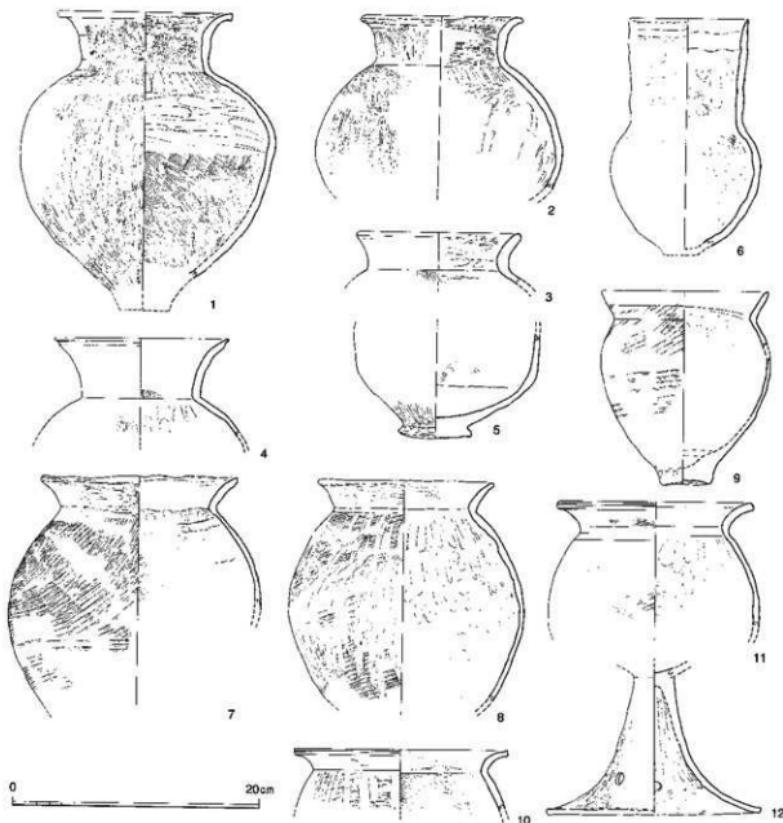


第60図 土坑5出土遺物
(1:4)



19. オリーブ褐色（5Y3/1）表面～縁部
偽礫を含む。
20. オリーブ褐色（10Y3/1）縁部
土器細片を含む。
第61図 土坑5平面・断面図
(1:20)

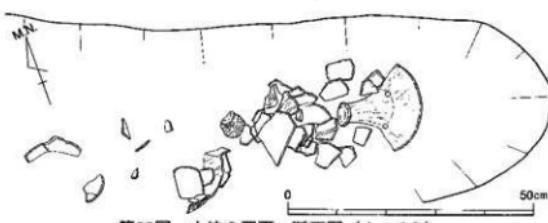
2. 調査の成果



第62図 土坑9出土遺物（1：4）

1は復元径14.3cm、残存部から予想される器高25cm程度の中型の広口壺である。外面は口縁部を除き、ヘラミガキを施す。2は復元径13.2cmを測る。外面は口縁部を除きヘラミガキを施し、体部内面はヘラケズリを行ったあと板状工具による調整を行う。4は復元径14.0cmを測る広口壺である。口縁端部に強いナデにより1条の凹線が施される。体部外面はヘラミガキを施すが、内面は風化しているため、その調整は明確ではない。6は、復元径10.0cmを測る長頸壺である。頸部から体部にかけてハケ調整を行うが、頸部の一部にはヘラケズリが施されている。また、口縁部外面は板状工具による粗雑なナデが施される。9は器高16.1cm、口径13.6cmを測る小型の壺である。口縁部は、口縁タタキ出しのあと粘土帯を追加し形成する。7・8・10・11は中型の壺で

あるが、7を除き、
体部外面に板状工具
によるナデか、ハケ
による調整を施す。
内面の調整は7・10
が横方向のハケ、
8・11がナデ上げに
よる。7の口径は

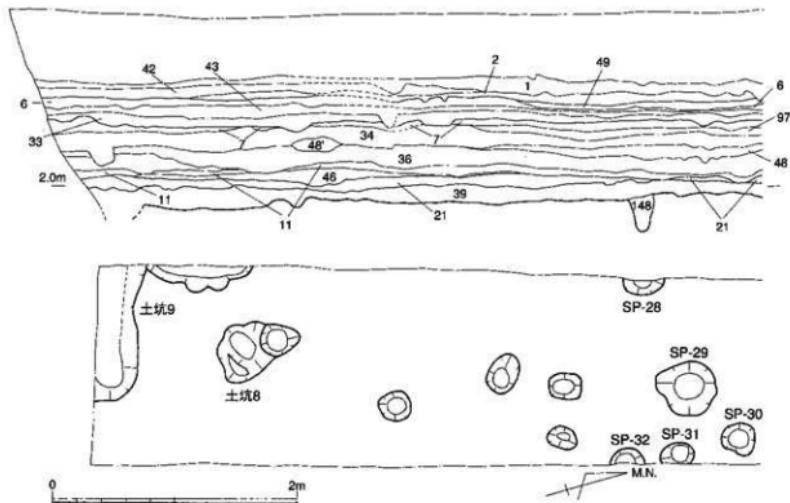


第63図 土坑9平面・断面図 (1:10)

15.9cm、8は14.2cm、10は17.2cm、11の復元径は16.0cmである。12は裾部径17.4cm、脚部の高さ11.5cmを測る。裾部と脚柱部の境界付近に3方向の透孔を穿つ。外向には1mm前後のきめ細かいヘラミガキを、また裾部内面にはハケを施すが、脚柱部は絞り痕を残し調整は施されていない。なお、受部との接合方法は確認できなかったが、円盤充填法による可能性が高い。

溝9 調査区北部で検出した幅0.6m、深さ0.5mほどの溝である。溝内の埋土は上下2層に大別できるが、いずれも偽縄を含む。上下層の層境から、第65図1~3などの土器が出土している。なお、溝内の堆積土の様相は2区溝4と類似する。

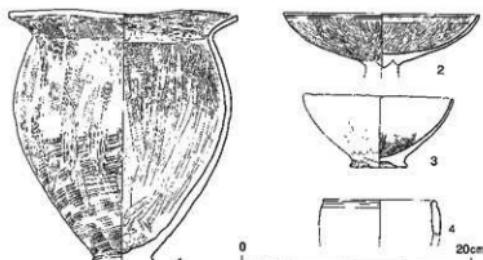
1は在地型のタタキ甕である。口径20.0cm、器高22.7cmを測る。口頭部から体部にかけては、タ



第64図 3区平面・断面図1 (1:40)

2. 調査の成果

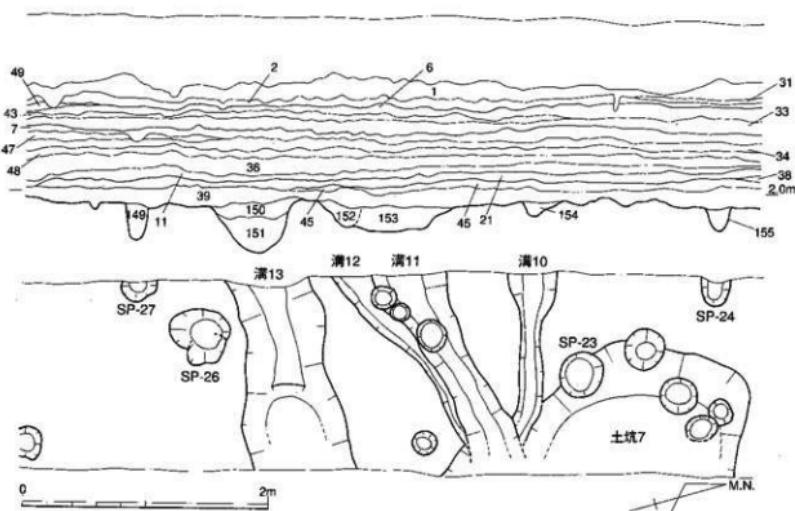
タキ痕を板状工具でり消すようなナデが施されている。体部下半部に残るタタキ痕は並行に近く、分割成形に伴う方向転換は明確に確認できなかった。2は浅い椀型の高杯杯部である。口径17.0cmを測る。内外面ともにヘラミガキを施すが、口縁外面には強いナデにより1条の凹線が巡らされる。脚柱部との接合は、円盤充填法による。3は復元径13.2cmを測る鉢である。体部内外



第65図 溝9・13出土遺物

面は押圧・ナデを、底部内面にはハケが施される。底部は押圧により高台状に成形される。遺物の時期は確定しにくいが、庄内式の範疇に収まるものと考えられる。

溝13 調査区中央付近で検出した東西に伸び



SP-27 149. フリーブ黑色 (5Y3/1) 塗膜-繊維砂-板状砂-角礫を含む。

溝13 150. 黄色 (5Y4/1) 塗膜-繊維砂-角礫少量を含む。

151. 黄色 (5Y4/1) 塗膜-繊維砂-角礫-上器片を含む。

溝12 152. 黄灰色 (2.5Y4/1) 塗膜-繊維砂-角礫-土器片を含む。

溝11 153. 黄色 (5Y4/1) 塗膜-繊維砂-角礫-上器片を含む。

溝10 154. 黄色 (5Y4/1) 塗膜-繊維砂-角礫を少含む。

SP-24 155. 黄色 (5Y4/1) 塗膜砂-中粒砂-角礫を含む。

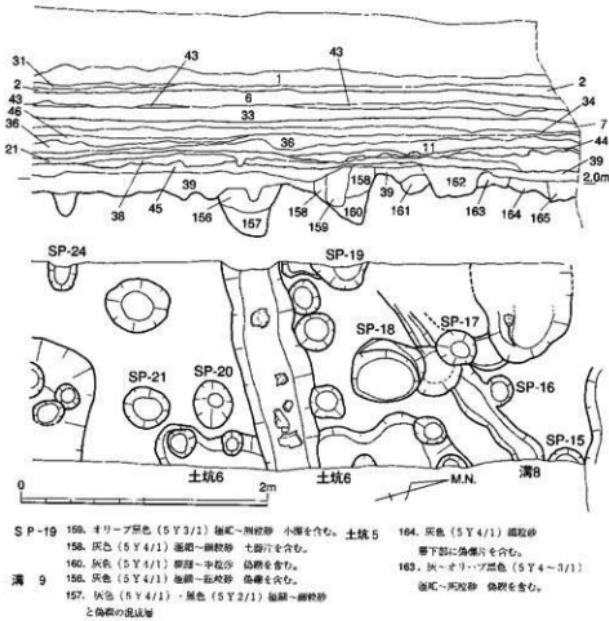
第66図 3区平面・断面図2 (1:40)

る幅0.7m前後の溝である。溝の東側は、一段深く掘り込まれ土坑状の形態を呈し、溝から派生する水溜めとなる可能性も考えられる。

溝13からは第65図4とともに布留式壺と考えられる壺体部片が出土している。4は復元径9.8cmを測るが、残存部が少なく復元にはやや問題を残す。内外面は摩耗し調整は明確ではないが、口縁下部に1条の円線が巡る。器種については明確にはできないが、小型の直口壺か鉢となる可能性が想定される。溝13は、出土遺物から布留式壺の所産となる可能性がある。

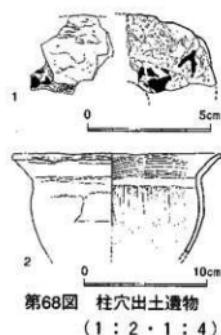
柱穴 当調査区からも多数柱穴を検出した。これら検出した柱穴のうち、SP-18・19・26・29は掘削深度も一段と深く、竪穴住居の主柱穴となる可能性が高い。特に、SP-26と29は規模・掘削深度ともに類似し、同一住居の柱穴となる可能性が想定される。また、SP-26の埋土からは、フイゴの羽口の一部となる可能性が高い土製品が出土しており、鋳造に関連するなにがしかの施設が周辺に存在した可能性が示唆される。

柱穴から若干の遺物が出土しているが、ここではSP-26・27から出土した遺物を第68図にあげた。1はSP-26から出土したフイゴの羽口と考えられる土製品の一部である。残存部が少な



第67図 3区平面・断面図3 (1:40)

3.まとめ



第68図 柱穴出土遺物
(1:2・1:4)

く、その全容を想定することはできなかった。破断面には滑津と推定される黒色を呈するガラス質の付着物が多数みられ、内面は被熱により赤色化している。胎土は石英・長石などを母材とする細～中粒砂を多く含む。2は復元径17.0cmを測る鉢である。内面はハケを、外面はナデによる調整を施す。

なお、そのほかの柱穴についても、掘立柱建物などの一部となる可能性が残るが、調査区の制限もあって、これらの柱穴の性格については明確にはできなかった。

3.まとめ

今回の調査は著しい湧水などの悪条件など多くの制約が重なり、造構の詳細を十分明確にできなかつたところが多く残された。しかし、検出された多数の造構より、当該調査区に弥生時代終末期後半（末）から古墳時代中期にいたる集落関連造構が集中することが判明した。造構の変遷をみると、土坑4・9など弥生時代終末期後半から作られはじめ、庄内期の井戸2を経て、布留古相段階で竪穴住居1・溝7・井戸1などが展開する。その後、布留新相の段階まで造構は見られないが、再びTK-23形式段階に溝1・落ち込み1などの造構が現れ、土坑2・土坑8を最後にその後は継続的な造構の展開は見られなくなる。このように、当調査区における集落関連造構の中心時期は布留式古相前後の段階にあり、この時期の集落中心部が当該調査区付近にあった可能性が高いと判断できた。また、3区SP-26から鋳造関連製品が出土したことは、当跡における銅製品の生産を裏付ける大きな成果となった。以下、調査で得られた成果をもとに、穗積遺跡における集落の問題について検討する。

（1）弥生時代終末期～古墳時代前期の集落

これまで穗積遺跡では、弥生時代終末期～古墳時代前期の集落関連造構が多数検出され、特に弥生時代終末期の拠点的な集落として認識されてきた。また、当遺跡内には少なくとも2つ以上の集落が存在すると考えられているが、特に遺跡中央部付近に位置する集落は今回の調査を含めこれまで17次の調査が行われ、その実態が明らかにされつつある。よって、ここでは当調査区が位置する中央部の集落を対象に、その様相と変遷について検討する。

遺跡中央付近に展開する集落の規模は東西約500m、南北約250mと市内でも傑出した規模を有する。集落はまとまった領域の中で展開するが、各調査区の状況をみると、河川などの地形界がみられ、集落を3群程度に細分することが可能である。

以下、既往の成果を踏まえつつ、各群の様相を概観する。

第1群 第7・10・18次調査区を中心とする小集落である。第1群の範囲は第19次調査区河川を西限とし、第22次調査区北部を南東限とすることが予想される。また、第1群内にも小河川（第3・7次調査区）が流れることから、第7次調査区と第10・18次調査区の東西2小群に細分で



第69図 稲積遺跡内集落構成模式図 (1:5,000)

きる可能性が残されているが、第7次調査区では河川間際まで遺構が分布することから第2・19次調査区の河川ほどの地形界となる可能性は乏しいものと考えられる。

第1群内では、円形周溝を伴う方形の竪穴住居や2間×3間以上の規模を有する掘立柱建物などが多数展開し、極めて濃密な遺構の分布が見られる。いまのところ、第2群のような傑出した建物は確認されていないが、弥生時代終末期には集落の中枢部であった可能性は高い。第18次調査区では、住居周溝と考えられる溝から連続式銅鏡未製品3点と粗製の銅鏡1点が出上り、群内で銅鏡の生産が行われていた可能性が極めて高いことが指摘されている。また、第7・18次調査区で若干のすり石が出土していることは注意されよう。

第1群における主要な遺構の時期は弥生時代終末期（後半）を中心とし、古墳時代前期に継続する可能性は乏しいことが考えられる。

第2群 第2・19次調査の河川を隔てた第1群の西方、第17・24次調査周辺を中心とする一群である。第2群は第9・11・28次調査区付近を西限に、また第6次調査区南部を南限とし、第24次調査区を北限とする。3群の中では広い範囲を有するが、第26次調査区以西では遺構の分布は散漫であり、実質的な範囲はその東半部に限定される。

第2群の状況は調査例が少なく明確ではないが、第24次調査区において4間×3間以上の縦柱建物などが検出されていることから、第1群と同様の展開があった可能性が想定できる。しかし、第17次調査区や第9次調査区では2間×2間程度の一般的な建物が主体を占めており、群内に格差があった可能性も残されている。また、第2群内ではいまのところ銅鏡の出土ではなく、銅鏡生産との関連については不明である。なお、第2群も第1群と同様に出土遺物からみて弥生時代終末期を中心とし、古墳時代前期に継続する可能性は乏しいものと考えられる。

第3群 第22次調査区南端を北限に、第1次調査区を西・南限とし、第1・16次調査区および当調査区を中心とする群である。その北限については第22次調査区と想定しているが、隣接地域

3.まとめ

の試掘調査では遺構の分布に粗密がなく、第1群との境界は確定できない部分を残す。

第3群では周溝を伴う豊穴住居や掘立柱建物などを検出しているが、特に傑出した建物などはいまのところ確認されていない。検出された遺構は弥生時代終末期～古墳時代前期を中心に、中期末にいたる。同群における遺構の変遷をみると、弥生時代終末期には若干の豊穴住居や掘立柱建物などが展開するだけで、第1・2群と比べ散漫な様相が想定される。しかし、古墳時代前期には遺構の増加が見られるようになり、この時期に盛期を迎えるものと考えられる。なお、同群では第1次調査区で粗製の銅鏡1点が、また当調査区でもフイゴの羽口と考へられる土製品が出土していることから、第3群内で銅製品の生産が行われていたことは明らかと言える。

以上、簡単ではあるが、各群の様相について概観した。これら各群の変遷をみると、集落北部にあたる第1・2群が弥生時代終末期のうちに盛期を迎え、そして衰退するのに対し、第3群は古墳時代前期によくまとまつた集落形態を形成することで相違が見られる。このような各群の動向をみると、第1・2群の成員が何らかの事情により、古墳時代初頭に第3群へ移動した可能性が想定される。しかし、第3群の範囲および遺構密度からみて、第1・2群のすべてが移動したとは考えにくく、第3群のほかに南東の集落などにも移動したと考える方が妥当であろう。

穂積遺跡における集落を3群に区分して検討した結果、弥生時代終末期に盛期を迎えるながらも、古墳時代初頭に移動し規模を縮小することが明らかになった。このような動向は、服部遺跡など天竺川流域の集落にもあてはまる可能性があり、継続的に展開する猪名川下流域の集落とは対照をなすことは、この時期の集落を考える上で一つの課題となろう。

(2) 鋳造関連遺物の出土について

当調査区において、フイゴの羽口の一部と考えられる土製品が出土したことにより、穂積遺跡で銅製品の生産が行われていたことは確実となった。その時期については共伴遺物に乏しく明確にできないが、弥生時代終末期もしくは古墳時代前期となる可能性が高い。

同遺物が弥生時代終末期の所産となる場合、第18次調査区の銅鏡未製品との関連からも、銅鏡生産が第1群内に限らず集落の広い範囲で行われたか、第3群内で鋳造過程が、第1群内で加工・選別過程が行うなどの分業がなされた可能性が想定できるようになる。一方、古墳時代前期の所産とした場合、弥生時代終末期段階では第1群で行われていた銅鏡生産が、集落の移動とともに第3群内で行われるようになった可能性が想定できる。このように、時期によって穂積遺跡における銅製品（？）生産が、一時的に活発に行われたか、もしくは断続的ではあるが長期にわたりて行われたか、その実態にかかる評価は大きく分かれる。よって、この問題については、今後資料の蓄積を待って改めて検討することにしたい。

以上、今回の調査で弥生時代終末期に拠点的集落として盛期を迎える穂積遺跡が、規模を縮小しつつ、古墳時代中期にいたる長い期間継続したことが明らかにできたこと、また遺跡において銅製品（？）の生産が行われていたことが確実となったことは、調査期間・範囲などの制約があったにもかかわらず極めて大きな成果であったと言える。

第VI章 確認調査の成果

確認調査の概要

今年度4月～12月まで個人住宅を対象に行なった確認調査は、32件を数える。このうち、9件の調査で遺構等が確認され、うち2件については協議の結果、新免遺跡第50次調査および穗積遺跡第27次調査として本格的な発掘調査を行なうこととなった。なお、これら2件の発掘調査の成果については、来年度に概要報告を行なう予定である。

以下、今年度12月まで行なった確認調査の概要について報告する。次項に掲載した調査地点位置図の番号および各確認調査の番号は、下表の番号に対応する。

第1表 確認調査一覧表

番号	遺跡名	所在地	開業日	調査班別	実効対象面積 (m ²)	遺構の 有無	開発後の地圖	担当者	備考
1	本町遺跡	本町2丁目104	20000420	個人住宅遺跡	92.34	有	西立会田井工	橋口	計画変更
2	曾根遺跡	御領山西3丁目196-3の一部	20000420	個人住宅遺跡	77.62	無	春工	橋田	
3	松井谷遺跡群	東畠中町2丁目95-3	20000511	個人住宅遺跡	67.5	無	春工	根本	
4	岡町北遺跡	岡町北2丁目12	20000511	個人住宅建設	83.35	無	春工	根本	
5	松井谷遺跡群	板の町4丁目88-2の一部	20000518	個人住宅建設	73.35	無	春工	根本	
6	松井谷遺跡群	東畠中町4丁目136-2	20000603	個人住宅建設	50.6	無	春工	根本	
7	曾根遺跡	白旗西町4丁目74-4, 73-2他	20000608	個人住宅建設	94.5	有	春工	船井	
8	穂積遺跡群	宇治第1丁目380	20000615	個人住宅建設	297.61	無	春工	岸内	
9	松井谷遺跡群	東畠中町1丁目102-2, 82-4	20000622	個人住宅建設	87.69	無	春工	岸内	
10	新免遺跡	実井町3丁目103-14	20000713	個人住宅建設	71.46	無	春工	清水	
11	松井谷遺跡群	青山町3丁目4-5	20000810	個人住宅建設	58.8	無	春工	岸内	
12	松井谷遺跡群	水森町2丁目256の一部	20000817	個人住宅建設	61.24	無	春工	岸内	
13	松井谷遺跡群	上野原3丁目10-14	20000831	個人住宅建設	221.69	未確認	春工	橋田	
14	穂積遺跡群	曾根東町1丁目66-4	20000931	個人住宅建設	57.91	有	西立会田井工	橋田	計画変更
15	山ノ上遺跡	立花町1丁目62-3	20000907	個人住宅建設	58.74	未確認	横田工事	岸内	
16	桜塚山遺跡	南坂3丁目38-4	20001005	個人住宅建設	116.6	無	春工	岸内	
17	穂積遺跡	南坂本町3丁目10-3	20001005	個人住宅建設	59.66	無	春工	岸内	
18	小菅根遺跡	北条町1丁目805-7, 8	20001005	個人住宅建設	41.91	無	春工	岸内	
19	穂積遺跡群	弓削東町2丁目77	20001012	個人住宅建設	62.1	無	春工	清水	
20	新免遺跡	玉井町2丁目9	20001012	個人住宅建設	97.86	有	本調査(新免50次)	清水	
21	堀原遺跡	刀削山2丁目232, 232-2, 233	20001023	個人住宅建設	103.71	無	春工	橋田	
22	山ノ上遺跡	立花町1丁目62-1	20001102	個人住宅建設	56.31	有	西立会田	清水	
23	穂積遺跡	柳原山町3丁目105-29	20001103	個人住宅建設	91.09	有	本調査(穂積26次)	橋田	
24	松井谷遺跡群	水森町2丁目253-1	20001109	個人住宅建設	63.76	無	春工	橋田	
25	岡町北遺跡	西町北2丁目15-2	20001109	個人住宅建設	69.14	有	西立会田	橋田	
26	本町遺跡	本町3丁目227-7	20001110	個人住宅建設	34.65	無	春工	清水	
27	穂積遺跡群	曾根東町5丁目58-1号, 58-11号	20001120	個人住宅建設	83.7	無	春工	清水	
28	新免遺跡	立花町1丁目151	20001120	個人住宅建設	46.98	有	西立会田	清水	
29	本町遺跡	本町4丁目61-6	20001207	個人住宅建設	67.07	無	春工	岸内	
30	原田遺跡	原田元町3丁目70-2	20001207	個人住宅建設	92.74	有	西立会田	橋田	
31	本町遺跡	本町3丁目297-4	20001221	個人住宅建設	48.6	有	西立会田	橋田	
32	新免遺跡	米原町1丁目59-8	20001221	個人住宅建設	100.41	無	春工	橋田	



第70図 調査地点位置図（1：50,000）

2000-01 本町遺跡

調査日：平成12年（2000年）4月20日

調査場所：豊中市本町2丁目104

調査対象面積：92.74m²

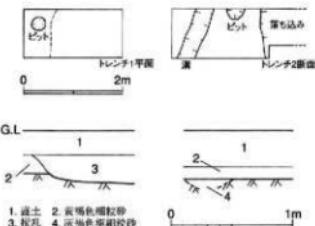
調査の方法：重機によりトレンチ2カ所を掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：トレンチ1において、現表上面より35～40cm下のところで遺構面を検出した。また、トレンチ1・2でそれぞれピット1基・溝1条を検出した。

調査後の処置：基礎掘削深度は遺構面より10cm高いことから、再立会の上工事着工。



第71図 トレンチ掘削状況



第72図 トレンチ平面・断面図

2000-02 曽根遺跡

調査日：平成12年（2000年）4月20日

調査場所：豊中市曾根西町3丁目196-3の一部

調査対象面積：77.62m²

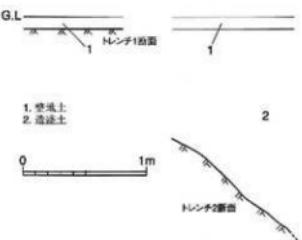
調査の方法：重機によりトレンチ2カ所を掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：トレンチ2にて旧地形を確認したが、敷地内のほとんどは削平されており、遺構等は確認されなかった。

調査後の処置：確認調査後、工事着工



第73図 トレンチ掘削状況



第74図 トレンチ断面図

2000-03 桜井谷窯跡群

調査日：平成12年（2000年）5月11日

調査場所：豊中市東豊中町2丁目95-3

調査対象面積：67.5m²

調査の方法：重機によりトレンチ1カ所を掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：トレンチ1において、現行地表面より70cmほど掘削したが、整地土を確認したにとどまる。

調査後の処置：確認調査後、工事着工



第75図 トレンチ掘削状況

— G.L. —

盛土

0 50cm

第76図 トレンチ断面図

2000-04 岡町北遺跡

調査日：平成12年（2000年）5月11日

調査場所：豊中市岡町北1丁目12

調査対象面積：83.35m²

調査の方法：重機によりトレンチ1カ所を掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：トレンチ内において、明確な遺構等は確認されなかった。



第77図 トレンチ掘削状況

— G.L. —

盛土

0 50cm

調査後の処置：確認調査後、工事着工

第78図 トレンチ断面図

2000-05 桜井谷窯跡群

調査日：平成12年（2000年）5月18日

調査場所：豊中市桜の町4丁目88-2の一部

調査対象面積：75.35m²

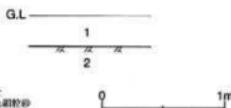
調査の方法：重機によりトレンチ1カ所を掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：地表下20~25cmにて段丘堆積層を確認したが、明確な遺構等は確認されなかつた。

調査後の処置：確認調査後、工事着工。



第79図 トレンチ掘削状況



第80図 トレンチ断面図

2000-06 桜井谷窯跡群

調査日：平成12年（2000年）6月8日

調査場所：豊中市東豊中町4丁目136-2

調査対象面積：50.60m²

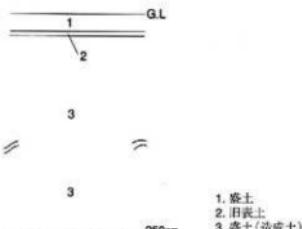
調査の方法：重機によりトレンチ1カ所を掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：地表下2.5mまで掘削したが、整地層を確認するにとどまる。

調査後の処置：確認調査後、工事着工。



第81図 トレンチ掘削状況



第82図 トレンチ断面模式図

2000-07 曽根遺跡

調査日：平成12年（2000年）6月8日

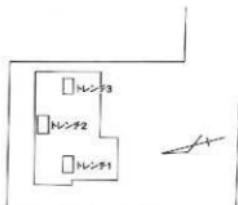
調査場所：豊中市曾根西町4丁目74-4他2筆

調査対象面積：98.50m²

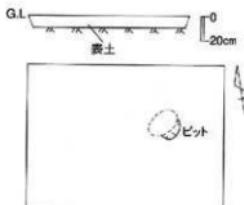
調査の方法：重機によりトレンチ3カ所を掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：トレンチ1において、現表土面より15cm下のところで遺構面を検出し、遺構面上において柱穴1基を確認した。ただし、検出した柱穴の残存状況は悪く、周囲に遺構が広がる可能性は乏しいものと判断される。

調査後の処置：上記の状況から、確認調査後工事着工を指示。



第83図 トレンチ位置図



第84図 トレンチ1平面・断面図

2000-08 桜塚古墳群

調査日：平成12年（2000年）6月15日

調査場所：豊中市中桜塚1丁目380

調査対象面積：297.61m²

調査の方法：重機によりトレンチ2カ所を掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：地表下20cmにおいてて、段丘堆積層を確認したが、明確な遺構等は確認されなかつた。



第85図 トレンチ掘削状況



調査後の処置：確認調査後、工事着工。

第86図 トレンチ断面図

2000-09 桜井谷窯跡群

調査日：平成12年（2000年）6月22日

調査場所：豊中市東豊中町1丁目80-2・82-4

調査対象面積：87.69m²

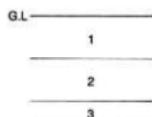
調査の方法：重機によりトレンチ1カ所を掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：地表下1.8mまで掘削したが、兎川に伴う沖積層を確認したが、明確な遺構等は検出されなかった。

調査後の処置：確認調査後、工事着工。



第87図 トレンチ掘削状況



第88図 トレンチ断面図

2000-10 新免遺跡

調査日：平成12年（2000年）7月13日

調査場所：豊中市玉井町3丁目103-14

調査対象面積：71.46m²

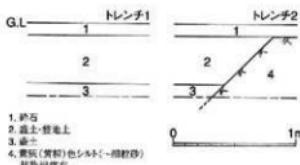
調査の方法：重機によりトレンチ2カ所を掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：トレンチ2の一部にて洪積層を確認したが、敷地は西側に傾く斜面地で、既往の開発による削平も著しく、遺構等は確認されなかった。

調査後の処置：確認調査後、工事着工。



第89図 トレンチ掘削状況



第90図 トレンチ断面図

2000-11 桜井谷窯跡群

調査日：平成12年（2000年）8月10日

調査場所：豊中市宮山町3丁目1-5

調査対象面積：58.80m²

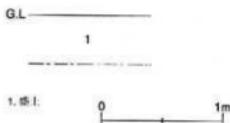
調査の方法：重機によりトレンチ1カ所を掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：敷地中央一帯は、既往の建物により著しく現状が変更されていた。また、現状地形が残る部分では、地表下40cmにて段丘堆積層を確認したが、明確な遺構等は検出されなかった。

調査後の処置：確認調査後、工事着工。



第91図 トレンチ内堆積状況



第92図 トレンチ断面図

2000-12 桜井谷窯跡群

調査日：平成12年（2000年）8月17日

調査場所：豊中市永楽荘2丁目256の一部

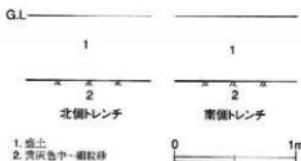
調査対象面積：61.24m²

調査の方法：重機によりトレンチ2カ所を掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：地表下55cmにて段丘堆積層を確認したが、遺構等は検出されなかった。



第93図 トレンチ掘削状況



調査後の処置：確認調査後、工事着工。

第94図 トレンチ断面図

2000-13 桜井谷窯跡群

調査日：平成12年（2000年）8月31日

調査場所：豊中市上野東3丁目10-14

調査対象面積：221.69m²

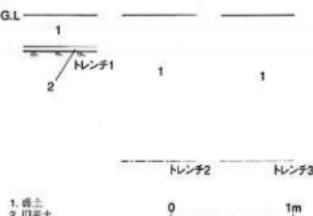
調査の方法：重機によりトレンチ3カ所を掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：トレンチ1において、現表土面より30cm下のところで段丘堆積層包含層を検出したが、他のトレンチでは120cmまで擾乱による削平をうけていることを確認した。

調査後の処置：確認調査後、工事着工。



第95図 トレンチ掘削状況



第96図 トレンチ断面図

2000-14 桜塚古墳群

調査日：平成12年（2000年）8月31日

調査場所：豊中市曾根東町1丁目66-4

調査対象面積：57.91m²

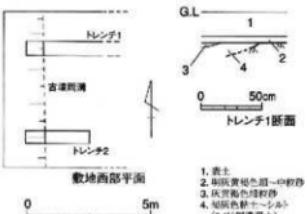
調査の方法：重機によりトレンチ3カ所を掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：トレンチ1・2において、地表下25cmのところで古墳周溝を確認した。桜塚古墳群第7次調査で確認した古墳周溝の一部となる可能性が想定できる。

調査後の処置：基礎掘削深度の変更を行い、再立会の上、工事着工。



第97図 トレンチ掘削状況



第98図 トレンチ平面・断面図

2000-15 山ノ上遺跡

調査日：平成12年（2000年）9月7日

調査場所：豊中市立花町1丁目62-3

調査対象面積：58.74m²

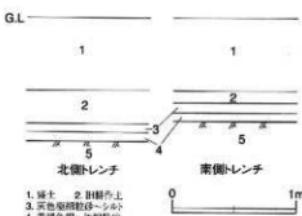
調査の方法：重機によりトレンチ2カ所を掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：トレンチ1において、表土下より1.0mのところで段丘堆積層を確認し、上面で耕作痕を検出したが、これ以外に明確な遺構は確認されなかった。

調査後の処置：確認調査後、再立会の上、工事着工。



第99図 トレンチ掘削状況



第100図 トレンチ断面図

2000-16 桜塚古墳群

調査日：平成12年（2000年）10月5日

調査場所：豊中市南桜塚1丁目38-4

調査対象面積：116.6m²

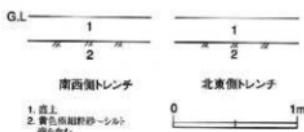
調査の方法：重機によりトレンチ2カ所を掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：地表下20cmのところで段丘堆積層を確認したが、明確な遺構等は検出されなかつた。

調査後の処置：確認調査後、工事着工。



第101図 トレンチ掘削状況



第102図 トレンチ断面図

2000-17 服部遺跡

調査日：平成12年（2000年）10月5日

調査場所：豊中市服部本町5丁目10-3

調査対象面積：59.66m²

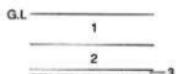
調査の方法：重機によりトレンチ1カ所を掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：地表下50cmまで掘削したが、整地層内にとどまり、造構の有無については確認できなかった。

調査後の処置：基礎掘削は整地層内にとどまる
ことから、確認調査後、工事着工。



第103図 トレンチ掘削状況



1. 地上
2. 田耕作土
3. 黄褐色～暗褐色
部分による変色有。

第104図 トレンチ断面図

2000-18 小曾根遺跡

調査日：平成12年（2000年）10月5日

調査場所：豊中市北条町1丁目305-7・8

調査対象面積：41.91m²

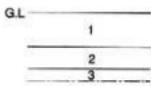
調査の方法：重機によりトレンチ1カ所を掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：地表下55cmまで掘削したが、整地層内にとどまり、造構等の有無については確認できなかった。

調査後の処置：基礎掘削は整地層内にとどまる
ことから、確認調査後、工事着工。



第105図 トレンチ内堆積状況



1. 地上
2. 田耕作土
3. 黄褐色～暗褐色
部分による変色有。

第106図 トレンチ断面図

2000-19 桜塚古墳群

調査日：平成12年（2000年）10月12日

調査場所：豊中市曾根東町1丁目77

調査対象面積：62.10m²

調査の方法：重機によりトレンチ2カ所を掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：地表下30~40cmにおいて、段丘堆積層を確認したが、明確な遺構等は検出されなかった。なお、当敷地東方は谷地形に伴う斜面堆積の様相を呈する。



第107図 トレンチ掘削状況



調査後の処置：確認調査後、工事着工。

第108図 トレンチ断面図

2000-20 新免遺跡

調査日：平成12年（2000年）10月12日

調査場所：豊中市玉井町2丁目9

調査対象面積：97.86m²

調査の方法：重機によりトレンチ2カ所を掘削し、トレンチ内を精査した。

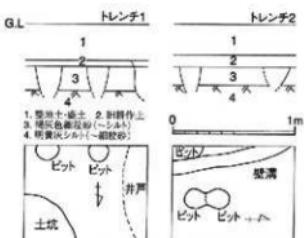
調査の概要：トレンチ1・2とも地表下35cmにて遺物包含層を、また50~55cmにて遺構面を確認した。各トレンチにおいて、柱穴・住居壁溝・土坑などの遺構を検出し、敷地周辺は遺構が密集して分布するものと考えられる。

調査後の処置：協議後、発掘調査を行う。

（新免遺跡第50次調査）



第109図 トレンチ掘削状況



第110図 トレンチ平面・断面図

2000-21 柴原遺跡

調査日：平成12年（2000年）10月26日

調査場所：豊中市刀根山町2丁目232他2筆

調査対象面積：103.71m²

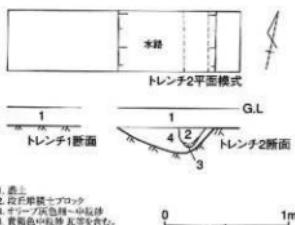
調査の方法：重機によりトレンチ2カ所を掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：トレンチ2において、地表下15cmのところで近世の水路跡を検出したほかに、遺構等は確認されなかった。

調査後の処置：確認調査後、工事着工。



第111図 トレンチ掘削状況



第112図 トレンチ平面・断面図

2000-22 山ノ上遺跡

調査日：平成12年（2000年）11月2日

調査場所：豊中市立花町1丁目62-1

調査対象面積：56.31m²

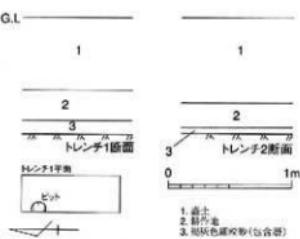
調査の方法：重機によりトレンチ2カ所を掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：地表下85~90cmのところで遺物を含む褐灰色細粒砂層を、また95cmのところで、段丘堆積層を確認した。段丘堆積層上面において明確な遺構は確認されなかった。

調査後の処置：基礎掘削は、整地層内にとどまることから、確認調査後、工事着工。



第113図 トレンチ掘削状況



第114図 トレンチ平面・断面図

2000-23 穂積遺跡

調査日：平成12年（2000年）11月2日

調査場所：豊中市服部西町3丁目105-29

調査対象面積：91.09m²

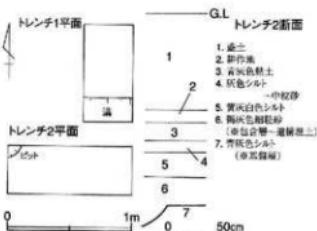
調査の方法：重機によりトレント2カ所を掘削し、トレント内を精査した。

調査の概要：トレント1・2において、表土下1.45mのところで遺物包含層を、また1.6m下の遺構面上で、溝1条・柱穴1基を確認した。

調査後の処置：協議の結果、発掘調査を行うこととなった。（穂積遺跡第28次調査）



第115図 トレント掘削状況



第116図 トレント平面・断面図

2000-24 桜井谷窯跡群

調査日：平成12年（2000年）11月9日

調査場所：豊中市永楽荘2丁目253-1

調査対象面積：63.76m²

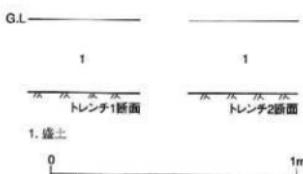
調査の方法：重機によりトレント2カ所を掘削し、トレント内を精査した。

調査の概要：地表下30cmのところで、段丘堆積層を確認したが、明確な遺構等は検出されなかった。

調査後の処置：確認調査後、工事着工。



第117図 トレント掘削状況



第118図 トレント断面図

2000-25 岡町北遺跡

調査日：平成12年（2000年）11月9日

調査場所：豊中市岡町北2丁目15-2

調査対象面積：69.14m²

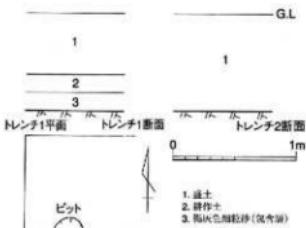
調査の方法：重機によりトレンチ2カ所を掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：トレンチ1において、現表土面より80cm下のところで遺構面を確認した。また、遺構面上において柱穴1基を検出した。

調査後の処置：基礎掘削は整地層内にとどまるところから、再立会の上、工事着工。



第119図 トレンチ掘削状況



第120図 トレンチ平面・断面図

2000-26 本町遺跡

調査日：平成12年（2000年）11月30日

調査場所：豊中市本町3丁目227-7

調査対象面積：34.65m²

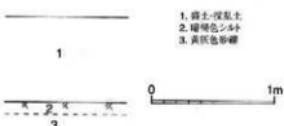
調査の方法：重機によりトレンチ2カ所を掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：地表下80cmのところで段丘堆積層を確認したが、明確な遺構等は検出されなかった。

調査後の処置：確認調査後、工事着工。



第121図 トレンチ内堆積状況



第122図 トレンチ断面図

2000-27 服部遺跡

調査日：平成12年（2000年）11月30日

調査場所：豊中市曾根東町5丁目58-1・11他

調査対象面積：83.70m²

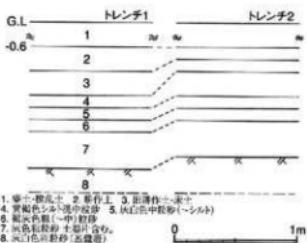
調査の方法：重機によりトレンチ2カ所を掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：表上下1.8mまで掘削したが、明確な造構等は確認されなかった。

調査後の処置：確認調査後、工事着工。



第123図 トレンチ内堆積状況



第124図 トレンチ断面図

2000-28 新免遺跡

調査日：平成12年（2000年）11月30日

調査場所：豊中市立花町1丁目151

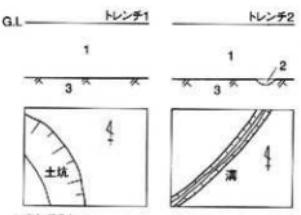
調査対象面積：46.98m²

調査の方法：重機によりトレンチ2カ所を掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：表土下45cmのところで、段丘堆積層を確認し、各トレンチで溝・土坑を検出した。



第125図 トレンチ掘削状況



第126図 トレンチ平面・断面図

調査後の処置：基礎掘削は造成土内にとどまるところから慎重工事を指示した上、工事着工。

2000-29 本町遺跡

調査日：平成12年（2000年）12月7日

調査場所：豊中市本町4丁目61-6

調査対象面積：67.07m²

調査の方法：重機によりトレンチ1カ所を掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：地表下60cmにおいて旧耕作土層を確認したが、当敷地は既往の建物基礎による搅乱で大半は削平されたもとと判断される。

調査後の処置：基礎掘削は造成土内にとどまるところから、確認調査後、工事着工。



第127図 トレンチ掘削状況



第128図 トレンチ断面図

2000-30 原田遺跡

調査日：平成12年（2000年）12月7日

調査場所：豊中市原田元町3丁目70-2

調査対象面積：92.74m²

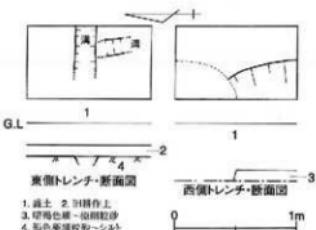
調査の方法：重機によりトレンチ2カ所を掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：トレンチ1では地表下30cmのところで段丘堆積層を確認し、その上面で清2条を検出した。また、トレンチ2では地表下38cmのところで遺構埋土と推定できる暗褐色細粒砂層を確認した。

調査後の処置：建物の基礎は、遺構面に及ばないことから再立会の上、工事着工。



第129図 トレンチ掘削状況



第130図 トレンチ平面・断面図

2000-31 本町遺跡

調査日：平成12年（2000年）12月21日

調査場所：豊中市本町3丁目297-4

調査対象面積：48.60m²

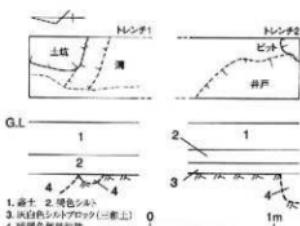
調査の方法：重機によりトレンチ2カ所を掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：トレンチ1において、現表土面より27cm下のところで包含層を、43cmのところで遺構面を確認し、上面において上坑1基を検出した。また、トレンチ2では遺構面上において、柱穴1基を確認した。

調査後の処置：基礎掘削深度の変更により、再立会の上、工事着工。



第131図 トレンチ掘削状況



第132図 トレンチ平面・断面図

2000-32 新免遺跡

調査日：平成12年（2000年）12月21日

調査場所：豊中市末広町1丁目59-8

調査対象面積：100.41m²

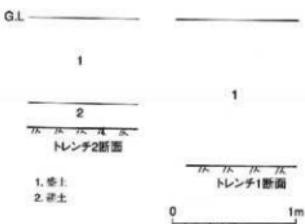
調査の方法：重機によりトレンチ2カ所を掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：地表下1~1.2mのところで、段丘堆積層を確認したが、明確な遺構等は確認されなかった。

調査後の処置：確認調査後、工事着工。



第133図 トレンチ掘削状況



第134図 トレンチ断面図

図 版

図版 1 原田遺跡第3次調査



(1) 調査区東部全景（東から）



(2) 堀1 完掘状況（北西から）



(1) 調査区西部全景（北から）



(2) 井戸1断面（北西から）

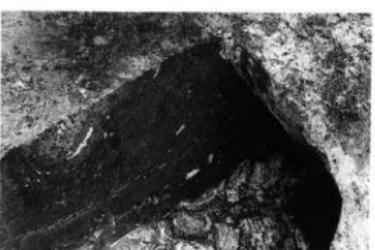
(1) 堀1断面（調査区東壁）



(2) 堀1断面（調査区南壁）

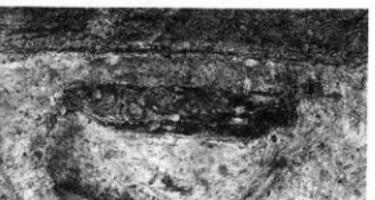


(3) 土坑1断面（北から）



(4) 土坑1断面（拡大）

(5) ピット1断面（北から）





(1) 調査区全景（南西から）



(2) B区全景（南から）

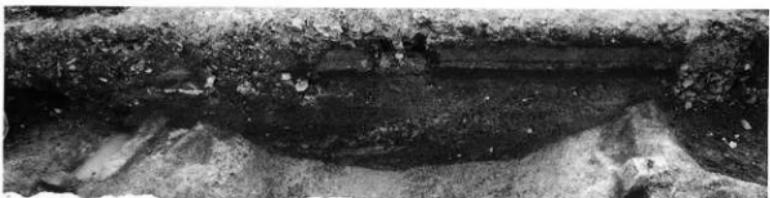
図版 5 原田遺跡第4次調査



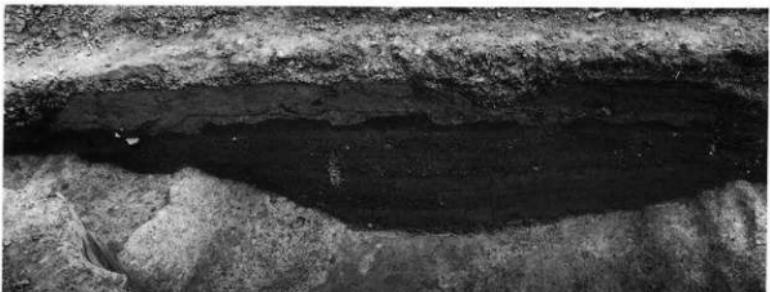
(1) A区全景(南から)



(2) C区全景(西から)



(3) A区 堀1断面(西壁)



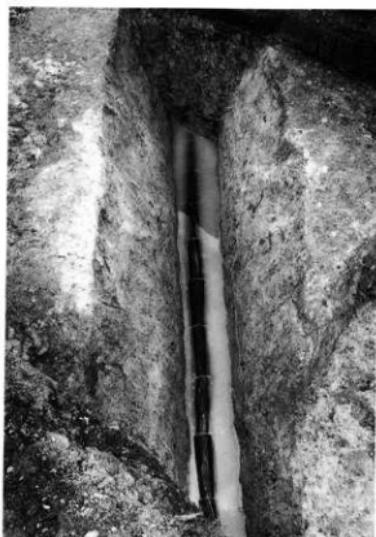
(4) C区 堀1断面(南壁)



(1) 井戸1断面（北西から）



(2) 溝2 升状施設検出状況



(3) 溝2 土管検出状況